

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十八冊

国分寺六ツ目古墳

1997. 8

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告第28冊
国分寺六ツ目古墳

正誤表

位 置	誤	正
95頁4行目	(第54図)	(第54・60図)

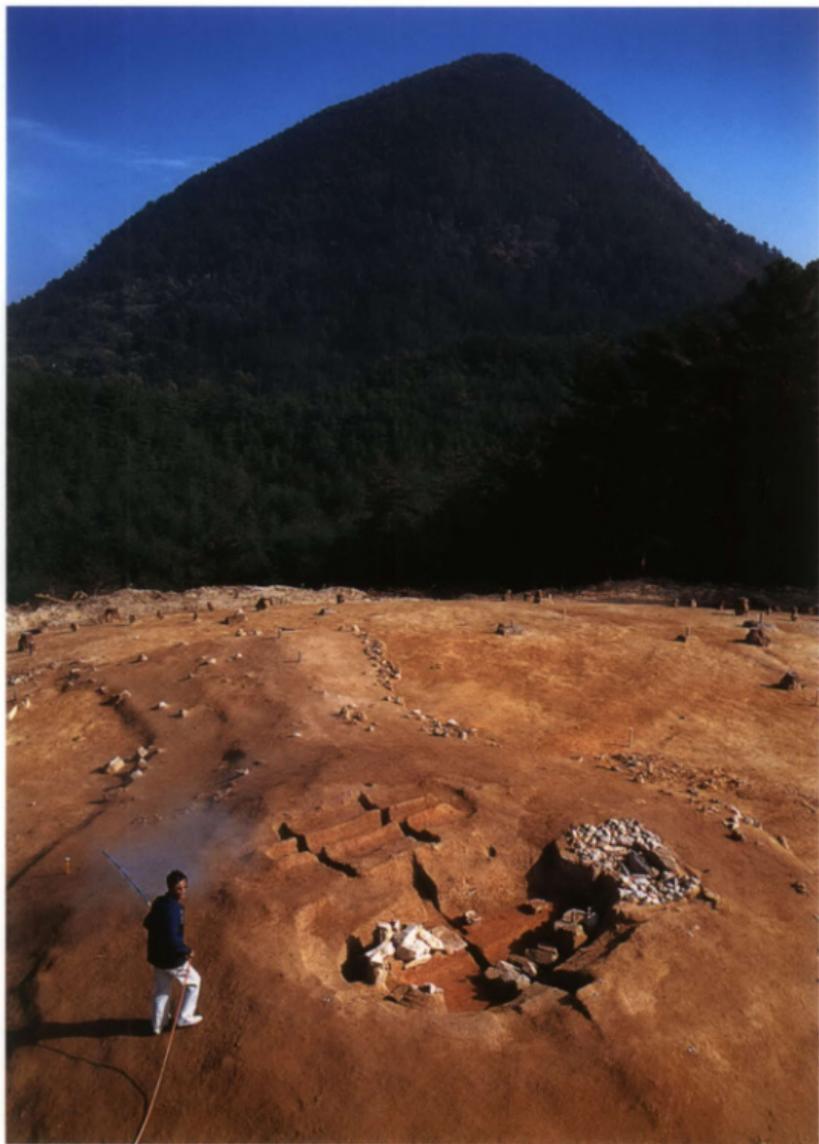
四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十八冊

国分寺六ツ目古墳

1997. 8

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団



国分寺六ツ目古墳と六ツ目山



国分寺六ツ目古墳第1 主体部出土広口壺

序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了いたしました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土文化財の整理業務を順次行っているところであり、平成4年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十八冊」として刊行いたしますのは、綾歌郡国分寺町福家に所在する国分寺六ツ目古墳についてであります。国分寺六ツ目古墳は、今回の発掘調査によって国分寺町において初めて確認された古墳時代前期の前方後円墳であります。前方後円墳は古墳時代の政治、社会、文化を代表する歴史的遺産であり、その重要性に鑑みて、慎重に現地調査や整理作業を進めてまいりました。現地調査終了後、関係機関の御尽力により埋葬主体部の移築保存と周辺整備が行われましたことは、文化財保護思想の普及啓発に大いに寄与するものであると考えます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成9年8月

香川県教育委員会

教育長 金森越哉

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第28冊で、香川県綾歌郡国分寺町福家字六ツ目で実施した国分寺六ツ目古墳の発掘調査成果を取録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は次の期間で実施した。

予備調査～第2次調査	平成元年8月30日から同年11月30日
第3次調査	平成2年8月23日から同年9月5日
4. 調査の実施にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

(順不同、敬称略)

香川県土木部横断道対策室、坂出土木事務所横断道対策室、国分寺町土木部高速自動車道担当、四国横断自動車道建設国分寺地区対策協議会、地元自治会、国分寺町教育委員会、国分寺町議会、大阪府文化財調査研究センター、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、徳島県埋蔵文化財調査センター、高松市歴史資料館、高松市教育委員会、善通寺市教育委員会、長尾町教育委員会、瀬戸内海歴史民俗資料館

5. 本報告書の作成は、香川県教育委員会の指導のもとに財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
6. 本報告書の執筆、編集は、第5章を除き森下英治が担当した。
7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
8. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関等に鑑定・分析などを依頼・委託し、その成果を第5章に掲載した。(敬称略)

石棺石材・赤色粘土分析

東京大学理学部地質学教室 朽津 信明
(現 東京国立文化財研究所)

出土土器胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

種子等同定

榎バリノ・サーヴェイ

9. 脚注及び参考文献は、第5章を除き巻末にまとめた。

10. 発掘調査および報告書の作成にあたって、下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。(順不同、敬称略)

近江秀俊，大庭重信，國木健司，近藤 玲，菅原康夫，笹川龍一，高畑知巧，谷若倫夫，都出比呂志，藤井雄三，北條芳隆，真鍋篤行，松尾忠幸，松本敏三，山元敏裕，若林邦彦

本文目次

第1章 調査経過	1
1) 周辺の地理と遺跡	1
2) 調査経過	8
第2章 墳丘の調査	17
1) 墳丘の立地	17
2) 墳丘の構造	29
3) 墳丘出土の遺物	42
第3章 埋葬施設の調査	46
1) 第1主体部	46
2) 第2主体部	60
3) 第3主体部	62
第4章 その他の遺構・遺物	68
1) 石組遺構	68
2) その他の出土遺物	68
第5章 自然科学的考察	70
1) 地質学から見た国分寺六ツ目古墳	70
2) 国分寺六ツ目古墳出土土器の胎土分析	81
3) 第1主体部出土広口壺埋土中の炭化種子鑑定	87
第6章 考古学的考察	88
1) 国分寺六ツ目古墳出土広口壺の編年的位置	88
2) 国分寺六ツ目古墳の墳丘と内部構造について	97

挿 図 目 次

第1図	国分寺六ツ目古墳の位置	1
第2図	周辺の遺跡分布図	2
第3図	四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(高松～善通寺)	9
第4図	調査風景(第1次調査)	12
第5図	古墳周辺地形図	12
第6図	工事設計と古墳の位置	13
第7図	工事設計と古墳の断面位置	13
第8図	調査風景(第2次調査)	14
第9図	調査風景(第3次調査)	14
第10図	移築後の第1主体部	15
第11図	移築復元された国分寺六ツ目古墳	15
第12図	調査前地形測量図(1/300)	18
第13図	墳丘概要図(1/100)	19~20
第14図	後円部墳丘断面図1(1/40)	21~22
第15図	後円部墳丘断面図2(1/40)	23~24
第16図	前方部墳丘断面図1(1/40)	25~26
第17図	前方部墳丘断面図2(1/40)	27~28
第18図	後円部盛土範圍と盛土断面図取得位置図	35
第19図	後円部盛土断面図	36
第20図	列石遺存部平・断面図(1/40)	37~38
第21図	墳裾確認点と墳丘形態復元図	41
第22図	墳丘遺物出土状況平面図	43
第23図	墳丘出土土器1(1/4)	44
第24図	墳丘出土土器2(1/4)	45
第25図	第1主体部盗掘坑完掘状況平面図・立面図(1/40)	46
第26図	第1主体部平面図・立面図(1/30)	47~48
第27図	第1主体部断面図(1/30)	49~50
第28図	第1主体部副葬品(鉄器類)出土状況	53
第29図	第1主体部副葬品(土器)出土状況(1/15)	55
第30図	第1主体部出土遺物(鉄器類)(1/2)	58
第31図	第1主体部出土遺物(土器)(1/4)	59

第32図	第2主体部平面図・断面図 (1/40)	61
第33図	第3主体部上面検出状況 (1/20)	63
第34図	第3主体部蓋石除去段階平面図・断面図 (1/20)	64
第35図	第3主体部第2棟敷面及び棺内断面図 (1/20)	65
第36図	第3主体部基坑平面図 (1/20)	66
第37図	石組遺構平面図・断面図 (1/20)	68
第38図	石組遺構出土遺物 (1/4)	68
第39図	その他の出土遺物 1 (1/4)	69
第40図	その他の出土遺物 2 (1/2)	69
第41図	国分寺六ツ目古墳周辺の地質概要 (Sato, 1992をもとに作成)	70
第42図	五色台周辺地域の地質図	71
第43図	X線回折による国分寺六ツ目古墳 第1主体部棺床粘土の回折パターン	73
第44図	第1主体部棺床粘土の偏光顕微鏡写真 (直行ニコル)	75
第45図	第3主体部石棺石材の蓋の部分の偏光顕微鏡写真 (直行ニコル)	75
第46図	六ツ目山の安山岩の偏光顕微鏡写真 (直行ニコル)	76
第47図	五色台の溶岩流 (IV) の偏光顕微鏡写真 (直行ニコル)	76
第48図	K ₂₀ -CaO 散布図 国分寺六ツ目古墳出土土器と下川津B類 (上天神遺跡, 八丁地遺跡, 仲善寺遺跡) 土器との比較	85
第49図	Sr-Rb 散布図 国分寺六ツ目古墳出土土器と 下川津B類 (上天神遺跡, 八丁地遺跡, 仲善寺遺跡) 土器との比較	85
第50図	土師器胎土グループ別分布状況	86
第51図	各遺跡出土の広口壺	90
第52図	胴部形状分類図	92
第53図	口頸部の大きさと口縁部外反度の相関グラフ	92
第54図	讃岐 (阿讃) 系壺の体部形態と古墳出土広口壺	96
第55図	香川県内の前方後円墳の規模	97
第56図	埋葬施設の主軸方位	99
第57図	墳丘盛土と第1主体部基坑の関係	101
第58図	第1主体部の構築手順模式図	103
第59図	第1主体部構造物の類例	106
第60図	壺型埴輪祭式の変遷	111
付図1	国分寺六ツ目古墳周辺地形図 (1/100)	
付図2	国分寺六ツ目古墳墳丘測量図 (1/50)	

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	3
第2表	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要(1)	10
第3表	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要(2)	11
第4表	調査体制表(1)	16
第5表	調査体制表(2)	16
第6表	赤色粘土の化学組成	73
第7表	石棺石材及び原石の化学組成	77
第8表	国分寺六ツ目古墳出土土器の胎土分析値(%)	84
第9表	器面調整属性表	93
第10表	器形と調整の相関表	93
第11表	土器編年と古墳編年の対比	96
第12表	丸亀平野南東部における棺底構造の変遷	107
第13表	主体部土器副葬古墳一覧	108

図 版 目 次

- 図版1 国分寺六ツ目古墳遠景(南東より)
国分寺六ツ目古墳全景
(丘陵部側から国分寺平野を望む)
- 図版2 墳丘全景
- 図版3 後円部埋葬主体部全景(南東より)
第1主体部(南東より)
- 図版4 第2主体部(西より)
第3主体部粘土被覆状況(北より)
第3主体部(南より)
- 図版5 第1主体部土器出土状況(上面より)
第1主体部土器出土状況(東より)
- 図版6 平野部から見た国分寺六ツ目古墳
説明会風景
- 図版7 墳丘全景(南東より)
墳丘全景(北東より)
- 図版8 後円部南東側列石検出面
後円部南西側墳丘検出面
- 図版9 墳丘検出状況(後円部〜くびれ部)
墳丘検出状況(前方部)
- 図版10 前方部墳裾列石(北東より)
後円部K-Lライン 列石下部土層
- 図版11 後円部下端立石(南西端)
後円部墳裾(南西より)
- 図版12 後円部C-Dライン盛土断面(西より)
後円部盛土状況(西より)
- 図版13 後円部A-Bライン
前方部A-Bライン
前方部前端A-Bライン
前方部前端A-Bライン
くびれ部西側墳裾(北より)
くびれ部M-Nライン
- 図版14 墳丘完掘状況(前方部より)
前方部西側土器群出土状況
- 図版15 後円部主体部検出状況(南東より)
第1主体部盗掘坑掘削状況(南東より)
- 図版16 第1主体部割竹形木棺痕跡検出状況
(南東より)
第1主体部横断面土層(南東より)
第1主体部棺外副葬品検出状況
(南東より)
- 図版17 第1主体部棺外副葬品検出状況
(棺西側)
第1主体部副葬品検出状況(南東より)
第1主体部鉄刀出土状況(東より)
第1主体部鉄剣出土状況(北東より)
第1主体部鉄斧・ヤリガンナ出土状況
(北東より)
- 図版18 第1主体部北西側石礎
第1主体部南東側石礎
第1主体部中央南側石礎
第1主体部北西小口部広口壺出土状況
広口壺取り上げ後
第1主体部棺床断面(東より)
- 図版19 第2主体部調査状況(南東より)
第2主体部完掘状況(南東より)
第2主体部棺床断面(南東より)
- 図版20 第3主体部被覆粘土除去状況(北東より)
第3主体部石棺上面検出状況(北東より)
第3主体部石棺上面粘土被覆状況
(北西より)
- 図版21 第3主体部礎敷面(南東より)
第3主体部棺周辺礎除去状況(北東より)

図版22 第3主体部棺底粘土分布状況(南西より)

第3主体部墓坑完掘状況(南西より)

第3主体部棺底断面(南東より)

図版23 石組遺構 SX-01遺物出土状況

(北西より)

石組遺構 SX-01礫床面検出状況

(北西より)

石組遺構 SX-01礫床除去状況

(南西より)

石組遺構 SX-01完掘状況

図版24 第1主体部出土土器

図版25 第1主体部出土鉄器

図版26 第1主体部出土鉄器

図版27 墳丘出土遺物

図版28 墳丘出土遺物

図版29 墳丘出土遺物

図版30 その他の出土遺物

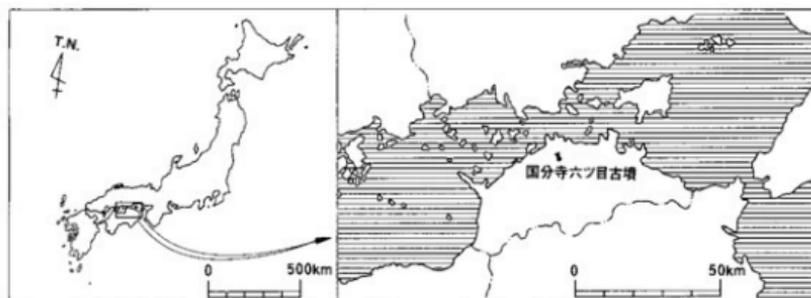
第1章 調査経過

1) 周辺の地理と遺跡

瀬戸内海に面する讃岐平野は、吉野川北岸を東西方向に走行する標高1,000mほどの讃岐山脈に端を発して北流する中小河川によって形成された沖積平野である。これらの沖積平野は、瀬戸内火山活動によって形成された多数の独立丘陵によって分断されている。そのうち主な平野は、西から三豊平野、丸亀平野、高松平野の順で存在し、その内部や水系境においても小規模な平野や盆地をみることができる。

国分寺六ツ目古墳が位置する国分寺平野は、標高300mほどの堂山山塊を介して高松平野の西側に位置する逆三角形の平面形をもつ小平野である。平野中央には本津川が北流する。本津川は高松平野南部の香南町を源として、国分寺平野を北流し、再び山塊北側で高松平野に入って西辺部を北流した後に瀬戸内海に注ぐものである。このように水系的には国分寺平野は高松平野と係わりが深い。しかし、平野周囲の山塊間の低い谷を介して、南の羽床盆地や北西の綾北平野とも容易に行き交うこともできる。古代の南海道が国分寺平野内の何処かを通過していたことは明らかで、そのような意味で讃岐の東西を結ぶ交通上の要所であるとも言える。現在の行政区分上は、国分寺平野の全域が綾歌郡国分寺町に属している。

国分寺六ツ目古墳は堂山山塊の一角である六ツ目山の西麓に立地している。六ツ目山は讃岐地方に特徴的に分布する円錐丘陵の典型的な山のひとつで、高松平野側からも、国分



第1図 国分寺六ツ目古墳の位置



第2図 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構	遺物
1	園分台遺跡	坂出市神谷町赤峰・園分寺新居	旧石器	原産地遺跡	ナイフ形石器等
2	中間西井埴遺跡	高松市中間町西井埴	旧石器	石製ブロック	角錐状石器等
3	大池遺跡	高松市木太町一区	縄文		有古尖頭器
4	東山崎水田遺跡	高松市東山崎町水田	縄文		有古尖頭器
5	園分寺六ツ目遺跡	綾歌郡園分寺町福家六ツ目	縄文	石材集積土坑	石器製作跡
6	前田東中村遺跡	高松市前田東町中村	縄文	自然河川	後晩期土器
7	小山・南谷遺跡	高松市高松町	縄文	自然河川	後晩期土器
8	竹元遺跡	高松市東植田町	縄文・弥生	包含層	晩期土器
9	林坊城遺跡	高松市林町坊城	縄文・弥生	自然河川	凸帯文土器・木製農具
10	天満宮西遺跡	高松市松島町天満・宮西	弥生		
11	浴長池1遺跡	高松市林町長池	弥生	水田跡	
12	明神原遺跡	坂出市加茂町	弥生		銅鐸
13	内間遺跡	綾歌郡綾南町内間	弥生		銅鐸
14	下ノ山遺跡	高松市藤原町	弥生		銅矛
15	空港跡地遺跡	高松市林町	弥生～近世	集落遺構	
16	園分寺下日名代遺跡	綾歌郡園分寺町福家日名代	弥生	包含層・溝	中期後半
17	久米池南遺跡	高松市新田町	弥生	高地性集落	後期初頭
18	摺鉢谷遺跡	高松市峰山町	弥生	高地性集落	後期初頭
19	鳥帽子山遺跡	坂出市加茂町本鶴山ノ神	弥生	高地性集落	後期初頭
20	上天神遺跡	高松市上天神町	弥生	集落跡	後期前半
21	太田下須川遺跡	高松市太田下須川	弥生	集落跡	後期中葉
22	浴松ノ木遺跡	高松市林町松ノ木	弥生	自然河川	後期後半
23	通谷遺跡	高松市三谷町	弥生	墳丘墓	
24	鶴尾神社4号墳	高松市西春日町	弥生	積石塚前方後円墳	銅鏡・供獻土器
25	霧塚古墳	高松市峰山町・鶴市町御殿	古墳	積石塚双方中円墳	銅鏡・銅鏃・銅剣ほか
26	諏訪神社古墳	高松市東山崎町久米山諏訪神社	弥生	墳丘墓	土器枕
27	高松茶臼山古墳	高松市東山崎町・新田町・前田西町	古墳	前方後円墳	銅鏡・鉄形石・鉄鏃
28	縮山1号墳	高松市三谷町三谷	古墳	前方後円墳	
29	がめ塚古墳	高松市勸使町小山	古墳	前方後円墳	
30	横立山経塚古墳	高松市中山町	古墳	前方後円墳	
31	龜山古墳群1号墳	坂出市林田町龜山	古墳	積石塚前方後円墳	
32	タイバイ山古墳	坂出市府中町北谷	古墳	前方後円墳	
33	横山経塚1号墳	綾歌郡綾南町栗築	古墳	積石塚前方後円墳	
34	舊ノ山神社境内石棺	綾歌郡園分寺町新名	古墳	二次移動	石棺未製品
35	快天山古墳	綾歌郡綾南町栗築東若狹	古墳	前方後円墳	石棺3基・銅鏡
36	三谷石舟古墳	高松市三谷町	古墳	前方後円墳	石棺
37	今岡古墳	高松市鬼無町佐科・佐藤	古墳	前方後円墳	陶棺
38	石船塚古墳	高松市峰山町	古墳	積石塚前方後円墳	石棺
39	船岡山古墳	香川郡香川町浅野船岡	古墳	前方後円墳	石棺
40	長崎島古墳	高松市鹿島西町長崎	古墳	前方後円墳	石棺
41	御殿天神社古墳	高松市御殿町西山	古墳	前方後円墳	
42	矢塚・弓塚古墳群	高松市中間町峠	古墳	群集墳	
43	西山崎古墳群	高松市西山崎町	古墳	群集墳	
44	本免寺古墳群	高松市西山崎町上上	古墳	群集墳	
45	福家古墳	綾歌郡園分寺町福家本村	古墳		箱式石棺
46	高野丸山古墳	高松市川島本町高野中	古墳	大形円墳	
47	相作牛塚古墳	高松市鶴市町相作	古墳		輪軸V期
48	岡の御堂1号墳	綾歌郡綾南町滝宮岡の御堂	古墳	円墳	甲冑
49	石ヶ島古墳	綾歌郡園分寺町新名石島	古墳	横穴式石室	
50	浄願寺山古墳群	高松市飯田町東山・西春日町南山浦	古墳	横穴式石室	馬具類
51	小山古墳	高松市新田町小山	古墳	横穴式石室	
52	山下古墳	高松市新田町山下	古墳	横穴式石室	

53	久本古墳	高松市新田町久本甲	古墳	横穴式石室、石櫃	銅鏡
54	山下廃寺	高松市新田町山下	古代		
55	古宮権現古墳	高松市鬼無町山口神高	古墳	横穴式石室	
56	鬼無大塚古墳	高松市鬼無佐藤	古墳	横穴式石室	
57	平木1号墳	高松市鬼無町佐藤	古墳	横穴式石室	
58	御願大塚古墳	高松市御願町大塚	古墳	横穴式石室	
59	勝賢廃寺	高松市香西町奥の堂	古代		
60	新宮古墳	坂出市府中町新宮	古墳	横穴式石室	
61	綾織塚古墳	坂出市加茂町山ノ神	古墳	横穴式石室	
62	開法寺跡	坂出市府中町本村上所	古代	塔基壇	高句麗系瓦
63	屋島城跡	高松市屋島東町	古代	石塁等	
64	城山城跡	坂出市川津町・西庄町・府中町	古代	水門・土塁等	
65	讃岐国府跡	坂出市府中町字本村上所	古代	倉庫跡	
66	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺町国分字上所	古代		
67	讃岐国分尼寺跡	綾歌郡国分寺町新居東川西	古代		
68	推定南海道		古代		
69	府中山内瓦窯跡	坂出市府中町前谷下所	古代		国分寺所用瓦
70	十瓶山窯跡群	綾歌郡綾南町	古代		

第1表 周辺遺跡一覧表

寺平野側からもその精美な姿を見上げることができる。標高は317mと堂山山塊中ではもっとも高く、山頂からは高松平野のほぼ全域と、西側は讃岐国府推定地が存在する綾北平野の南端部を見下ろすことができる。

古墳から高松平野側への眺望は、堂山山塊によって遮断される。ただし古墳前方部の方向へは、良く晴れた日に限って、丘陵の合間に本津川下流域とその背後の瀬戸内海を望むことができる。国分寺平野側への眺望は絶好で、ほぼ全域を見下ろせる。

瀬戸内火山活動によって¹⁾形成された火山岩類は、堅固な石質や割りやすい流状石理を利用して、道具、工作物、構築物等に使用され人々の歴史と深く関わってきた。そのうち、石器石材として旧石器時代から弥生時代まで使用された「サヌカイト」や古墳の石棺に使用された「角閃安山岩」はこの国分寺平野周辺で産出するものである。

平野北側に広がる五色台山塊は標高400mほどのメサ状地形が広範囲に広がり、その南半部を中心として「サヌカイト」岩脈が確認される²⁾。国分台遺跡³⁾はその岩脈の分布と重なる旧石器時代の原産地遺跡で、大量のナイフ形石器や翼状剥片が出土している。原産地から5kmほど西に離れるが、六ツ目山北東麓に位置する中間西井坪遺跡⁴⁾においても角錐状石器、ナイフ形石器を多数製作した石器ブロックが確認されている。国分寺平野北部地域は⁵⁾このように旧石器時代の集団の遊動活動における石材獲得のための回帰⁶⁾の場であった。

縄文時代の遺跡は多くない。草創期の有舌尖頭器が大池遺跡⁷⁾、東山崎水田遺跡⁸⁾、十川東平田遺跡で出土しているが、それ以降、後期までの遺跡の分布は知られていない。ただし、

国分寺六ツ目遺跡⁹⁾では土器の出土はないが石鎌や石匙多数と、サヌカイトの板状素材集積遺構が検出されており、縄文時代前半期の可能性がある。

縄文後期の磨消縄文系土器を出土する遺跡は近年特に増えてきた。前田東中村遺跡¹⁰⁾、小山南谷遺跡¹¹⁾、竹元遺跡¹²⁾など丘陵を控えた緩傾斜地に立地する共通性が窺える。一定量の打製石鎌を組成している点は注目される。

凸帯文系土器を出土する晩期後半の遺跡はさらに多くなり、林坊城遺跡¹³⁾を中心として高松平野中央部への進出が認められる。居住遺構は未確認であり今後の調査が期待される。林坊城遺跡では木製農具やイネ花粉が検出されており、稲作が開始されていたことは間違いない。大陸系磨製石器が認められず、打製石鎌が多い点は在来の生業形態に稲作が取り込まれた可能性を示唆している。

弥生時代前期に至ると、天満宮西遺跡¹⁴⁾で環濠集落がみられるとともに、大陸系磨製石器が出現する。しかし、出現段階ですでに瀬戸内地方の地域性を帯びた形式を備え、また、浴長池遺跡¹⁵⁾でみられるように前期末以降急速に石盾丁の素材が在地石材であるサヌカイトに置き換わって両端に抉りを入れるなど、在地化が著しい。

中期中葉まで縄文時代晩期後半以来の平野中央部の選地が継続する。浴長池遺跡では埋設途上の旧河道湿地帯を中心としてそれに隣接する緩傾斜地におよぶ水田跡が検出されており、主として河川灌漑に依存していたものと推定されている。

青銅器関係資料¹⁶⁾は綾北平野を望む明神原遺跡で外縁付紐式銅鐸、綾川沿いの谷間の内間遺跡で扁平紐式銅鐸が出土している。また、石清尾山塊北端の下ノ山遺跡で広形銅矛が出土している。空港跡地遺跡¹⁷⁾旧河道では中細形銅剣の切先転用品が出土している。

弥生時代中期後半～末に至ると、遺跡数がにわか増加し、国分寺平野内においても、国分寺下日名代遺跡¹⁸⁾で溝跡や偶蹄類足跡を伴う湿地帯などが確認されている。新たな進出は主に丘陵上に見られ、標高約30mの久米池南遺跡¹⁹⁾では竪穴住居、掘立柱建物が段状遺構などを伴って確認された。標高100mを越える摺鉢谷遺跡や烏帽子山遺跡は山頂部に立地するいわゆる高地性集落である。低丘陵に立地する遺跡を含めて、石鎌の比率が高い²⁰⁾点は、進出の契機を示唆している。また平野内部では空港跡地遺跡で確認された「出水状遺構」²¹⁾など、従来の河川灌漑の専水域を越える微高地への開発行為がみられる点で、土地や物資の獲得を巡る抗争が激化したことを示唆している。

丘陵上の集落は後期初頭まで存続するものが多いが、後期中葉以降には見られなくなる。それにかわって、平野部の遺跡はさらに増加する。香東川東岸に位置する上天神遺跡²²⁾で

は後期初頭～前葉の4つの単位からなる集落が調査された。またその東に隣接して後期前葉段階の太田下須川遺跡²⁹⁾が調査されている。集落の単位は竪穴住居・掘立柱建物から構成されており、単位間での規模や搬入物資の保有量の差違が認められる。²⁴⁾また、太田下須川遺跡や浴・松ノ木遺跡²⁵⁾で出土した木樋は、微高地の開墾が複雑化したことも示唆しており、灌溉体系を基軸とした地域的な結合が、他地域との多面的な交流を背景に、従前と比べて活発化したことが想定される。後期後半以後、下川津B類土器を指標とする地域色の強い土器型式²⁶⁾が成立する。空港跡地遺跡西半部の集落²⁷⁾をはじめとしてこの段階には集落規模の拡大やあらたな進出がみられ、古墳時代前期まで継続する傾向にある。

弥生時代の墳墓遺構も近年調査資料が増加した。中期段階では浴長池遺跡²⁸⁾前田東中村遺跡²⁹⁾で方形周溝墓が確認されている。また後期～終末段階では通谷遺跡、林坊城遺跡、空港跡地遺跡で方形、円形周溝墓が確認されている。後期から終末期にかけて突出部が発達する様子が窺える。これらは集落域から隔絶した分布でありながら、単独かあるいは小規模な群集形態しかもたない点が特徴としてあげられ、近畿地方以東でみられるような一般成員の墳墓として採用されたものとは考えにくい。後期の通谷遺跡³⁰⁾でみられるように、すでに墓域を丘陵上に選地するものが出現したことも興味深い。主体部が残存するのは少ないが、空港跡地遺跡では小形の円形周溝墓で木棺直葬墓坑が確認されている。³¹⁾

石清尾山塊には多数の積石塚が存在する。鶴尾神社4号墳³²⁾は長さ4.7mの竪穴式石室に粘土床を備えた埋葬施設をもつ全長40mの前方後円墳である。出土した土器は下川津V式に比定され、猫塚出土の広口壺³³⁾より古相を示し、方格規矩四神鏡が出土している。猫塚は全長96mの双方中円墳で、主丘部を中心に8基の埋葬施設があったとされる。倣製三角縁神獸鏡を含む4面の鏡が出土している。そのうち内行花文鏡は北部九州以東で古墳から出土する前漢鏡のうち、もっとも古い型式である。³⁴⁾他に筒型銅器、銅剣、銅鏃をはじめ、多彩な副葬品を保有している。鶴尾神社4号墳から猫塚への飛躍は、墳丘規模のみならず、副葬品組成にみられる盟主墳的要素は重要であろう。高松平野東部の久米池周辺のグループでは弥生墳墓の様相を色濃く残した諏訪神社古墳³⁵⁾から、全長70mの前方後円墳である高松茶臼山古墳へ系列を踏む。高松茶臼山古墳では鍬形石や大形鉄鏃などの副葬が見られる。³⁶⁾鍬形石は最古型式に属するものである。³⁷⁾

この段階で以上の2つのグループ以外は、全長20～40mの小規模な前方後円墳が散在する状況を示す。窟山古墳³⁸⁾ガメ塚古墳(25m)、³⁹⁾横立山経塚古墳(37m)⁴⁰⁾等であり、綾北平野では雌山2号墳(35m)、⁴¹⁾タイバイ山古墳(35m)、⁴²⁾羽床盆地では横山経塚1・2号墳⁴³⁾が

それに相当し、国分寺六ツ目古墳もこの一角と考えられる。

鷺ノ山産石材の割竹形石棺を埋葬主体とする前方後円墳は、前期後半から中期前半までに各所で築造される。⁴⁴⁾ 全長約100mの快天山古墳⁴⁵⁾は石棺の型式や埴輪からみてその中でもっとも古い様相をもち、鷺ノ山に比較的近いことや複数の石棺を保持していることからみて、製品製作や搬出に深く関わった被葬者が想定できる。⁴⁶⁾ 石棺の製作地は羽床盆地かあるいは国分寺平野が考えられるが、国分寺町鷺ノ山神社に安置される巨大な石棺未製品⁴⁷⁾は後者が有力であることを示す。

なお、石棺を埋葬主体とする前方後円墳は、小規模なものでも40mを越える規模をもつ。三谷石舟古墳⁴⁸⁾は全長90mと高松平野東部の盟主的地位にある。また、石棺の有無は不明であるが、高松平野西部の今岡古墳⁴⁹⁾は全長60.5mをはかり、平野西部の盟主墳と考えられる。前方部から出土した土製棺は本津川流域の中小規模円墳によく見られるもので、同水系に位置する中間西井坪遺跡ではそれらの土製棺、埴輪を製作した工房跡が確認されている。⁵⁰⁾ 石船塚古墳は中心主体部に割竹形石棺をもち、墳丘からA種ヨコハケをもつ円筒埴輪が採集されている⁵¹⁾ことから積石塚中ではもっとも新しい時期の古墳である。このほか、香東川水系の船岡山古墳(70m)⁵²⁾ 屋島先端部に位置する長崎鼻古墳(42.8m)⁵³⁾で石棺の出土が伝えられている。この段階では、前段階で顕著に見られた40m以下の前方後円墳は非常に少なく、首長墓の隔絶性がより顕著となる傾向がある。

一方で箱式石棺や小竪穴式石室、土製棺を埋葬主体とする小規模円墳が各丘陵に築かれる。本津川流域では中間北部古墳群(中間1～3号墳、御厩天神社古墳)⁵⁴⁾ 中間南部古墳群(矢塚、弓塚古墳群)、西山崎古墳群、本堯寺古墳群が堂山山塊東側尾根を中心に分布し、堂山西側尾根では箱式石棺の出土が伝えられる福家古墳⁵⁵⁾が所在する。中間北部古墳群は小規模な前方後円墳を含む。

中期前半～後期前半には、大形の前方後円墳の築造が途絶える。大形円墳の高野丸山古墳⁵⁶⁾は三谷石舟古墳を引き継ぐ首長墓と目されるが、内容が明らかでない。また、中小規模の方・円墳の群集墳のうち、豊富な副葬品の内容をもつものが出現し、相作牛塚古墳⁵⁷⁾ 岡の御堂古墳⁵⁸⁾では甲冑、馬具などが出土している。墳丘外表面の均一化が図られる反面、個別的な畿内政権との係わりのもとに、小地域毎の社会構造が細分化される様子が窺われる。

竪穴式石室を埋葬主体とする古墳群は前段階の群集形態を存続し、せいぜい10基程度の群集に収まるものが多く、国分寺平野では石ヶ鼻古墳が単独で立地する。ただし、浄願寺

山山顶付近に所在する浄願寺山古墳群については約50基の群集墳が密集しておりその中にあっては特異である。

6世紀末から7世紀前半までに、再び外装的に首長墓と判断される巨石墳が築造される。これらは古代寺院の創建母胎となったことが窺われ、久米池周辺の小山古墳、山下古墳、久本古墳は山下廃寺、本津川流域の古宮権現古墳、鬼無大塚古墳、平木1号墳、御殿大塚古墳などは勝賀廃寺、また、綾北平野南部では新宮古墳、綾織塚古墳などが開法寺と係わりが考えられる。久米池の北方に位置する屋島城は文献によると7世紀後半段階に築城されたことが知られる。関連する遺構・遺物はほとんど知られていないが、新田町付近にみられる異方向の土地区画との関係⁵⁹⁾は考慮する必要がある。

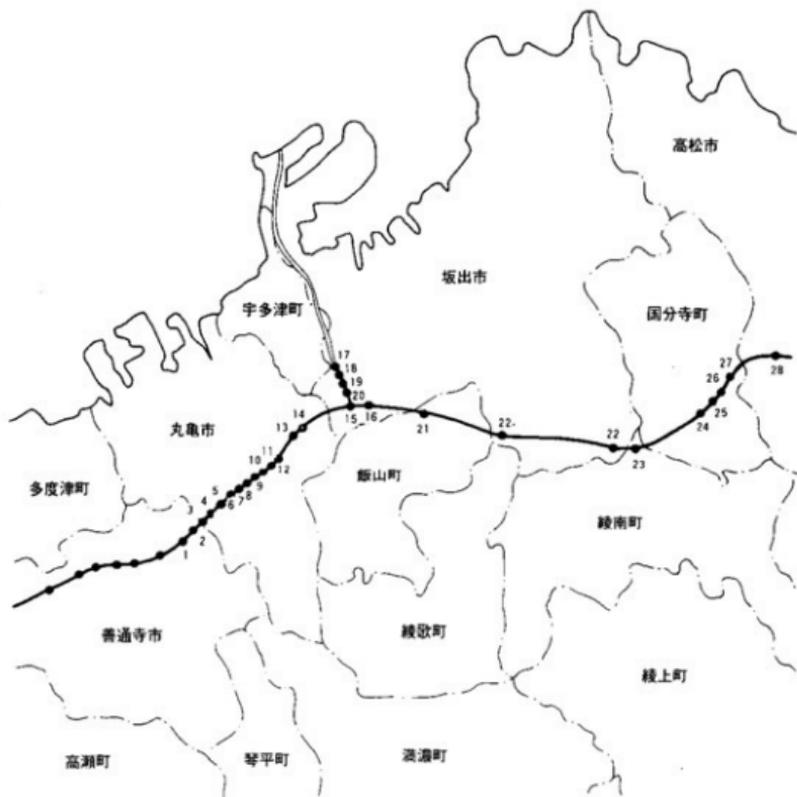
綾北平野南部に推定される讃岐国府跡推定地はこれまでに数多くの発掘調査が行われている⁶⁰⁾が、7世紀代に遡る遺構は確認されておらず、創建期の状況は未だ不明である。一方国分寺平野には国分寺⁶¹⁾国分尼寺が創建され、綾北平野との地峡部に南海道が想定される⁶²⁾ことから、国府周辺域を含めて、その後の讃岐国の中心地となったことが窺える。府中山内地瓦窯跡は地峡部の一角に立地し、国分寺所用瓦を生産したことが知られている。また、綾川上流の十瓶山周辺では中世初期まで継続する大窯跡群が形成されるに至る。

2) 調査経過

調査原因 国分寺六ツ目古墳は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査ではじめて発見された古墳である。四国横断自動車道（高松～善通寺間）は、昭和57年に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された路線である。

香川県教育委員会（以下、県教委）と日本道路公団高松建設局（以下、公団）は、この間ルート内の埋蔵文化財の取り扱いについての事前協議を行い、39万㎡に及ぶ遺跡対象面積とその記録保存について合意し、覚書に基づく文化庁協議を経て、昭和63年度から発掘調査を着手するに至ったものである。国分寺地区の発掘調査は平成元年度から着手された。

古墳の発見と予備調査 古墳の発見は昭和60年度のルート内の遺跡詳細分布調査によって円丘部を確認したことが端緒である。当初は円墳と認識されていたが、立木伐開後の平成元年8月30日に開始した当該地の測量調査で、北側に延びる低い高まりが認識され前方後円墳の可能性が考慮された。また、東側にも若干の高まりがあることも注目された。



第3図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～普通寺）

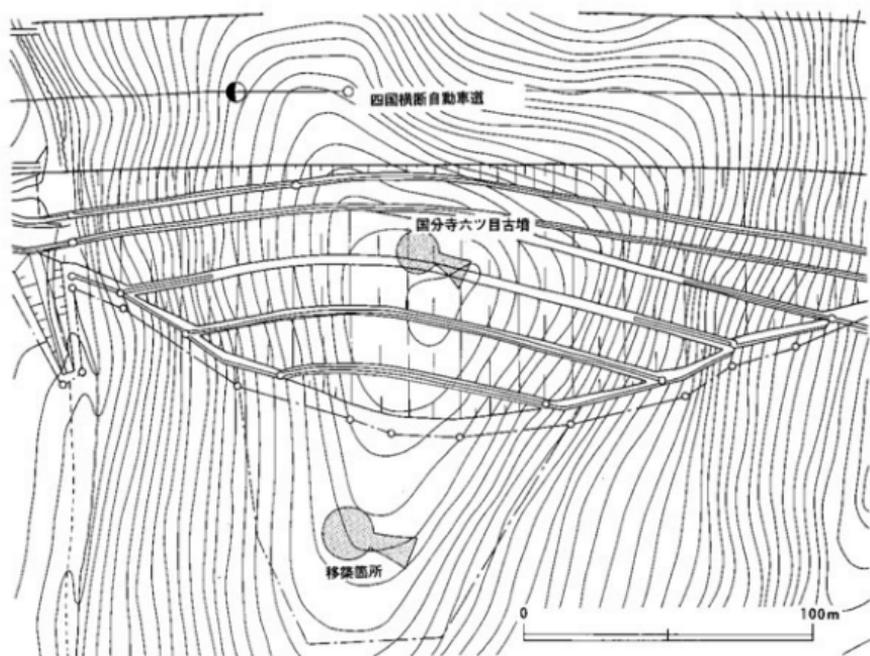
9月4日から円丘部に十字トレンチ設定し、地下遺構の状況と墳形把握を開始した。その結果、全方向のトレンチで墳頂部からほぼ同じ距離に列石と見られる石が検出され、その段階では円墳の可能性を考えた。北方の高まりと東方の高まりについてもトレンチを設定し、複数墳の可能性を追究することとなったが、遺構は確認されなかった。結果的には、測量時に考慮されていたものの、地表下に埋没していた岩脈を列石と誤認したことによって前方後円墳としての把握がやや遅れたこととなった。

No	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
1	龍川五条遺跡	蒲湯寺市原田町	12,300 10,200	元. 6. 26~2. 3. 31 2. 4. 9~2. 12. 5	壱穴住居跡・竪立柱建物跡・弥生時代墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器	I 第26冊(1996) II 未刊
2	龍川四条遺跡	蒲湯寺市原田町・木塚町	20,000 1,700 300	元. 7. 1~2. 3. 31 2. 5. 28~2. 10. 24 3. 4. 4~3. 6. 18	古代壱穴柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・竪穴・磁器・瓦器	第15冊(1995)
3	三条釜ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63. 4. 18~元. 2. 10 元. 4. 10~2. 3. 31	壱穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか	第11冊(1992)
4	三条風呂遺跡	丸亀市三条町	7,677	63. 6. 15~63. 11. 26	旧石器ブロック・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	第27冊(1997)
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63. 4. 18~元. 3. 31	壱穴住居跡・竪立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉陶器・斎串ほか	第13冊(1993)
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63. 4. 18~元. 3. 31 元. 4. 10~2. 3. 31	壱立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有蓋尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器	第12冊(1993)
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6. 15~元. 3. 22	壱立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか	第17冊(1995)
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63. 6. 15~元. 2. 17	壱立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ彩石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器	第24冊(1996)
9	川西北原遺跡	丸亀市川西町北	3,033	63. 12. 12~元. 3. 25	壱立柱建物跡・溝状遺構	未刊	未刊
10	川西北七条1遺跡	丸亀市川西町北	4,034	63. 12. 13~元. 3. 27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	第27冊(1997)
11	川西北七条II遺跡	丸亀市川西町北	4,760	元. 2. 2~元. 3. 31	壱立柱建物跡・溝状遺構	土師器	第22冊(1996)
12	川西北原古原遺跡	丸亀市川西町北	2,208	元. 4. 10~元. 8. 11	中世壱穴柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器	第22冊(1996)
13	飯野華二瓦器遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63. 12. 13~元. 3. 27	壱立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	第20冊(1996)
14	飯野華分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1~2. 3. 31		埴輪	未刊

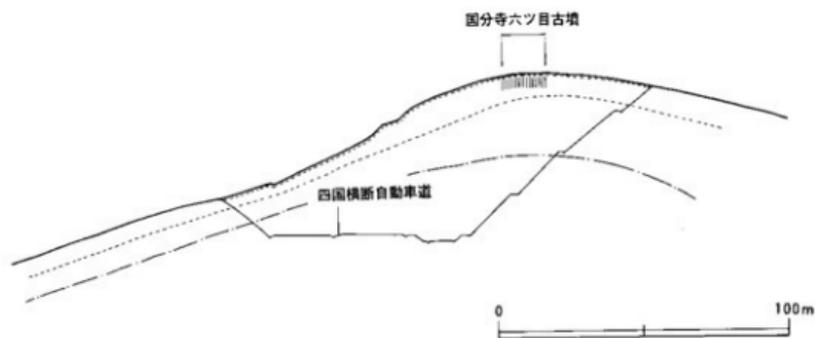
第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 藤家町鹿山町	28,100 500	2.8.2～3.3.20 3.9.2～3.9.4	弥生～中世福立柱建物跡・竪穴住居跡・溝・炊爨跡	弥生土器・土師器・須恵器・墨石土器	未刊
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10～3.1.17	古墳時代竪穴住居跡・溝状遺構・古代～中世福立柱建物跡	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨石土器	未刊
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2.5.10～3.2.28 3.4.4～3.9.13	弥生竪穴式住居跡・溝状遺構・土坑・古代～中世福立柱建物跡・土坑墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀	第14冊(1994)
18	川津下柳遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2.5.10～3.1.31 3.4.4～3.9.13	弥生時代水田・井堰・溝状遺構・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品	第21冊(1996)
19	川津二代炊爨跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10～3.3.8	弥生時代溝状遺構・自然河川・中世福立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	第16冊(1995)
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2.4.12～3.3.28 3.7.18～3.9.27	弥生時代竪穴住居跡・建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	I第26冊(1996) 日本刊
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元.8.17～元.5.16		弥生土器・須恵器・土師器	未刊
22	野中地区	坂出市野中町	3,000	2.10.30～2.12.26	時代不詳 柱穴・土坑		未刊
23	綾南東下池南宮跡	綾歌郡綾南町	2,900	元.5.22～元.7.24	須恵器窯跡	須恵器	第19冊(1996)
24	隠分寺下日名代遺跡	綾歌郡隠分寺町	11,350	元.8.19～2.2.28	弥生時代溝状遺構・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器	未刊
25	隠分寺楠井遺跡	綾歌郡隠分寺町	4,400	2.4.11～2.10.2	円筒・中世土師器窯・竪穴柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器	第18冊(1995)
26	隠分寺六ツ目古墳	綾歌郡隠分寺町	900	元.9.1～元.12.28	前方後円墳(主体部3基)	古式土師器・鉄器	本書
27	隠分寺六ツ目遺跡	綾歌郡隠分寺町	5,600	元.10.1～2.2.28	中近世福立柱建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器	未刊
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元.8.19～2.3.25 2.5.10～3.3.25 3.4.5～3.7.18	旧石器ブロック・竪穴住居跡・古墳(3基)・竪穴住居跡・福立柱建物跡・溝・土坑	I第25冊(1996) 旧石器・弥生土器・須恵器・土師器・土坑 陶棺	I第25冊(1996) 日本刊 田未刊

第3表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)



第6図 工事設計と古墳の位置



第7図 工事設計と古墳の断面位置

- ・前方後円墳が古墳時代の政治、社会、文化を代表する歴史的建造物である
- ・開発に際し、周知の前方後円墳はルート変更等を行い現状保存を要請している
- ・副葬品の内容如何によっては、歴史的価値が高くなる可能性がある
- ・初期の前方後円墳で鏡が副葬されていた古墳は県内では国史跡に指定されている

これに対して、公団は工法変更による現状ルートの維持は無理で、現状保存するとなるとルートの変更を余儀なくされるため、今後の調査結果をまって判断されるべきとした。

第2次調査 埋葬主体部の調査は墳丘部の航空測量が終了した10月24日から開始した。降雨に備えて円丘部上に大形テントを張り主体部の調査に集中する一方、周辺部では調査範囲を広げて他の遺構の有無も確認した。

11月中旬までに、それぞれの主体部の概要を把握できた。第1主体部で当初考えていた墓坑プランは、実に技巧的な盗掘によって掘り込まれたもので、棺内には残念ながら副葬品は認められず、棺外で壺形土器と5点の鉄器が出土するにとどまった。第2・3主体部においてはまったく副葬品が出土しなかった。しかし、各主体部の調査を進行するにつれ、構築状況に重要な点が見られた。また、赤色粘土や第3主体の箱式石棺石材の分析を東京大学地質学研究室朽津信明氏（現在、東京国立文化財研究所）に依頼した。

埋葬主体部の調査が一段落した後、墳丘調査で掘開したトレンチや一部掘りすぎていた列石の裏込め土を埋め戻し、墳丘全景写真を撮影した。

その間、県教委、公団、国分寺町で古墳の取り扱いについての協議が進行し、現状保存は困難なため、隣接地を町有地化し、公団が主体部を移築するという方針が12月までにまとまった。しかし移築に係る工法検討や周辺設計についての協議がその後も継続され、古墳の調査は一旦中断し、調査員は国分寺六ツ目遺跡の調査に着手した。



第8図 調査風景（第2次調査）



第9図 調査風景（第3次調査）

第3次調査 移築は次のように計画された。

- ・第1主体部を樹脂含浸し、発砲ウレタンで固めて現状のまま移築する
- ・第2主体部はブロック状に切り取り、移築先で接合する
- ・第3主体部は箱式石棺、礎敷きともに解体し、移築先で復元する
- ・墳丘は現状の記録に基づき、移築先を造成して新たに構築する

この移築計画が決定したことを受けて、平成2年8月23日から補足の調査を実施した。

第3主体部の解体と移築範囲以外の墳丘断面図の補足を行った。また、古墳の東側に隣接して奈良時代の石組み遺構が新たに検出されるなど、新知見を得て9月5日に第3次調査を終了した。

その後、国分寺町が主体となり移築工事が着手された。現在、旧位置の東側隣接地に移築され、活用されている。なお、墳丘は安全勾配維持のために旧状より大きめに復元されているので、見学の際には留意されたい。



第10図 移築後の第1主体部



第11図 移築復元された国分寺六ツ目古墳

整理作業 調査終了後、基本的事項をまとめた概報を刊行している。概報に記載した内容は基本的には本報告と矛盾しないが、第1主体部の広口壺の出土状態については概報時に「単独の土器埋納坑」に納められたと判断した。しかし、今回の図面・写真等を詳細に検討した結果、第3章で詳述するようにU字型墓坑底の小口部に配置されたものとして、考えを改めている。また、第1主体部を竪穴式石室としていたが、今回はその名称を使用しない。

本報告書の作成に係る整理作業は平成9年1月から3月まで香川県埋蔵文化財センターにおいて行われた。調査着手から7年後に整理の運びとなったが、出土した鉄器はその間に錆化が著しく進行し、保存処理を急ぎおこなったものの、出土遺物の保存管理面において問題を残すこととなった。

調査体制 発掘調査、整理作業における調査期間中の調査体制は以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課			
	平成元年度	平成2年度	平成8年度
総括	課長 太田 彰一	課長 太田 彰一	課長 藤原 章夫
	課長補佐 高木 尚	課長補佐 菅原 良弘	課長補佐 高木 一義
	副主幹 野網朝二郎	副主幹 野網朝二郎	副主幹 渡部 明夫
総務	係長 宮内 憲生	係長 宮内 憲生	係長 山崎 隆
	主事 横田 秀幸	主任主事 横田 秀幸	主査 星加 宏明
	主事 水本久美子(～5.31)	主事 石川恵三子	主事 打越 和美
	石川恵三子(6.1～)		
埋蔵文化財	係長 大山 真充	係長 大山 真充	文化財専門 木下 晴一
	技師 岩橋 孝	主任技師 岩橋 孝	技師 塩崎 誠司
	技師 國木 健司	技師 北山健一郎	

第4表 調査体制表(1)

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター			
	平成元年度	平成2年度	平成8年度
総括	所長 十川 泉	所長 十川 泉	所長 大森 忠彦
	次長 安藤 道雄	次長 安藤 道雄	次長 小野 善範
			文化財専門 廣瀬 常雄
総務	係長 加藤 正司	係長 加藤 正司	係長 前田 和也
	主事 三宅 浩司	主事 三宅 浩司(～5.31)	主任主事 西川 大
		齊藤 正好(6.1～)	主事 佐々木隆司
調査・整理	参事 見勢 護	参事 見勢 護	文化財専門 森下 英治
	文化財専門員 真鍋 昌宏	文化財専門員 真鍋 昌宏	整理員 戸川 晶代
	主任技師 植松 邦浩	技師 森下 英治	整理補助員 若山 淳子
	主任技師 渡邊 智宏	技師 森下 英治	整理作業員 嶋田 由紀
	技師 森下 英治	技師 森下 英治	整理作業員 佐々木博子
	技師 佐藤 竜馬	技師 森下 英治	整理作業員 森川 理恵
	調査技術員 山本 健	調査補助員 田村 久雄	
	調査技術員 谷澤 幸司		
	調査補助員 田村 久雄		

第5表 調査体制表(2)

第2章 墳丘の調査

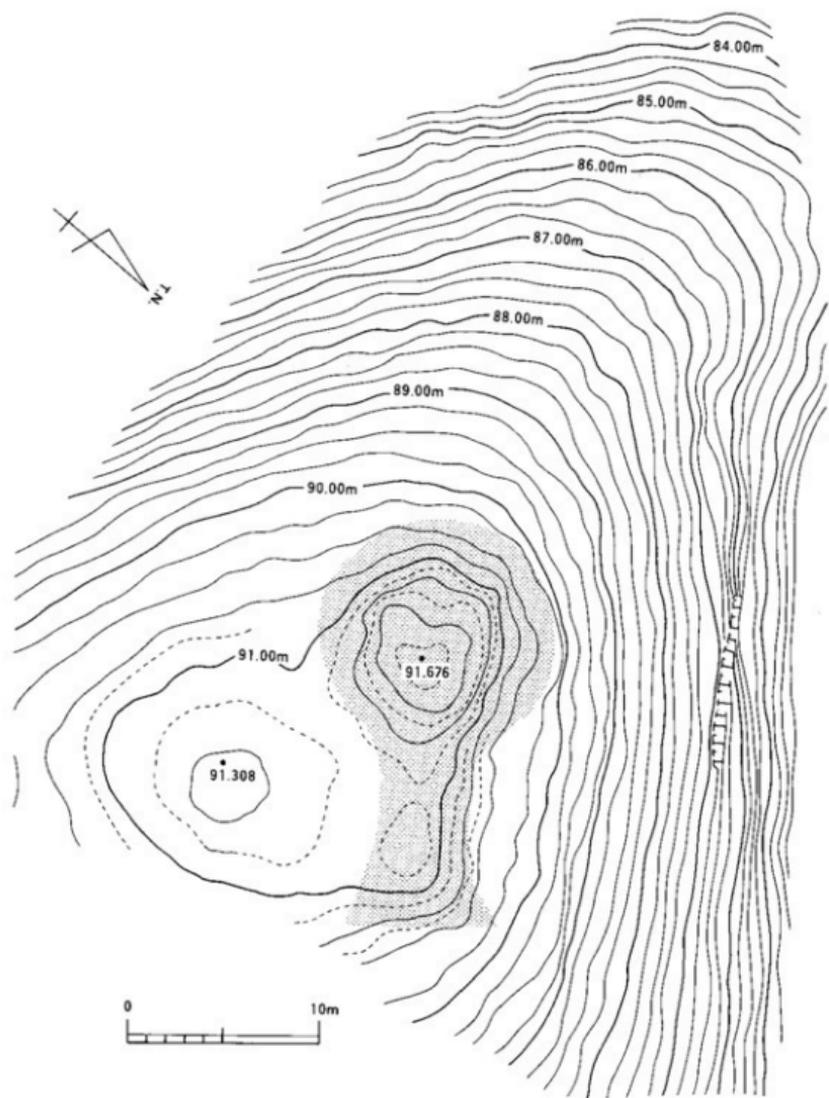
1) 墳丘の立地

国分寺六ツ目古墳は六ツ目山から平野に向かってヤツデ状に延びる尾根の先端部に存在する(第5図)。尾根は標高100m付近から西に派生し、鞍部を介して標高91mの小ピークを形成している。そこから西南方向と北東方向の二方向に尾根が分岐する。墳丘は小ピークのやや平野側の尾根分岐点に設定され、それぞれの尾根の付け根を前方部・後円部に利用している。

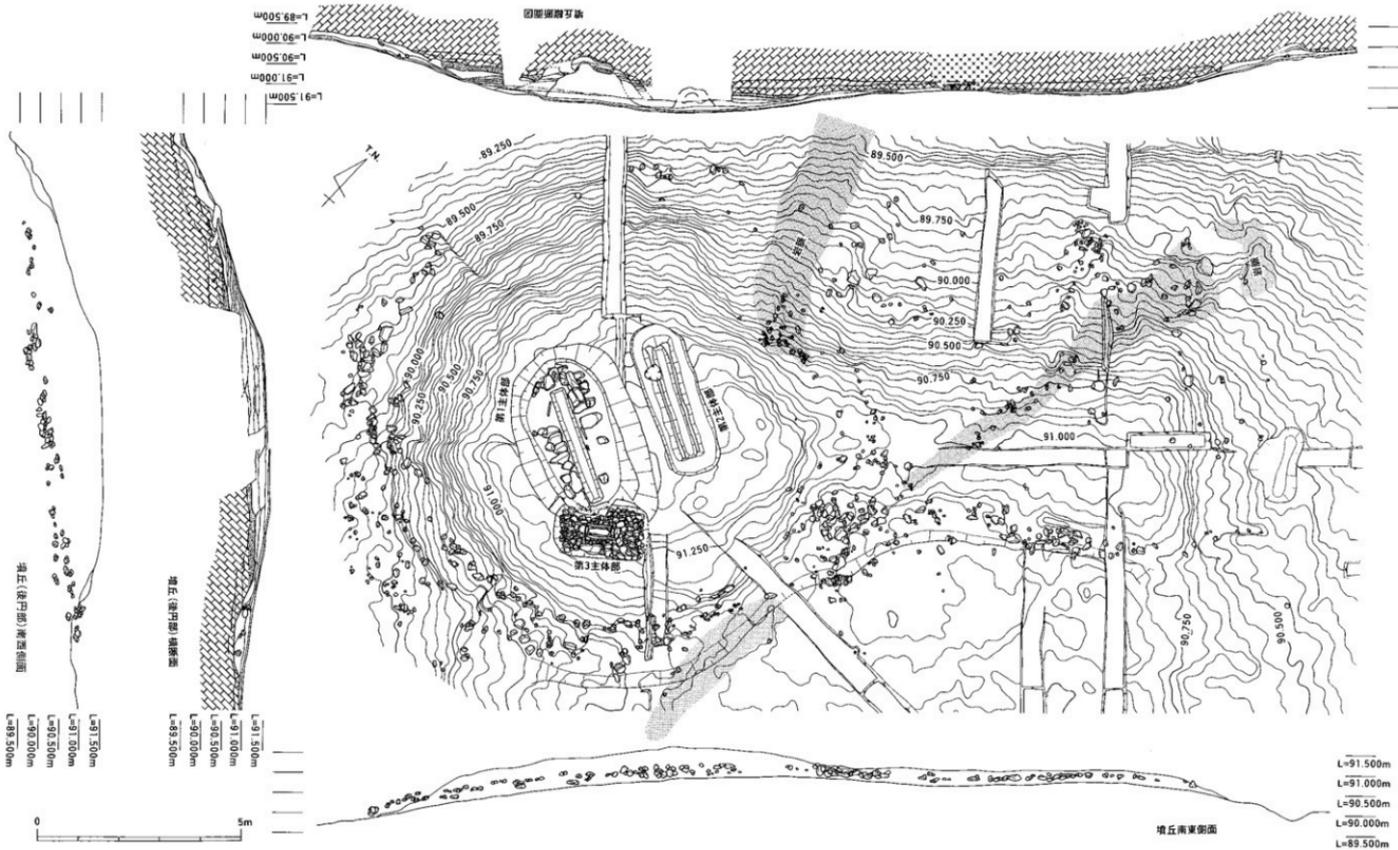
小ピークから平野側へ派生する尾根や谷はいずれも急峻である。北西方向の尾根は標高65m付近で一旦緩やかとなり、平野側へ延長200mほど張り出すが、その先は再び急な傾斜をもって平野面に至る。平野面の標高は約20mで、古墳と平野面との比高差は約70mである。

古墳が立地する尾根の南北には同じ方向で延びる尾根が隣接する。しかし、どれもが尾根の背後にピークをもち、平野へはさほど高くない尾根が派生するだけであって、古墳から平野への眺望にさしたる障害はない。したがって、北西方向へ延びる尾根の直下を除くと、古墳からも平野側からも良好な見通しが維持される位置に墳丘を構築している。また、前方部方向(北東)へは伽藍山と六ツ目山の谷を介して石清尾山塊の先端部や瀬戸内海を望むことができる。高松平野側への眺望がきき、かつ平野への眺望が保てる箇所は他には求め得ない。

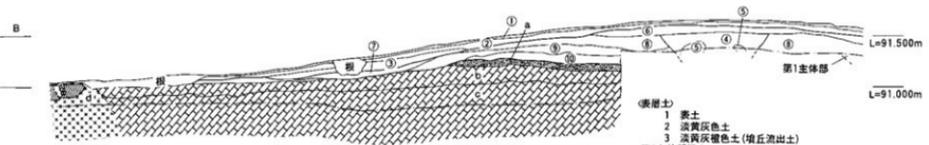
墳丘主軸は尾根が六ツ目山から延びてきた方向に直交して設けられている。県内の前方後円墳の多くが主軸を尾根筋に設定し、後円部を平野部に向けていることとは異なる点である。



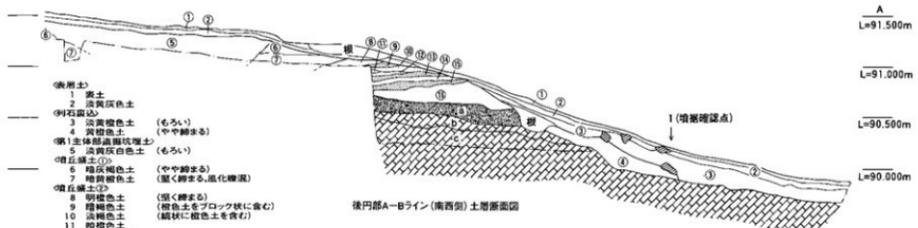
第12図 調査前地形測量図 (1/300)



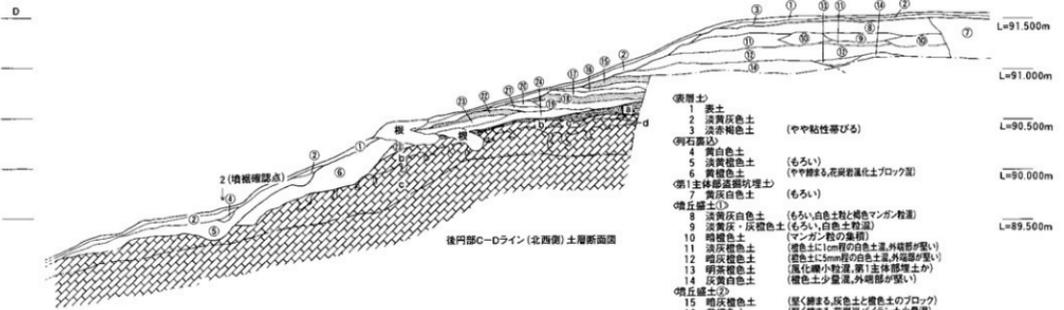
第13図 填丘概要図 (1/100)



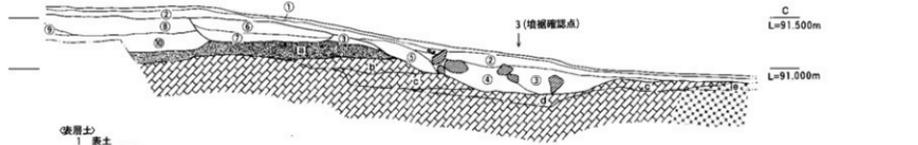
- 後門部A-Bライン(中央部)土層断面図
- 表層土
- 1 黄土
 - 2 淡黄灰色土 (堆灰溜出土)
 - 3 淡黄灰褐色土 (堆灰溜出土)
- 第1主体部埋土
- 4 淡黄褐色土 (褐色粘土混)
 - 5 淡灰褐色土
- 傾丘盛土①
- 6 淡黄灰白色土 (白色土粒混)
 - 7 淡黄灰色土
 - 8 淡灰褐色土
- 傾丘盛土②
- 9 淡黄灰色土 (堅く締まる)
 - 10 明灰褐色土 (堅く締まる)
- 旧地盤
- a 暗灰黒色土 (旧地盤)
 - b 暗灰褐色土 (地山)
 - c 暗褐色土 (地山)
 - d 花崗岩 (岩脈)



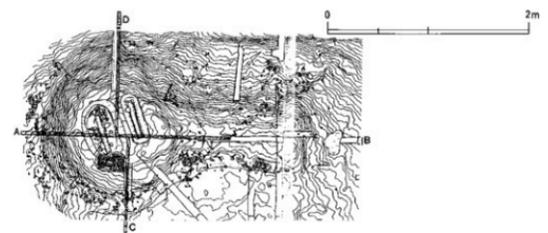
- 後門部A-Bライン(南西部)土層断面図
- 表層土
- 1 黄土
 - 2 淡黄灰色土
- 卵石混込土
- 3 淡黄褐色土 (もろい)
 - 4 黄褐色土 (やや締まる)
- 第1主体部埋土
- 5 淡黄灰白色土 (もろい)
 - 6 暗褐色土 (やや締まる)
 - 7 暗褐色土 (堅く締まる, 風化礫混)
- 傾丘盛土①
- 8 明褐色土 (堅く締まる)
 - 9 暗褐色土 (褐色土をブロック状に含む)
 - 10 淡褐色土 (繊維状に褐色土を含む)
 - 11 暗褐色土
 - 12 暗褐色土 (堅く締まる)
 - 13 暗褐色土 (堅く締まる)
 - 14 褐色土 (堅く締まる)
 - 15 暗褐色土 (堅く締まる)
 - 16 淡褐色土 (堅く締まる, 風化礫を含む)
- 旧地盤
- a 暗灰黒色土 (旧地盤)
 - b 淡黄灰色土 (地山)
 - c 灰褐色土 (地山)



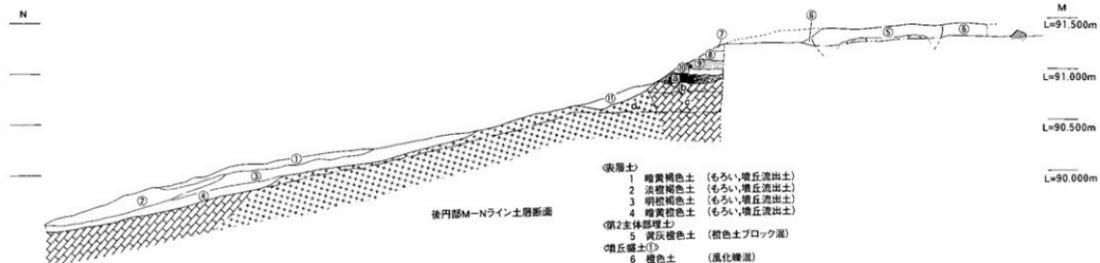
- 後門部C-Dライン(北西部)土層断面図
- 表層土
- 1 黄土
 - 2 淡黄灰色土
 - 3 淡黄褐色土 (やや粘性帯びる)
- 卵石混込土
- 4 黄白色土
 - 5 淡黄褐色土 (もろい)
 - 6 黄褐色土 (やや締まる, 花崗岩混土ブロック混)
- 第1主体部埋土
- 7 黄白色土 (もろい)
 - 8 淡黄灰白色土 (もろい, 白色土粒と褐色ヤングラ混)
 - 9 淡黄灰・灰白色土 (もろい, 白色土粒混)
 - 10 暗褐色土 (マンガンの集積)
 - 11 淡灰褐色土 (褐色土に1cm程度の白色土混, 外縁部が強い)
 - 12 暗灰褐色土 (褐色土に2cm程度の白色土混, 外縁部が強い)
 - 13 明灰褐色土 (風化礫小粒混, 第1主体部埋土か)
 - 14 淡黄白色土 (褐色土少量混, 外縁部が強い)
- 傾丘盛土①
- 15 明灰褐色土 (堅く締まる, 灰色土と褐色土のブロック)
 - 16 黄褐色土 (堅く締まる, 花崗岩(イラン土)少量混)
 - 17 暗褐色土 (堅く締まる, 繊維状赤褐色土混)
 - 18 暗褐色土 (堅く締まる)
 - 19 灰褐色土 (ブロック状)
 - 20 淡灰土 (やや締まりが強い)
 - 21 淡灰褐色土 (やや締まりが強い)
 - 22 暗灰褐色土 (堅く締まる)
 - 23 明褐色土 (堅く締まる)
 - 24 灰褐色土 (ブロック状で堅く締まる)
- 旧地盤
- a 暗灰黒色土 (旧地盤)
 - b 灰褐色土 (地山)
 - c 暗褐色土 (地山)
 - d 灰黄色土 (地山)
 - e 暗褐色土 (地山, 上位に貫入多い)



- 後門部C-Dライン(南東部)土層断面図
- 表層土
- 1 黄土
 - 2 淡黄灰色土
- 埋土
- 3 淡黄褐色土 (もろい)
- 卵石混込土
- 4 淡黄褐色土 (やや締まる)
 - 5 黄褐色土 (やや締まる)
- 第3主体部埋土
- 6 暗褐色土 (褐色粘土ブロック混)
 - 7 明灰褐色土 (灰色と褐色のブロック)
- 傾丘盛土①
- 8 淡黄灰白色土
 - 9 黄灰白色土
- 第1主体部埋土
- 10 暗灰褐色土
- 旧地盤
- a 暗灰褐色土 (旧地盤)
 - b 暗褐色土 (地山)
 - c 淡黄褐色土 (地山)
 - d 黄褐色土 (地山)
 - e 花崗岩 (岩脈)

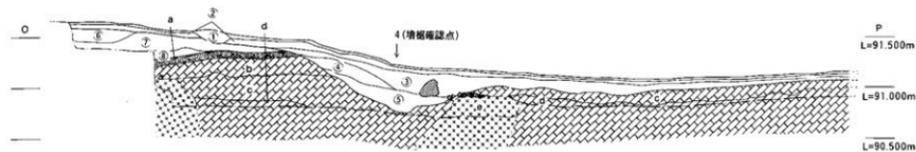


第14図 後門部傾丘断面図1 (1/40)



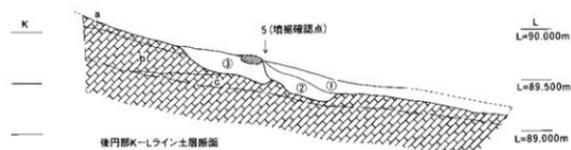
後門部M-Nライン土層断面

- ①表層土
- 暗黄褐色土 (もろい, 増丘流出土)
 - 淡黄褐色土 (もろい, 増丘流出土)
 - 明黄褐色土 (もろい, 増丘流出土)
 - 暗黄褐色土 (もろい, 増丘流出土)
- ②第2主体部埋土
- 黄灰褐色土 (褐色土ブロック混)
- ③増丘盛土①
- 褐色土 (風化礫混)
 - 淡黄灰褐色土 (もろい)
- ④増丘盛土②
- 淡黄灰褐色土 (堅く締まる)
 - 淡灰黒色土 (堅く締まる)
 - 明褐色土 (堅く締まる)
 - 淡黄灰白色土 (堅く締まる)
- ⑤旧地盤
- 暗灰褐色土 (旧地表)
 - 淡灰白色土 (地山)
 - 灰褐色土 (地山)
 - 花崗岩 (岩盤)



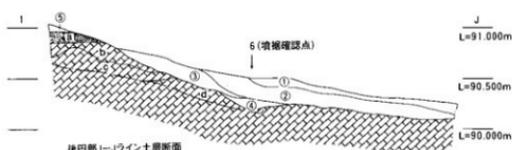
後門部O-Pライン土層断面

- ①表層土
- 表土
 - 淡黄灰褐色土
 - 淡黄橙-黄灰褐色土 (もろい, 増丘及び列石裏込流出土)
- ②列石裏込
- 黄褐色土 (やや堅い)
 - 淡灰色-暗黄褐色土
- ③増丘盛土①
- 灰褐色土 (1~2cm程の小礫混)
 - 灰褐色土 (もろい)
 - 明灰褐色土 (もろい)
- ④旧地盤
- 暗灰褐色土 (旧地表)
 - d-d 地山
 - e 花崗岩 (岩盤)



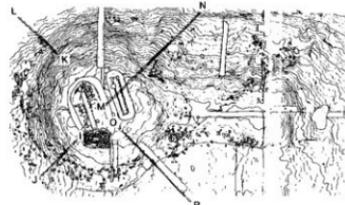
後門部K-Lライン土層断面

- ①表層土
- 淡黄褐色土 (もろい)
 - 黄褐色土 (もろい)
- ②列石裏込
- 淡黄褐色土 (ややもろい)
- ③旧地盤
- 灰黄白色土 (地山)
 - 淡赤褐色土 (地山)
 - 黄褐色土 (地山)



後門部I-Jライン土層断面

- ①表層土
- 淡黄灰褐色土 (増丘流出土)
 - 淡黄灰白色土 (もろい, 増丘流出土)
- ②列石裏込
- 淡灰黄褐色土
 - 暗黄褐色土
 - 灰褐色土 (堅く締まる)
- ③増丘盛土
- 灰褐色土 (堅く締まる)
- ④旧地盤
- 暗灰褐色土 (旧地表)
 - 灰黄白色土 (地山)
 - 淡赤褐色土 (地山)
 - 明黄褐色土 (地山)



第15図 後門部増丘断面図2 (1/40)

2) 墳丘の構造

概要 (第13図) 墳丘は尾根上小ピークの北西側に築造されている。前方部を北東に、後円部を南西に向け、後円部墳頂に3基の埋葬主体部が存在する。前方部は後円部に比べて細くて低く、裾がやや広がる形態を有す。

墳丘の南東側には高さ0.4mほどの地山の高まりがある。この高まりと墳丘との間には、緩やかな凹地がみられ、墳丘を構築する際に比較的広範囲に開削されたことが断面観察から把握できる。ただ、墳裾部付近では1mほどの幅で周辺よりやや深く開削した溝が丘陵側にのみ巡る。

墳丘は尾根の傾斜に直交する方向に主軸を設定し、ほとんどを地山整形で造り出すが、後円部については0.6mほどの盛土が墳頂部を中心に認められる。本来前方部側にも盛土を行った可能性はあるが、平野部側が急峻な斜面に接しているために、土砂の流出が著しく、盛土を確認するには至っていない。

墳丘周辺には花崗岩の岩脈の貫入が各所でみられる。墳丘部分にもそれが及び、墳丘の築造に当たっては少なからず、それを破碎して整形したものとする。しかし平野部側のくびれ部では整形が十分でなく、測量図では岩脈部分が全体的に外に張り出した状況もみられる。また、前方部前端的平野部側では岩脈を部分的に破碎して墳丘を整形した箇所もある。この場合は、裾部にあたる部分の岩塊が墳丘の一部として取り込まれた可能性がある。

墳丘の裾部には丘陵側を中心として10~30cm大の花崗岩垂角礫が分布する。丘陵側の石は、墳丘を整形した段階の溝の肩を利用して、裏込を行いながら設置しており、同様の裏込が石の遺存が悪い平野部側にも一部で認められる。石は「葺石」として墳丘全体を覆ったほど総量はみられず、墳丘裾部のみを鉢巻き状に取り巻くものと推定される。以下では「列石」としてこれを表現する。

前方部前端的には深さ0.3mほどの土坑がある。これは墳丘の主軸と概ね直交する方向に設けられている。底場の形状がV字状を呈し、長さが1.5mしかないことから、墳丘周辺埋葬とは考えにくい。

以下、土層断面、列石、墳裾遺物出土状況、墳丘形態の順で報告する。

なお、全長20mあまりの小規模な古墳であり、墳丘の記録にあたって通常の25cmコンターでは表現できない箇所もあると考えられたことから、航空測量による5cmコンター図を作

成した。その信頼性はともかくとして、少々の掘りすぎや掘り残し、あるいは木の根の攪乱等で、微妙なコンターラインの振幅がみられる。したがって当測量図は、記録が精緻である点で有用であるが、何センチのコンターが回る回らないといった微妙な解釈には耐えうるものでないことを、あらかじめ知願いたい。なお、測量は列石の裏込までを除去した段階で行ったものである。後に各主体部や岩脈の図面等を合成して製図した。

A-Bライン南西側 (第14図) 後円部中央に概ね主軸に沿って設定したラインである。図の左側が後円部墳頂。墳頂は、少なくとも調査着手時に、平坦ではあっても、水平ではなく、裾部に向かってわずかに傾斜する。墳頂外端線は攪乱で把握できない。

表層直下に第1主体部盗掘坑の掘り込み(5層)がある。6層は白色土ブロックを多く含む黄灰白色系の締まりが悪い土層、7層は灰橙色系のやや堅い土層で、1cm大の風化礫を多く含んでいる。この2つの土層(図の墳丘盛土①)は白色土ブロックや風化礫を含む点で、8層以下の交互積みによる堅く締まった土層(図の墳丘盛土②)とは区別される。7層は第1主体部の上部埋土の可能性はあるが、7層を除去した後に第1主体部の上面プランを検出したことから、次の8層上面が第1主体部埋葬時の墳頂面と考える。

8~15層は灰色系土と橙色系土を3~5cmごとに交互に積み上げ、堅く締めている。図の網掛部分が灰色系土。16層は橙色系土の単一層。風化礫を層中に含み、堅く締まる。墳頂部側から裾部側にかけて急に厚くなる。

a~c層は盛土が行われる直前の旧地盤を示す。a層は濃い灰色系の旧表土で、層厚は10~20cmを測る。b・c層は灰黄色~灰橙色系の地山で両者の層界はあまり明瞭ではない。a層中に炭化物片が散見されるが特に集中する層準はなく、また出土遺物はなかった。

a層が裾部側で途切れたあたりから地山を削り墳丘を整形した痕跡がみられる。4層の下面をみると途中で段が認められる。

4層はやや堅く締まった黄橙色系土で、周辺を含めて列石の下部に一様に存在する。列石を設置した際の裏込土と考える。3層は盛土や列石裏込土が自然崩落して形成された土層で、崩落した石はこの層中に含まれるものが多い。4層の末端に斜めに見られる石は後述する列石下端の遺存部から継続しており、原位置をさほど移動していないものとする。この地点を墳裾確認点1とする。

A-Bライン中央部 (第14図) 概ね主軸に沿ったA-Bラインのうち後円部墳頂から

前方部の中程までを図示している。墳頂の6層、8層は黄色系の締まりが悪い盛土で、第2主体部は8層上面から掘り込まれる。9層、10層は堅く締まった灰黄～灰橙色系の盛土で、A-Bライン南西側の8層以下に相当する。

前方部側は旧表土のa層を緩やかに削り込んで整形し、墳頂の中心から約5m付近で水平面となる。d層とした岩脈は水平面に相当するレベルまで破碎されている。

後円部と前方部の境付近には列石を据えた痕跡はみられない。

C-Dライン北西側 (第14図) 後円部墳頂から平野部側へ設定した断面である。墳頂は水平な平坦面が形成されて、A-Bラインが平野部側に傾斜することとは様相が異なる。

墳頂から第1主体部盗掘坑が掘り込まれており、それに切られて8層～12層までの灰黄～灰橙色系の締まりの悪い墳丘盛土層が確認できる。これらの層中にはマンガンが付着する風化礫が多く含まれており、特に10層は厚さ10cmにわたって風化礫の集積がある。

第1主体部の掘り込みは断面記録段階では把握できなかったが、後に図から復元すると、13層が第1主体部埋土の上層で、そこから掘り形に継続していたものと考えられる。

15層から24層は灰色系土と橙色系土の交互層で、非常に堅く締まる。A-Bライン南西部でみられたような、風化礫を含む橙色系土の厚い土盛りはみられない。

旧表土のa層は旧斜面の下側ほど薄く、盛土との境は必ずしも明瞭でない。しかし、b層とした灰橙色土の地山が削り込まれるラインは明瞭であり、墳丘築造時の整形面を追うことが可能である。なお、地山のb層とd層の下面には乾痕と思われる上位層の混入がみられる。

墳裾付近は土層序が良好に遺存し、墳裾が2段にわたって削り出されていることがわかる。上段は墳頂から約6.3mの地点で高さ50cmほどの段を形成し、下段は墳頂から約7.3mの地点で高さ15cmほどの段を形成する。この段の上面には6層が一様に盛られ、列石の裏込であったと考えられる。5層は列石の上面に堆積した墳丘流土と考えられ、5層の下面の2箇所は窪みが列石の上端、下端を示すものとする。列石下端を墳裾確認地点2とする。

C-Dライン南東側 (第14図) 墳頂部から丘陵側へ設定した断面である。北西側のラインとは墳頂のポイントを境にややずらして設定したため、両断面は接続はしない。墳頂には北西側と同じく水平面が認められる。墳頂の8層と9層は締まりが悪い墳丘盛土層で、

北西側にみる強く締まった交互層は存在しない。8層上面から第3主体部が掘り込まれる(6層・7層)。第1主体部は第3主体部に切られて明確な墓坑は確認できないが、10層は第1主体部の埋土である。

旧表土のa層は約18cmの厚さで水平に堆積しており、築造前の旧地形を示している。墳裾への傾斜は緩やかで、旧表土のa層から地山c層までが墳丘築造時に削り込まれる。墳丘と反対側は再び緩やかに立ち上がり、溝の肩となる。

列石は遺存状態がよく、上端部の立石と下端部付近の石は原位置を留めているものと考えられる。4層および5層は列石の裏込で、2層および3層は流土である。3層中に含まれる石は原位置を遊離したものである。

列石の下端部を墳裾確認点3とする。

M-Nライン (第15図) 後円部墳頂から平野側くびれ部付近までの断面である。墳頂は平坦で、風化雑混じりの6層を切り込む第2主体部の埋土(5層)が確認できる。8層以下が強く締まった盛土層で、灰色系土と橙色系土の交互層。旧表土のa層は厚さ10cmほどが確認でき、平野部側の地山は大部分が花崗岩の岩脈である。a層と岩脈との間に見られる11層は墳丘築造時に削り込まれたものである可能性もあるが、墳丘測量図では岩脈の西側に広範囲の窪みが認められ、当断面取得位置がその窪みの最上部に位置していることからみて、後世の自然水流等による攪乱と考える。

墳丘築造時の岩脈の開削は明瞭ではなく、墳裾を確認することはできていない。

O-Pライン (第15図) 後円部墳頂から丘陵側くびれ部にかけての断面である。墳頂部には締まりの悪い墳丘盛土が旧表土層との間に僅かに認められる(6～8層)。旧表土のa層は厚さ10cmほどで平野側に傾斜する。

墳丘築造時の開削は旧表土から比較的急な角度で行われ、築造時の墳裾は明瞭であるが、列石の遺存状態が良好でないために、列石を配置した段階の旧状は不明である。溝内の埋土(3～5層)は列石裏込土と墳丘流土が混在する。

溝の立ち上がりは岩脈の一部を開削するものの、比較的緩やかに認められる。旧表土のa層と地山の層界線の方から、墳丘築造時の開削は周濠状の溝部分だけでなく丘陵部側の広範囲にわたって行われたことがわかる。

列石では確認できないが、溝底を墳裾確認点4とする。

K-Lライン (第15図) 後円部西側の原位置を留める列石遺存箇所部分的に設定した断面である。旧表土はすでにみられず、墳丘築造時の開削(3層下面)が僅かに認められ、その上部を列石裏込土(3層)が覆う。列石は裏込土の上面に部分的に遺存し、その前面には流土(1・2層)が堆積する。墳裾を示す列石は遺存しないが、3層末端が急な立ち上がりを示すことから、墳裾を反映するものと考えた。これを墳裾確認点5とする。

I-Jライン (第15図) 後円部南側に部分的に設定した断面である。旧表土a層以下が墳丘築造時に開削された状況が確認できる。列石は見られないが、地山の窪みが墳裾と考える(確認点6)。墳裾の外側は僅かな立ち上がりがみられる。これは丘陵部側に開削された溝の立ち上がりの延伸部と考えられ、A-Bラインで確認された平坦面へ接続するものとする。

A-Bライン北東側 (第16図) 墳丘主軸に沿ったA-Bラインの前方部側の断面である。図の右側に後円部が接続する。地山、岩脈を削り出して墳丘を構築する状況がみられ、旧表土や盛土は現状では確認できない。

前方部中央は、くびれ部から接続する平坦面から僅かに盛り上がっているように見える。流土の2層が平坦面で厚く、前方部中央で薄いことからみて、墳丘築造時には前方部中央が今よりも少し高かった可能性がある。ただ測量図における前方部の最高所の位置と断面図の位置が明らかに異なっており、掘りすぎや図化精度あるいは分層の精度などの要素が微妙に影響している。したがって、ここではきわめて緩やかに前方部を削り出しているものと表現するに留める。

これに対して、前方部前端的墳裾は比較的明瞭である。墳丘流土の4層下面に、列石の一部を構成したのと考えられる石を境に、緩やかではあるが高さ20cmほどの段がみられ、段の下端を墳裾とした(確認点7)。

前方部前端的土坑は、墳丘側が2段に掘り込まれ、断面がV字状を呈するもので、土坑内には4層が墳丘から流入し、5層がレンズ状に堆積するなど、掘削後長期にわたって開放状態にあったことが予想される。最下部に堆積する6層には出土遺物もみられず、粘土等の混在もみられないことから、埋葬施設とは考えにくい。

E-Fライン北東部 (第16図) 前方部中央から丘陵部側へ、墳丘主軸に直交する方向

に設定した断面である。墳裾部の溝は墳丘側へは一段を形成しながら緩やかに立ち上がり、丘陵側へは比較的急な立ち上がりをみせる。埋土上部の石は、調査時に畦の裏側に存在した石を断面に投影させたもので、ライン上の石ではないが、このように底場からやや浮いた状態で出土する石が多い。

墳裾は溝の墳丘側の下端を採用している（確認点8）。

E-Fライン北西部（第16図） 前方部中央から平野部側へ、墳丘主軸に直交する方向に設定した断面である。図の中程には岩脈が存在し、墳丘の築造にあたって岩脈を緩やかに開削して墳裾部を作り出す。4層は岩脈を開削した箇所に堆積した墳丘流出土で、3層は開削範囲外に自然堆積した流土である。岩脈がほぼ水平となる点をとって墳裾確認点9とする。

U-Vライン（第17図） 平野側くびれ部に設定した断面である。全体的に緩やかな傾斜面を形成するが、流土の2層の堆積が始まる点は地山の削出が目立ち、僅かな段を形成して平野部側に下降する。明瞭な削出が見られない点は後円部M-Nラインに共通し、少なからず隣接する岩脈の影響を受けているものと思われる。しかし、断面取得位置を境に前方部側では下段部が明瞭に認められることから、当該断面の段下端をもって墳裾と考えた（確認点10）。

S-Tライン（第17図） 前方部中央から丘陵側前端部に向かって設定した断面である。約3.5m幅の浅い窪みに墳丘流土（1・2層）が堆積する。測量図を参考にすると、窪みは墳丘丘陵側の溝から継続するものと考えられる。

3層は地山が僅かに窪み部分に収束する黄橙色土で、列石裏込土の可能性が高い。地山の窪み部分に列石が据えられた可能性が高く、これをを墳裾と考える（確認点11）。

G-Hライン（第17図） 前方部E-Fラインと同じ方向で、2m北に丘陵側へ設定した断面である。幅が約1.8mの溝が認められる。列石を構成した石は、この部分では約15cm浮いており、原位置を留めていない。溝の下端を墳裾とした（確認点12）。

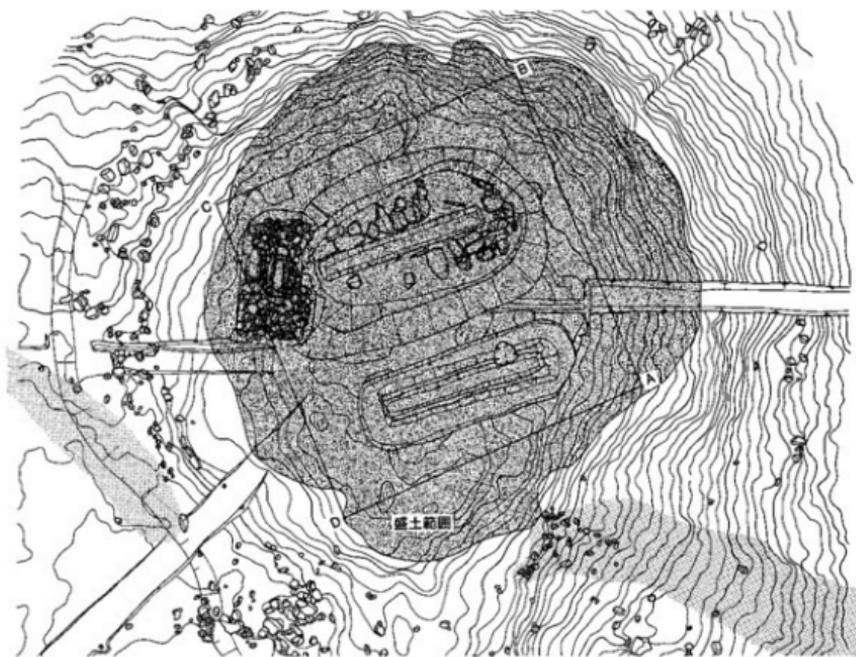
W-Xライン（第17図） 前方部の平野側前端部に存在した扁平石部分の断面である。

石は地山を僅かに削り込んで配置されており、列石を構成する石と思われる。

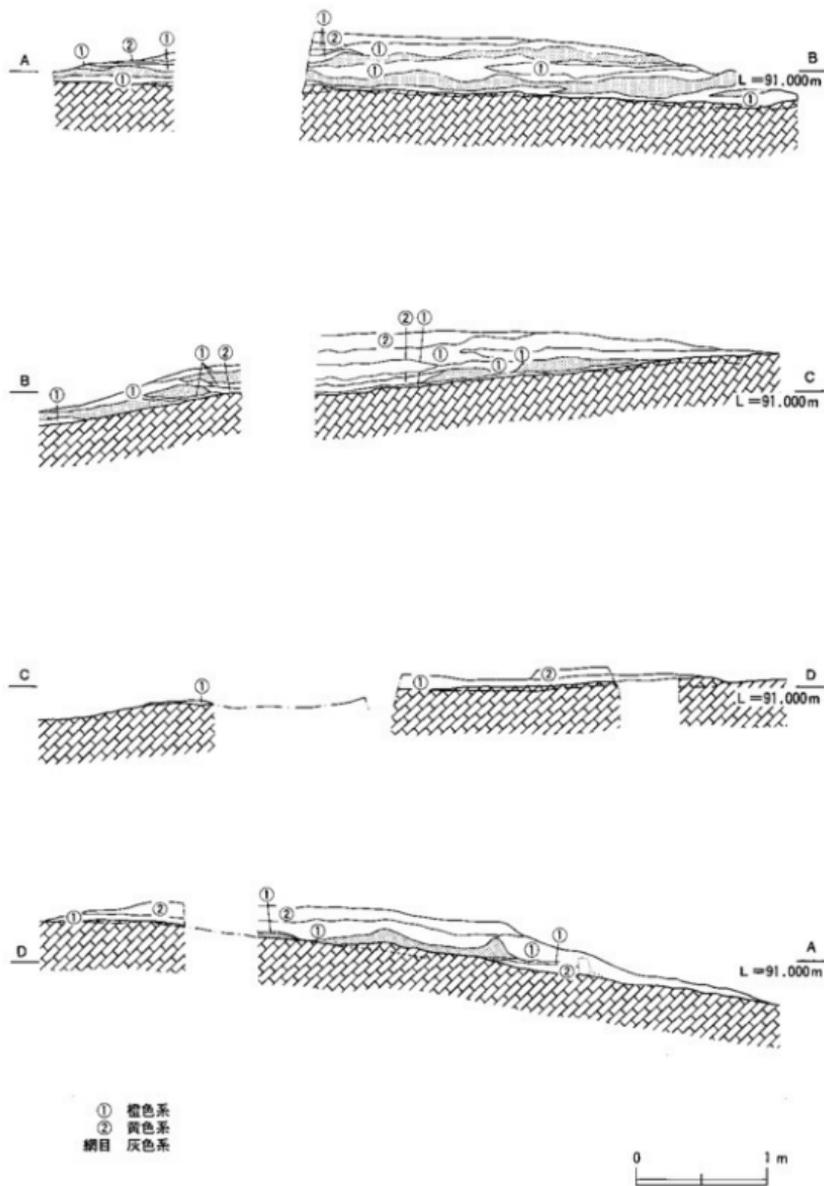
Q-Rライン（第17図） 前部丘陵側で、主軸に直交して任意で設定した断面である。僅かな高さであるが2箇所段があり、下段の端から丘陵側へは緩やかな斜面となる。下段端を墳裾とした（確認点13）。

後円部盛土状況（第18・19図） 第3次調査において、約5.5m四方の移築箇所を除き後円部の盛土層を除去した。第19図はその際の断面である。第1主体部検出面までの盛土は最大で50cm。下方は灰色系土と橙色系土の交互層で、上方には黄色系土が多い。全体的に堅く締まる。

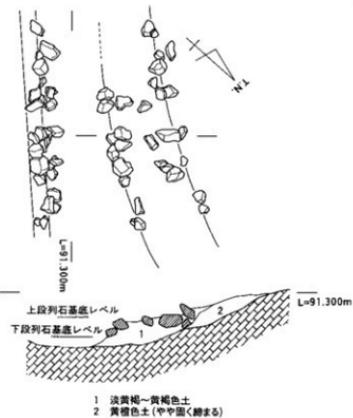
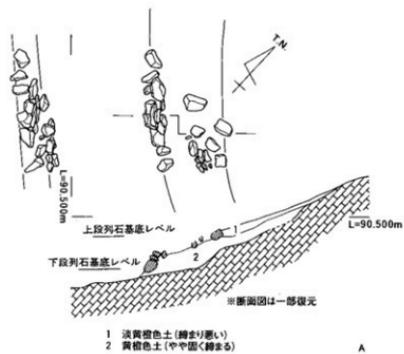
第18図で盛土の平面分布を示している。細かくみると凹凸が著しいが、概ね直径8.6mの正円の範囲にまとまる。



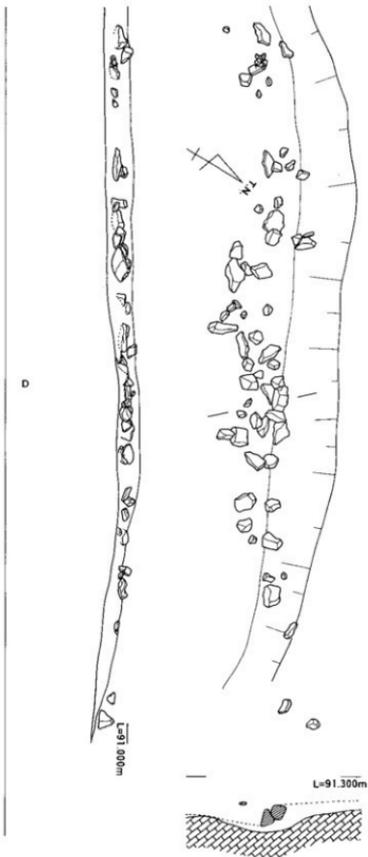
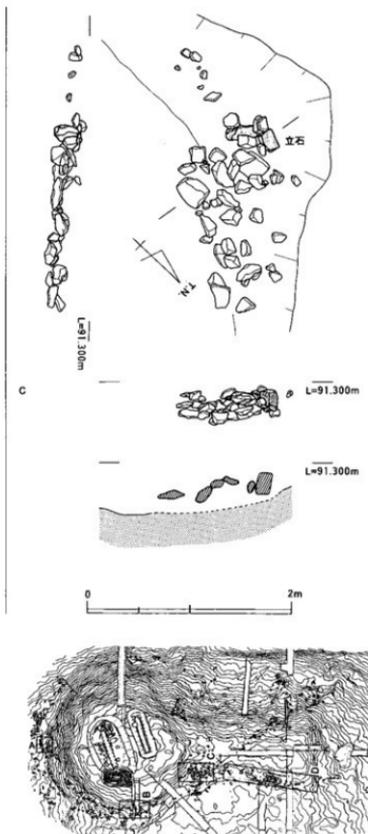
第18図 後円部盛土範囲と盛土断面図取得位置図



第19図 後円部盛土断面図



第20図 列石遺存部平・断面図 (1/40)



列石（第20図） 墳丘概要図（第13図）では、墳丘周辺に多数分布する石をすべて表現しており、原位置を留めるものもあれば、転落したものも含まれている。石は20cm程度のものが最も多く、要所で30～40cmの大型が見られる。石質は花崗岩で、地山の一部を構成する岩脈と同質のものである。墳丘築造時に破碎した石を用いた可能性が高いが、稜線を留めないやや丸みをもった石もみられることから、古墳の北西側の斜面に露出する岩脈等の転石も利用されたものと考えられる。

列石遺存部を平断面共に把握できた地点は限られ、第20図A・B地点が比較的良好である。墳裾をあらかじめ2段に削出し、黄橙色の裏込土を10～25cmの厚さで施し、上下端に立石を置くか、あるいは小石を2～3段積み上げることにより、2段の列石を構築している。上段と下段の幅は65～70cmをはかり、土層断面で列石の位置を推定したC-Dライン平野側の状況とも概ね一致する。これに対して上下段間の基底部のレベル差は、後円部丘陵側の第20図Bが15cmであるのに対して、C-Dライン平野部側では約40cm程度の差が見られ、平野側へ墳丘基底線が下降するにしたがって大きくなる傾向がある。すなわち、後円部の列石配置を見る限り、水平段を意識した構築手法は採用されず、地形に応じて裾部を鉢巻き状に取り囲む形態であったと考えられる。

第20図Cはくびれ部の列石配置状況である。最奥部に「く」の字に組み合わせた立石があり、その前面に幅1mで緩やかな傾斜で石が敷かれる状況が見られ、前端には30×25cmのやや大ぶりの石が配される。立石が後円部列石の上段に、石敷前面が下段に対応するものとする。第20図Dは前方部側の列石である。崩落が著しいが、原位置を留める地点では溝底からやや浮いた位置に15cm大の小石を2石積み上げ、墳丘側に裏込土を施したものと考えられる。

このようにくびれ部から前方部にかけての列石配置状況は、くびれ部で一旦列石の幅を広げた後、前方部に向かって収束する。前方部の列石は裾部に立石かあるいは小石積みをも1列巡らせたものであったと推定される。

墳丘の平野側については遺存する石が少なく、丘陵側と同様の列石が巡っていたかどうかは必ずしも明瞭でない。しかしC-Dライン断面では裏込土を明瞭に留め、くびれ部ではやや大きめの石が存在することから、M-Nラインで見た岩脈の影響を一部で受けながらも、基本的には墳裾を全周したのと考えられる。

墳丘形態の復元 (第21図) 墳丘測量、土層断面、及び列石遺存状況に基づいて、墳裾と列石の旧状を復元する。ただし、これまでに見てきたように平野側を中心として列石の遺存状況が良好ではなく、それに伴って裏込土も流出する。列石が遺存する箇所は列石ラインを墳裾と認定することができるが、列石を留めない箇所は、地山削出段階の裾等を採用せざるを得ない。A-Bライン後円部南端は地山削出の裾と列石ラインとの差が他と比べて最も大きく、約55cmを測る。以下で復元する墳丘形態や計測値はこれを最大値とする誤差が含まれている。

土層断面の検討により合計13の墳裾確認点を設定した。第21図の黒丸に平面位置を記している。また、列石遺存部を参考に他の部位の列石分布を見ると、後円部の丘陵側については概ね上下段のラインを追うことが可能である。平野側はC-Dラインで列石位置を確認できることから、後円部についてはほぼ墳裾ラインを特定することができる。

前方部丘陵側は溝の下端を墳裾と認定して、前方部前端部分に接続させ、前方部平野側は断面と測量図の形状を勘案してラインを推定したが、後円部に比べて断面形状が緩やかで、曖昧な点が多い。なお、前方部前端丘陵側のS-Tラインで確認した緩やかな窪みは、先に記したように墳裾の溝から継続するものと考えられる。測量図を参考にすると、前方部前端のコーナーに対応して、屈曲する様子が認められ、前端部の土坑外縁線付近に接続しているものとする。これを破線で示している。土坑については概要で記したように、周辺埋葬施設とは考えにくく、墳裾の溝と同様の墳丘を区画する意味合いをもつ可能性が高い。

以上により古墳の規模は、全長21.4m(土坑外縁線まで計測して23.0m)、後円部直径が12.4m、高さが1.9m、くびれ部幅5.5m、前方部長9.5m、前方部幅が最も細い箇所で4.5m、前端幅で7.8mとなる。墳丘主軸方位はN-49°-Eである。

なお墳丘基底は最大で1.4mのレベル差があり、平野側に傾いて築造されることから、後円部墳頂平坦面と前方部最高所を結ぶ墳頂主軸は墳丘主軸とは微妙に異なり、約1m丘陵側に平行移動する。3基の主体部は墳頂主軸に基づいて設定されたものと見られる。



第21図 墳裾確認点と墳丘形態復元図

3) 墳丘出土の遺物

出土状況 (第22図) 墳裾で約100点の土器片が出土した。埴輪は含まれない。細片が多いが、分布状況を見ると決して散漫な分布ではなく、数カ所にまとまる傾向がみられる。個体の識別を念頭において、土器の胎土を観察して各分類毎に分布を確認すると、その傾向はより一層顕著となる。土器は色調や含有鉱物の種類・大きさなどをもとにして、下記の5種類に区分した。

A類 淡茶褐色を呈し、やや粗質の生地。

石英や長石はあまり目立たず、0.5mm程度の角閃石あるいは黒雲母からなる黒色粒子が多く含まれる。下川津遺跡B類胎土に類似。

I類 赤橙色を呈し、肌理の細かな生地。

0.5mm程度の石英・長石の粒子を含み、中でも長石の割合が多い。

酸化粒子はほとんど含まない。黒色粒子は微細なものを含む。

U類 ややにぶい赤橙色を呈し、肌理は比較的細かい。

0.5mm以上の石英・長石を含み、中でも石英の割合が多い。

酸化粒子はほとんど含まない。黒色粒子は微細なものを含む。

O類 U類に類似する胎土で、0.5mm程度の酸化粒子を含む。

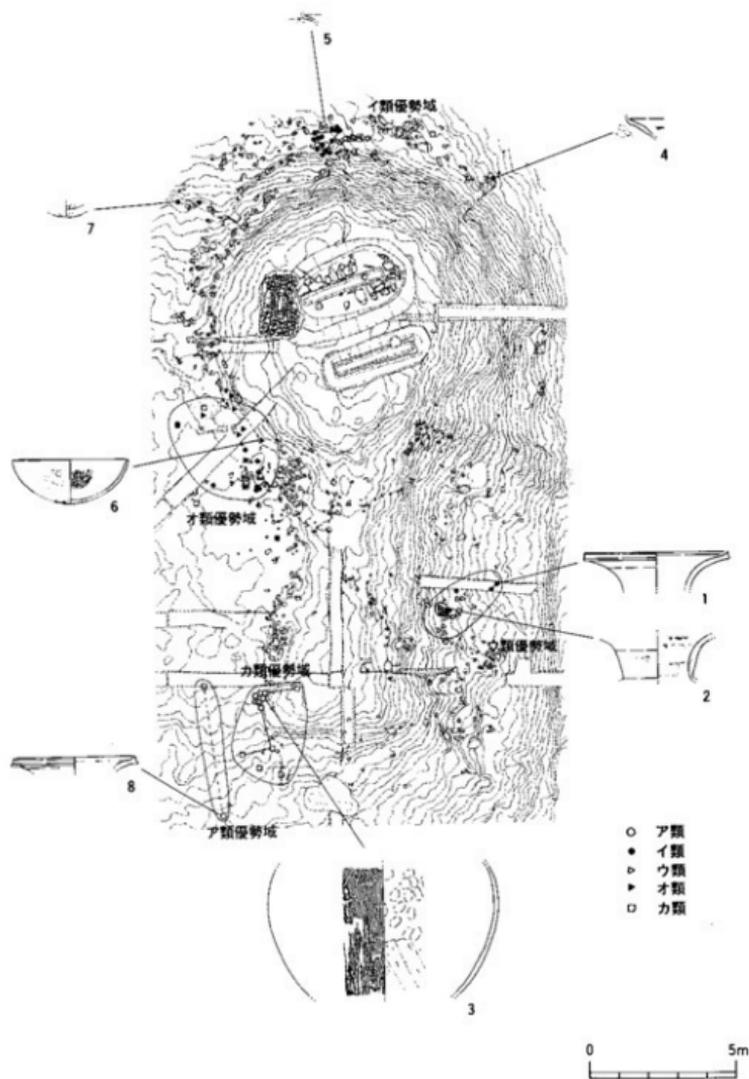
K類 I類に類似する胎土で、0.5mm以上の酸化粒子を多く含む。

このうち、A・U・K類は前方部にそれぞれ分布箇所を異にして集中し、O類はくびれ部のみに分布する。I類は後円部とくびれ部に4箇所ほどに分かれて分布するが、後円部の後端部に最も集中している。それぞれを分布優勢域と仮称する。

前方部に分布するA・U・K類はいずれも広口壺で構成されている。図化していない破片も広口壺の胴部と推定されるものが多い。これに対して後円部からくびれ部にはI類・O類の丸底鉢や小型器種が広く分布する。

各土器片は多くが墳裾の墳丘流土層中から出土するが、K類の広口壺は墳丘上出土破片と墳裾出土破片が接合しており、墳丘上に置かれたものが転落した可能性が高い。前方部には少なくとも3～4個体の広口壺が置かれたものと考えられる。後円部には広口壺以外の器種が多く、これらについてはどのような形で供献されたかを示す材料は乏しい。

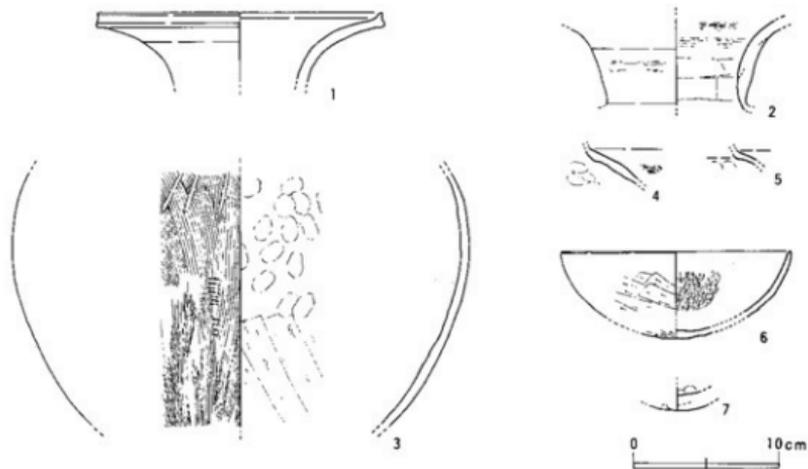
上記の胎土区分に基づいて、第5章2)の胎土分析が行われている。



第22図 墳丘遺物出土状況平面図

出土遺物（第23・24図） 1は口径19.8cm、残存高4.7cmの広口壺口頸部片である。口径の1/5ほどが遺存し、器表はさほど磨滅しない。頸部から口縁部にかけて大きくカーブを描いて外反する。口縁端部は上下方に拡張し、端面は浅く凹む。端部の拡張は上方に鋭くつまみ上げ、下方は丸く僅かに肥厚させるもので、上方に比べて下方の拡張は顕著でない。器面調整は内外面ともヨコナデが顕著で、外面中程にナデ境の条線が形成される。胎土は赤橙色の細かい素地で、白色の長石粒がやや目立ち、微細な黒色粒子が少量含まれる。イ類に分類したが、2の広口壺頸部とはあまり差がなく、同一個体の可能性もある。

2は広口壺頸部片で、頸部外径9.8cm、残存高6.3cmを測る。頸部径の1/5ほどが遺存する。器表はさほど磨滅しない。やや外開きの頸部から緩やかな屈曲をもって口縁部に接続する形態。頸部中程の厚さが約10mmであるのに対して、頸胴境では3.5mmと極めて薄い。断面で粘土帯の内傾接合痕が観察できる。器面調整は外面が横方向のナデ、内面が同方向の板ナデ。外面の中程に不明瞭なヘラミガキが1条巡る。胎土はやや粗い素地に0.5mm程度の石英粒を多く含んでおり、ウ類に分類した。



第23図 墳丘出土土器1 (1/4)

3は壺胴部片である。口頸部の形状は不明。胴部径は31.5cmで、残存高は18.0cmをはかるが、胴部径の1/5程度の破片から復元した推定値である。外面は上半に6条/cmの粗い刷毛目、下半に12条/cmの細かな刷毛目を施し、上半は縦方向の間隔を置いたヘラミガキを加える。刷毛目調整の地下に斜位の叩き目が部分的に遺存し、叩き成形を行っていることがわかる。内面は上半に指頭圧痕が顕著で、下半は斜位のヘラケズリを行う。胎土は黄橙色のカ類で、赤色の酸化粒子が多く含まれる。

4は小型の壺あるいは鉢の胴部上半の小破片である。外面を細かい単位の刷毛目で調整した後にそれを軽くナデ消す。内面は指頭圧痕が顕著。胎土は素地は細かいが、5mm程度の長石粒と微細な黒色粒子を含み、イ類に分類した。

5は小型土器の胴部上半の小破片である。器種は不明。緩やかなカーブを介して頸部に接続する。器面調整は磨滅により不明瞭で、内面に指頭圧痕が僅かにみられる。胎土は素地は細かく、微細な石英粒を多く含む。ウ類に分類した。

6は口径15.9cm、復元高6.0cmの丸底の鉢である。口縁部1/6、底部1/4が遺存する。胎土の特徴から同一個体と推定される。完全に丸底を呈する底部から口縁部にかけて、外面に斜位のヘラケズリを留め、端部周辺は内外面にヨコナデを加える。体部内面は縦位のヘラミガキが間隔なく認められ、黒斑が残る。胎土は精良で、石英粒と赤色酸化粒子が目立つ。オ類に分類した。

7は器壁が厚い土器片で、壺か鉢の底部片と推定した。底縁の稜線はみられず、丸底形態に近い。外面は指頭圧痕とナデがみられ、内面は指頭圧痕かあるいは原体の圧痕を留める。色調は黒灰色で、黒斑部の破片であろう。胎土は素地が細かく、石英粒が少ないことからイ類に含めたが、後円部後端付近に分布するイ類の土器片とは別個体である。

8は口径16.5cmの広口壺口縁部である。口縁部径の1/8ほどの破片。磨滅が顕著で器面調整はほとんど残らない。頸部から緩やかに外反する形態で、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線を1条巡らせる。外面に沈線状の浅い線が巡るが、ヨコナデ境の条線と考えられる。内面には端面拡張部の内側に強いヨコナデが残る。茶褐色を呈し、胎土は素地がやや粗く、角閃石および黒雲母を多く含むもので、下川津B類の胎土と共通するオ類である。

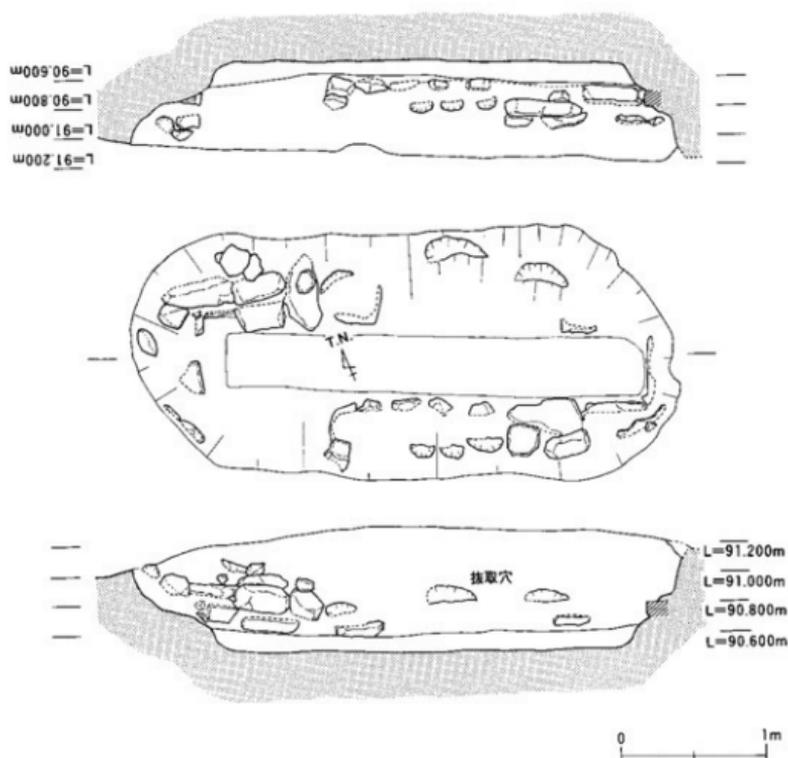


第24図 墳丘出土土器2 (1/4)

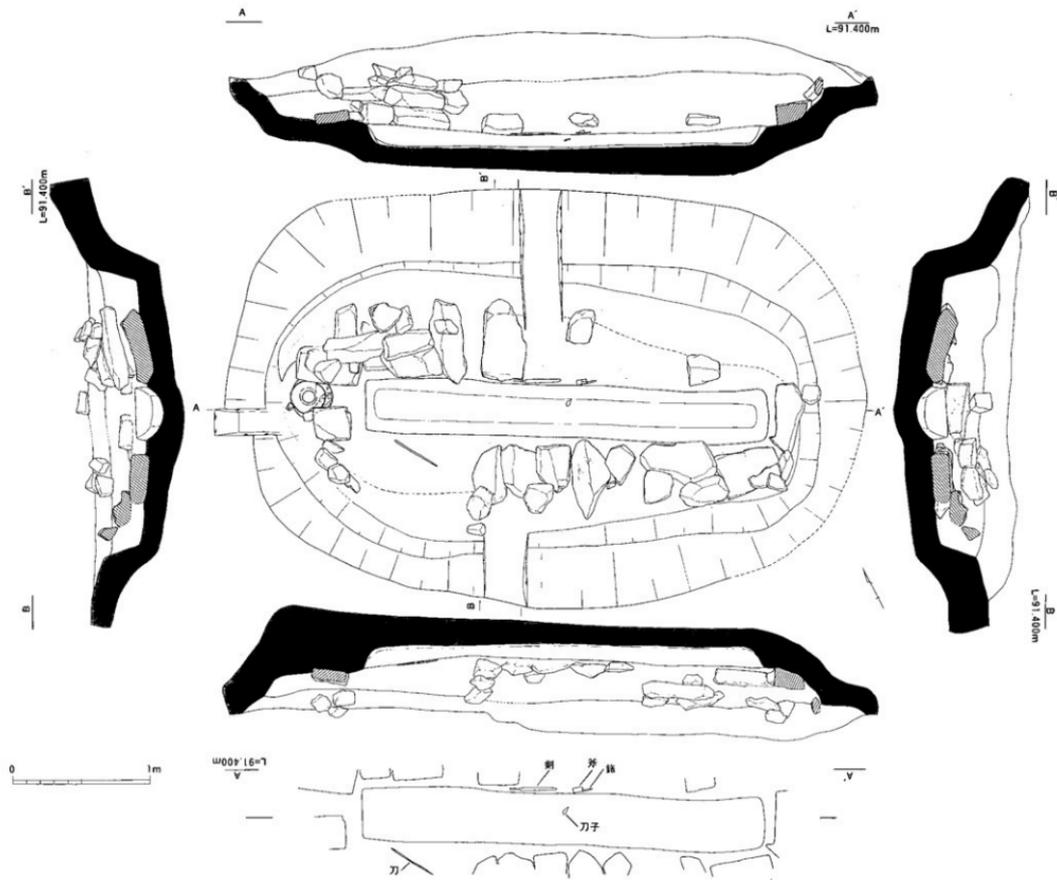
第3章 埋葬施設の調査

1) 第1主体部

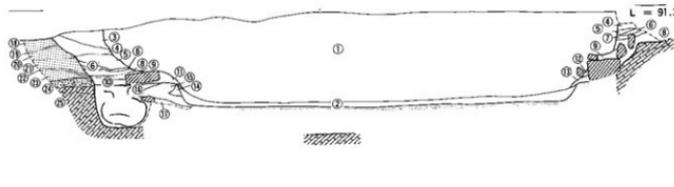
検出状況と盗掘坑 (第25図) すでに記したように、墳頂部精査段階で検出したプランは盗掘坑のプランを誤認していた。盗掘坑は第3主体部の礎敷面を一部損壊し、後に検出した木棺粘土床の位置をカバーするように本来の墓坑のプランと重複して掘り込まれる。埋土は上位は締まりが悪い淡黄灰色土で下位ほど堅い灰褐色土に漸移するが、自然堆積の



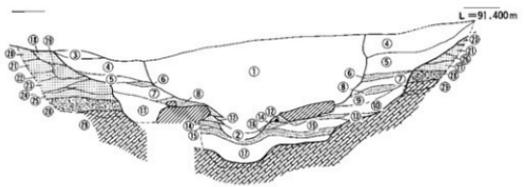
第25図 第1主体部盗掘坑完場状況平面図・立面図 (1/40)



第26图 第1主体部平面图·立面图 (1/30)



- (高層坑埋土)
- 1 灰褐色土 (塊石混入)
 - 2 暗灰褐色土 (赤褐色粘土ブロック混)
- (積上部硬埋土)
- 3 褐色土 (風化礫混)
 - 4 暗褐色土 (風化礫混)
 - 5 赤褐色粘土 (砂混)
 - 6 暗灰白色土 (やや粗い)
 - 7 赤褐色粘土 (砂混)
 - 8 灰白色土 (やや粗い)
 - 9 赤褐色粘土 (砂少粘混)
 - 10 淡灰褐色土 (きめ細かい)
 - 11 赤色粘土 (純度高い)
 - 12 赤褐色粘土 (砂混)
 - 13 赤色粘土 (純度高い)
- (積基盤土)
- 14 灰黄色粘土 (純度高い)
 - 15 赤褐色粘土 (純度高い)
 - 16 淡灰白色土 (空層多)
 - 17 灰褐色土 (風化礫混)
- (墳丘硬土)
- 18 淡灰黄色土 (硬く締まる)
 - 19 灰褐色土 (やや粘土質)
 - 20 淡灰白色土 (硬く締まる)
 - 21 暗灰白色土 (硬く締まる)
 - 22 褐色土 (やや粘土質)
 - 23 淡灰黄色土 (硬く締まる)
- (墳山)
- 24 灰褐色土 (旧地表)
 - 25 乳灰褐色土 (地山)
- 黄褐色土



- (高層坑埋土)
- 1 灰褐色土 (塊石混入)
 - 2 暗灰褐色土 (赤褐色粘土ブロック混)
- (積上部硬埋土)
- 3 褐色土 (風化礫混)
 - 4 灰褐色土 (やや粗い)
 - 5 淡灰褐色土 (風化礫混)
 - 6 赤褐色粘土 (砂混)
 - 7 灰褐色土 (赤褐色土が層状に入る)
 - 8 赤褐色粘土 (砂混)
 - 9 黄褐色土 (花崗岩小礫混)
 - 10 淡灰褐色土 (きめ細かい)
 - 11 灰褐色土 (黄褐色土ブロック混)
 - 12 赤色粘土 (純度高い)
 - 13 灰黄白色土 (赤色土ブロック混)
- (積基盤土)
- 14 赤色粘土 (純度高い)
 - 15 灰褐色土 (小礫混、硬く締まる)
 - 16 赤褐色粘土 (砂混)
 - 17 灰褐色土 (褐色土ブロック混)
- (墳丘硬土)
- 18 灰褐色土 (風化礫混)
 - 19 淡灰白色土 (やや粗い)
 - 20 灰褐色土 (硬く締まる)
 - 21 灰褐色土 (硬く締まる)
 - 22 暗灰褐色土 (硬く締まる)
 - 23 暗褐色粘土 (硬く締まる)
 - 24 暗灰褐色土 (やや軟質)
 - 25 灰褐色土 (硬く締まる)
 - 26 灰白色土 (硬く締まる)
 - 27 暗灰色土 (下位に薄い暗褐色土が入る)
- (墳山)
- 28 暗灰褐色土 (旧地表)
 - 29 乳灰褐色土 (地山)
- 黄褐色土

第27図 第1主体部断面図 (1/30)

※12層下部の黒丸は鉄刺の出土位置を示す

層は見られないことから、盗掘後は比較的短時間で埋戻されたものと考えられる。埋土中から7世紀ごろの須恵器片が出土した。

盗掘坑の埋土を除去した段階で、坑の北西側と南東側で1～3段の石積みが見られ、その間に赤色粘土を基盤とした幅35～40cm、長さ2.9mの木棺痕跡が確認された。埋土はややきめの細かい灰褐色土で、側面の赤色粘土が少量流入する。棺床粘土は面を良好に留めており盗掘によって乱れた形跡はない。

盗掘が棺内に及んだか否か判断材料に乏しいが、盗掘坑の平面プランが木棺痕跡の位置と一致すること、須恵器以外の新しい遺物が混じらないこと、また後述する火葬墓の可能性が高い石組み遺構など7～8世紀代において当丘陵の開削行為が顕在化している点から見て、古墳時代末期から奈良時代にかけて丘陵の開削行為の過程で盗掘を受け、その際には未だ木棺が腐朽していなかったことによって棺床が大きく乱されなかったと考えるのが最も合理的である。

構造 (第26・27図) 墓坑は後円部墳頂の南寄りに掘削され、後の第3主体部の構築によって東側の一部を損失する。確認面での規模は長さ4.75m、幅3.08mの楕円形で、主軸方位はN-63°-Wを測る。上面から20～30cmの深さまでが緩やかな傾斜で、その下は長さ4.1m、幅2.1mの範囲が急な角度で掘り込まれる。傾斜変換点以下の墓坑の形状は西がやや幅広く、東は立ち上がり西より緩やかなために、下端線で東西を比較するとその差は一層顕著である。なお、排水溝等の施設は設けていない。

墓坑中央のやや東寄りに赤橙色粘土で構成される粘土床を基盤とする割竹形木棺の痕跡が認められた。第26図の薄網部は赤橙色粘土の広がり示している。棺材は遺存せず、木棺痕跡から復元される木棺の規模は長さ2.97m、幅0.4m、深さ0.12～0.16mを測り、断面は半円形で小口部は60～70°の傾斜をもって斜めに立ち上がる。棺底面は全体的にほぼ水平で、東西の小口部の間のレベル差もほとんどなく、棺の幅も東西で等しいことから、幅が一定の割竹形木棺を、概ね水平に安置したものと考えられる。棺底に朱はみられなかった。

木棺の周囲には2～3段の石積みがある。側縁基底は長さ0.5～0.6m、幅0.25～0.3m、厚さ0.1～0.15mの細長の石の小口面を棺側に向ける箇所と、やや幅広く厚めの石の長辺を棺側に向ける箇所があり、一様ではない。2石目は、残りの良い北西・南東側でみると、基底石の先端から0.1mほど前面にせり出す状況が見られるが、3石目はいずれも2石目前縁から0.15cmほど後退した位置に置かれており、2石目の安定化を図る裏込めの意味合いが

強い。したがって壁体として3石目を認識できる箇所はないことから、石積みの高さは基底部から2石目の上端までを測って0.3mとなり、概ね墓坑の傾斜変換線に一致する高さとなる。なお、墓坑南西部や北東部では石積みが見られず、また墓坑南東部では、原位置を留める2石目相当の石材の下にそれを支えるべき石が見られない。さらに西側小口部基底の2石には0.16mほどの間隔があるなど、石積みの簡略化のみならず石積みを省略して土で埋める工程を想定せざるを得ない要素が認められる。また、蓋石の架構の有無については積極的な判断材料はないものの、上記の点からみて少なくとも石積み上部を全面的に覆う形状の蓋石を想定するのは無理であろう。

石積みや棺の下部構造は部分的なトレンチで確認したに留まるが、これらは概ね次の手順で構築されたものと考えられる。墓坑は先の傾斜変換点を経て、上面から約0.8mで一旦平坦面を形成し、その中央部をさらに幅0.4m、深さ0.1mで断面U字状に掘り窪めた墓坑底を形成する。墓坑底の平面的な広がりには明確でないが、後述する西側小口部の土器埋納箇所にはレベルからみて墓坑底は及んでいないものと考えられることから、概ね棺床の位置に重複して存在した可能性が高い。墓坑底は厚さ14cmほどの厚さで灰橙白色土（第27図横断面の17層）の置土を施した後、厚さ4cmの赤橙色粘土（同16層）を敷き詰め、断面半円形の棺床を形成する。これを棺床下部粘土と仮称する。

さらに棺床外縁部に厚さ8cmほどの置土（同13・15層）を施し、棺側面を中心として赤橙色粘土（同14層）を再び敷く。後に述べる棺外の副葬鉄器類はこの赤橙色粘土の上面で検出されており、棺の設置もこの段階で行われたものとする。この粘土を棺床上部粘土とする。

鉄器類の上面はさらに赤色粘土（同12層）で被覆されていた。この粘土は他と比べて赤味が強く、砂粒の混じりも少ないことで区別し易く、棺の側面から石積みの基底石の下部に潜っている状況が確認された。したがって棺と副葬品を設置した後少なくとも棺側縁部については赤橙色粘土で被覆し、その上に基底石が設置されたものと考えられた。この粘土を棺側縁被覆粘土とする。この粘土は第5章の分析の結果、花崗岩風化土壌中に含まれる粘土で、古墳周辺においても入手が可能な粘土であることが判明した。また、粘土中へのベンガラや朱の混合は行っていない。

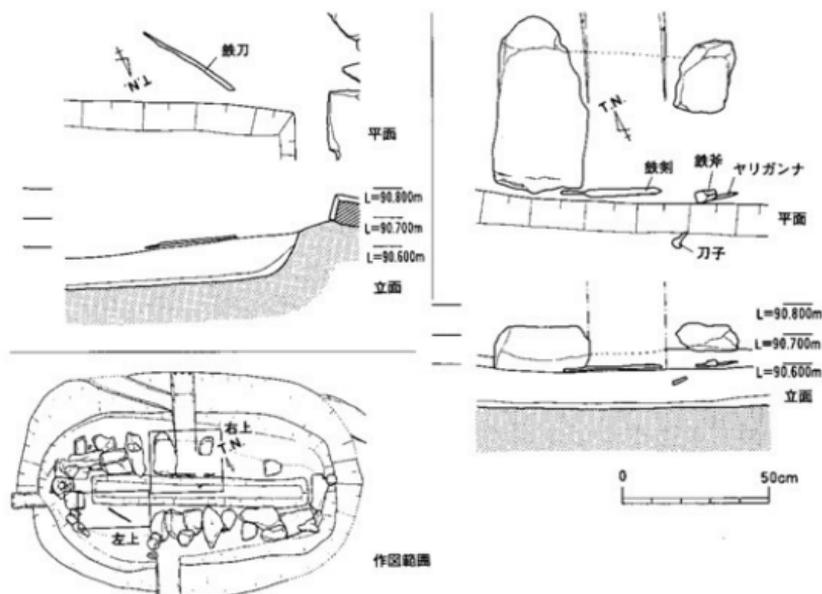
この粘土が棺の上部まで完全に被覆していたかどうかについては、盗掘のために明らかではない。ただし、棺の北側では盗掘時に棺の被覆粘土（同12層）が一部棺内に流入する状況がみられ、それがブロック状に落ち込むのではなく、薄く棺内部へ落ち込んでいること

から見ると、側縁部分のみを被覆していた可能性が高いと言える。

石積み過程においても赤色粘土を多用する状況がみられた。基底石の上部では棺床と同様の赤橙色粘土層が一樣に認められ、さらに灰褐色土の間層を介して墓坑の傾斜変換点付近にも赤橙色粘土層が存在する。この2枚の粘土層は先の2石の石積みに対応し、一石毎に粘土で一旦墓坑内を被覆する工程が復元される。ただし、上部では粗い砂を多く含む他の粘土層と比べて純度はかなり低い。

墓坑の傾斜変換点より上は、礫を含む灰褐色土で埋められており、この土層は墳丘盛土①に類似した土層である。墳頂部が狭いことからみて、墓坑掘削土の残余を盛土として転用した可能性もあろう。

以上のように第1主体部では明確な壁体をもち蓋石を備えた通常の竪穴式石槨とは様相を異にする石積みが見られた。棺側縁と棺外副葬品を粘土で被覆した後に基底石の設置を行うこと、石積みを省略して土で埋めた部分があることは、石室や石槨と呼称するに躊躇される点である。むしろ、基本的には粘土槨の埋葬手順に合致しており、一部で竪穴式石槨の石積みという行為を取り入れたもの、とするのが適当であろう。



第28図 第1主体部副葬品(鉄器類)出土状況

遺物出土状況(第28・29図) 副葬品は鉄器5点、土器1点がある。いずれも棺外副葬で、うち盗掘時に棺内に流入した鉄器1点を除き、鉄器は赤色粘土で被覆された状態で出土している。土器は西側小口の基底石の下部で口縁部を上に向けて正立していた。

<鉄器>

棺外の北側中央部分では鉄剣1点・鉄斧1点・ヤリガンナ1点が出土した。また近接して棺内に流入した刀子1点が棺底から8cmほど浮いてみられた。鉄剣は切先を東に向け、基底石と棺床肩部との間に棺主軸とほぼ並行して置かれる。鉄斧とヤリガンナは鉄剣の切先から約15cm東の位置に重なって出土した。上位の鉄斧は刃部を西に、下位のヤリガンナは刃部を東に向けて置かれる。刀子は鉄斧の刃部から南に15cmほどの位置に、刃部を南西に向けて棺内に落ち込んでいた。鉄剣および刀子は柄部に木質が見られるが、鉄斧袋部には木質がみられないことから、鉄斧は着装していなかった可能性が高い。

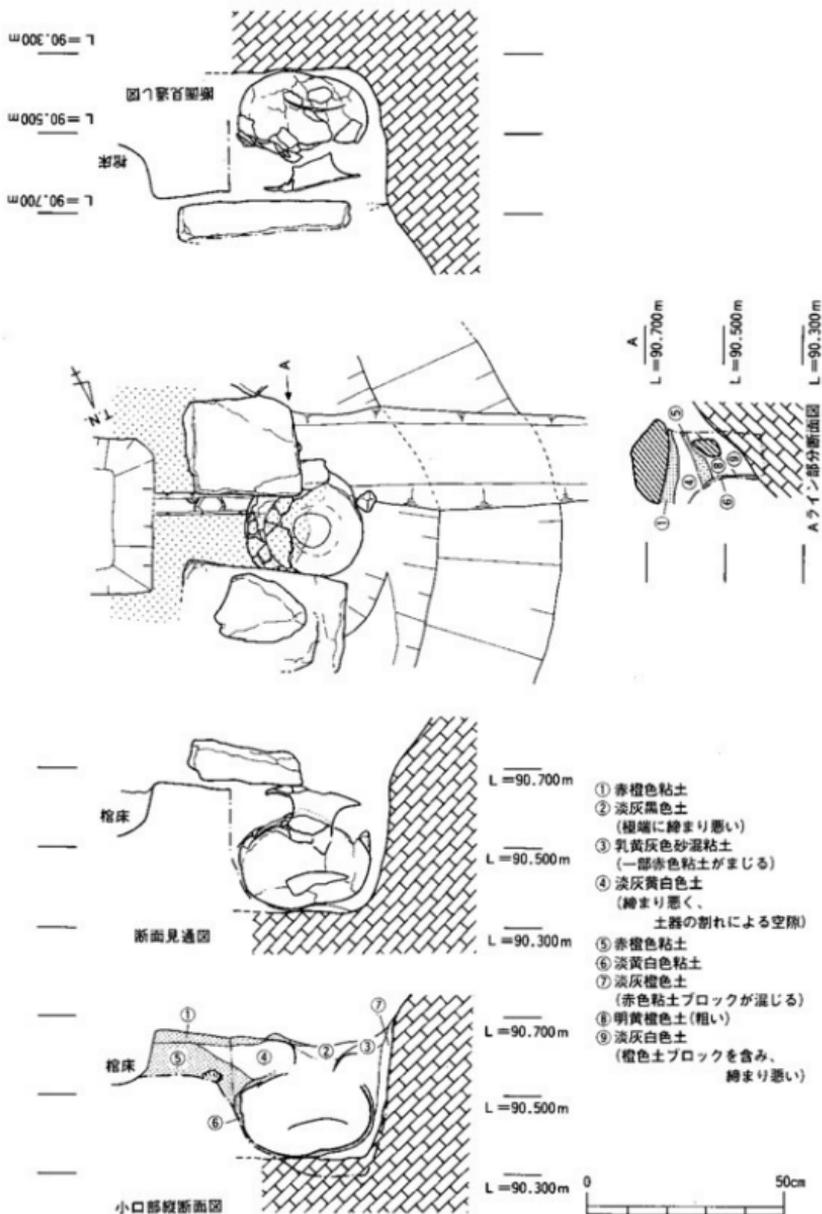
棺南西側では鉄刀が1点出土した。切先を西に向け棺主軸とは約30°傾いて斜めに置かれている。また立面的には、棺の中央部の緩やかな窪みに沿って傾斜して置かれており、柄部と切先とのレベル差は約5cmをはかる。平面的にみて刀が斜めに置かれている点は、刀の上部が赤色粘土で被覆されていたことからみると、盗掘時に原位置を動いたとは考えにくい。

<土器>

棺床粘土に細いトレンチを入れて下部構造を探索する過程において、西側小口部の基底石下部で土器が出土した。土器は高さ37cmの広口壺で、口縁部を上にして正立する。小口部基底石や土圧によって若干押しつぶされ、特に肩部付近の破損が著しいが、元来完形で埋置されたものと考えられる。

土器の胴部内には赤橙色粘土ブロックを少量含む灰白色系土が若干の堆積するものの、空隙が多く、また口縁部付近には締まりの悪い腐植土状の淡灰黒色土が流入していた。土器内埋土を水洗したが、微細な炭化物を少量検出したのみで出土遺物はなかった。

土器は墓坑底の西端に接して置かれ、胴部には淡黄白色粘土の薄い被覆が認められた。土器の周囲の土は小礫を交える灰白色系の置土(8、9層)、赤橙色粘土(5層)、灰黄白色土(4層)の順で埋積しており、口縁部の上面にはさらに赤橙色粘土(1層)が薄く被る。



第29図 第1主体部副葬品(土器)出土状況(1/15)

墓坑横断面と照合すると、8、9層は墓坑底置土（第27図横断面17層）に、5層は棺床の上部及び下部粘土（同図14・16層）に対比でき、1層は基底石下部に滲ることから見て棺側縁被覆粘土（同図12層）に対比できる。4層は締まりの悪い土で、土器に近いほど厚みを増すが、口縁部より上には見られない。4層は墓坑横断面における棺側縁被覆粘土を施す直前の置土（同図15層）に対比できるであろう。要するに、棺や鉄器類を墓坑内に設置した時に、土器は肩部まで埋没しており、口縁部から肩部付近までは棺床の赤橙色粘土の上に露出していたものと考えられる。

棺側縁被覆粘土に対応する1層は、口縁部の棺側半分までは確実に被覆することを平断面で確認したが、土器を取り上げた後に観察すると棺と反対側の口縁部内面にも同様の粘土が付着していることが判った。1層は棺小口部から離れるほど薄くなっていることから、調査中には気づけなかったものの、元来口縁部全体を薄く被覆した可能性が高い。

小口部の石は1層の粘土が口縁部を被覆した後に置かれている。そのために口縁部は小口部の下に相当する箇所まで割れており、また同時にこの段階で土器が全体的に押しつぶされたものと考えられる。

以上のように、当該土器の副葬は墓坑の構築と棺埋納の工程に密接に関わっており、5層上面で棺や鉄器類の設置が行われた際に、口頸部を露出させているという点は葬送儀礼の様式を検討する上で興味深い。

出土遺物（第30・31図）

<鉄器>

10は棺外北側で切先を東に向けて出土した鉄剣である。茎尻が欠損するが、剣身は完存して長さ24.8cmをはかる。茎部長は現状で9.1cmである。厚さは0.5cmで、錆はみられない。身の中程より下位は刃部が直線的で、上位ほど身幅を減じ、切先は内彎して窄まる形状である。身の最大幅は3.4cm、切先直前の幅は2.6cmをはかる。直角関で、茎は茎尻に向かって細くなる形状である。X線写真においても目釘穴は確認できなかった。関から0.6cm上部に直線的な把縁があり、そこから茎部にかけて把の木質が部分的に遺存する。把縁より上部には全く木質は認められなかった。

11は棺外南西側で切先を西に向けて出土した鉄刀である。切先と茎尻が欠損する。現状で全長38.1cm、刀身長は33.0cmである。刀身幅は2.1cm、背部厚は0.45cmをはかる。切先は先端から約5cm付近から緩やかに窄まり、背部は遺存部が少ないがやや内彎する傾向がみ

られる。関部は刃関のみの片関で、斜めに落ちて茎部とは鋭い屈曲を介す。茎部の幅は1.45cmで茎尻に向かって僅かに幅が減じられる。遺存部に目釘穴は見られない。なお現状の茎部末端は三角形を呈し、当初は茎尻と見ていたが、錆落とし処理後に観察すると端面の乱れが著しいため折れ面と判断した。茎部には木質は認められなかった。

12は全長7.8cmの小型の有袋鉄斧である。幅は袋部で3.2cm、刃部3.4cmをはかり、袋部がやや内彎して身部との間に僅かな段を形成するが、身部は直線的である。袋部口縁は長径2.2cm、短径1.2cmで、扁平な楕円形を呈する。折り返しは顕著であるが、左右で0.3cmの間隙を有する。刃部は背面側から見て右側が研ぎ減りで湾曲する。袋部内面に木質は認められなかった。

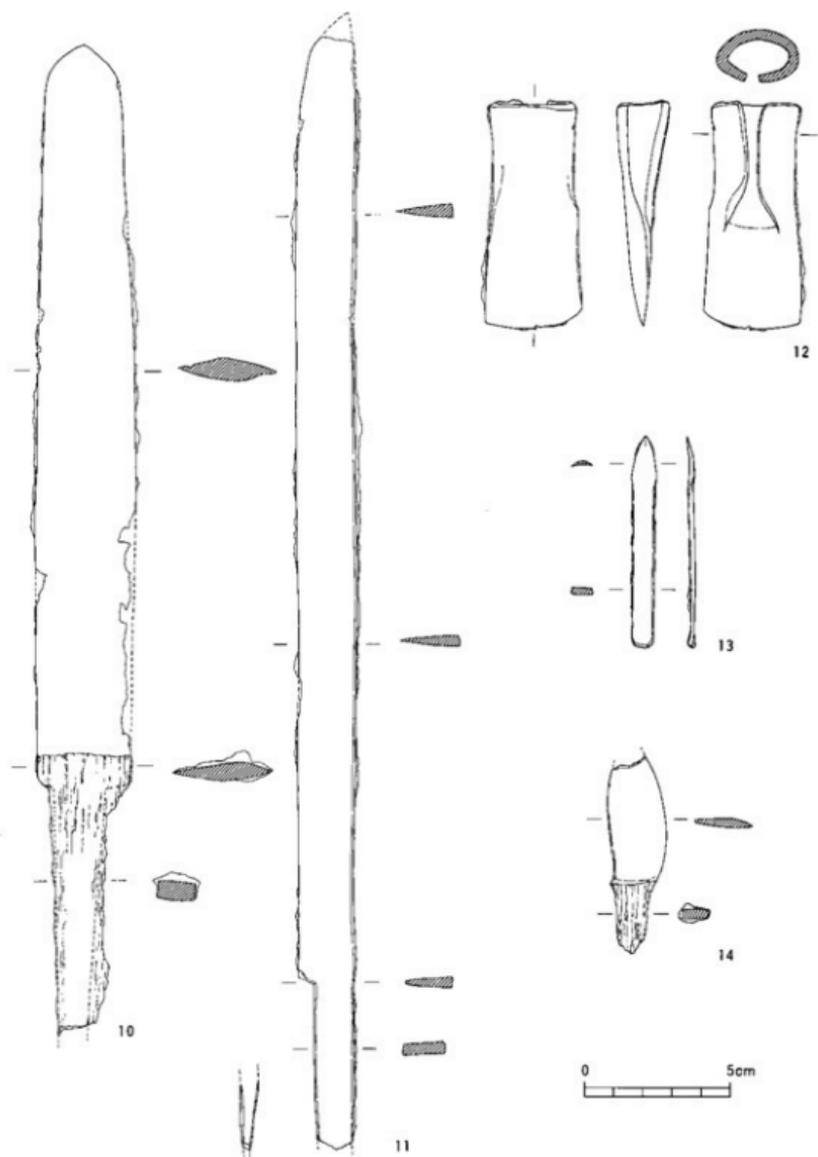
13は完形の鉄ヤリガンナで、全長7.2cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmをはかる。刃部と共に末端部もやや反り上がる。刃部は長さ1.5cmをはかり、幅が広がらない形態で、断面は三日月状を呈する。

14は切先を欠損する刀子で、現存長は6.9cmをはかる。刃部は外方に大きく膨れ、最大幅は2.1cm、厚さは0.4cmをはかる。背部も若干中央部が膨らむ形態で、平坦部の厚みは0.1cmで、刃部厚より薄い。茎部には全面的に木質が遺存し、柄縁は直線的である。茎身の形状は肉眼では観察不能だが、X線写真では背関は見られず刃関のみで、茎部末端へ次第に細くなる茎身が見える。幅は0.6~0.8cm程度である。現状の末端が茎尻かどうかは不明。

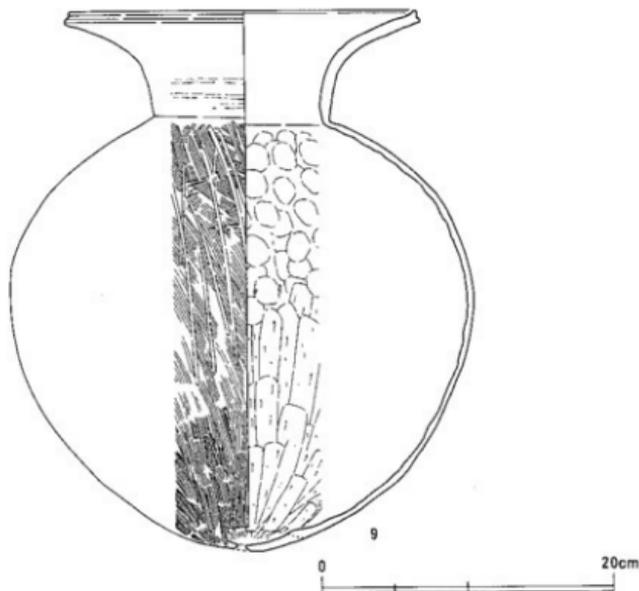
<土器>

15は墓坑西側から出土した広口壺である。口径23.6cm、器高36.8cm、頸部外径12.2cm、胴部最大径31.8cmをはかる。

ラッパ状に広がる口頸部を有し、胴部は球形に近いが、最大径が胴部中程よりやや上にあり、底部に向かって緩やかに窄まる傾向が見られる。底部は尖底の形態を残す。頸胴部境は強く屈曲して接続する。口縁端部は上方に若干拡張し、端面に工具による凹線を1条施す。胴部の成形はやや細かい単位の叩きで、それを斜め方向の刷毛目(8~10条/cm)で調整し叩き目をほとんど消し去る。さらに二次調整として底部から胴部下半にかけては細かい条線(20条/cm)をもつ刷毛目風のナデを加える。また、胴部上半に間隔を置いた縦位ヘラミガキがみられる。



第30图 第I主体部出土遺物（鉄器類）(1/2)



第31図 第1主体部出土遺物(土器) (1/4)

胴部内面は下半部に縦方向のヘラケズリを加え、上半は顕著な指頭圧痕を留める。器壁は胴部全体にわたって厚さにさほどの差は見られず、概ね5mmをはかる。ただし、底部付近は8mmとやや厚く、内面と断面に残る粘土接合痕から一旦胴部を成形した後に底部を貼り付けたものと見られる。口頸部は厚さ9mmと、頸胴部境の屈曲部を介して急に厚くなる。内外面とも顕著なヨコナデを加え、ナデ境線を多数認める。また、頸部外面に横方向のヘラミガキを間隔を置いて3条施す。

底部の中心から0.5cmほど偏った位置に直径0.8cmの円形の小孔を穿つ。小孔の内外面には粘土の隆起は見られず、また特にそれをナデつけた痕跡は見られないことから、焼成後に何らかの工具を使用して穿つたものと考えられる。

胎土は精良で赤橙色を呈す。0.5mm程度の石英・長石に微細な黒色粒子が混じり、イ類に分類した。底部付近及び胴部上半に黒斑を留める。

2) 第2主体部

検出状況と構造 (第32図) 第1主体部の北側2.65mの地点で、それに並行して第2主体部を検出した。検出面は墳丘盛土①の上面で、墳丘頂部の表土層を除去した段階で墓坑掘り形及びその内側に粘土に被覆された割竹形木棺の痕跡がみられた。墓坑の掘り込み面の層位的な関係から第1主体部を埋めた後に構築されたことがわかる。主軸方位はN-60.5°-Wを向く。

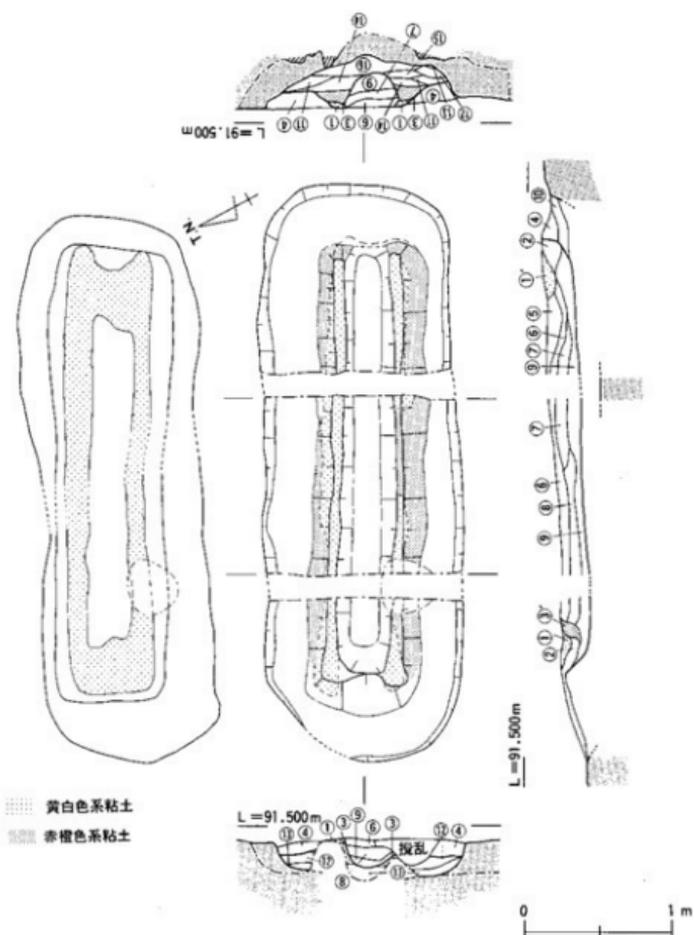
一部で木の根等の攪乱を被るが、墓坑内を大きく乱された様子はなく、第1主体部で想定したような棺材が遺存する段階の盗掘を考慮する必要はあるものの、墓坑内の構造を比較的よく留める。

墓坑は長さ3.9m、幅1.36mの長楕円形掘り形で、深さは検出面から測って0.34mと、第1主体部と比べてきわめて浅い。墓坑は遺構保存のために完掘していないが、2箇所横断面トレンチで観察する限り、第1主体部と同様に墓坑底を一段浅く掘り窪めた形態をもつものである。以下、断面観察にしたがって墓坑内の構造を説明する。

墓坑底は棺下部が僅かに掘り窪められ、その上に厚さ0.1cmの暗灰色土の置き土(13・16層)がある。置き土内には風化した小礫が混じるが、礫床は形成せず、さらにその上に橙色味を帯びる土(11~14層)が置かれて棺底をなす。棺の周辺は側縁部にのみ赤橙色粘土(3層)が厚さ6~9cmで取り巻き、小口部分にはほとんどみられない。赤橙色粘土の上面にはさらに黄白色粘土(1層)が置かれ、この粘土については小口部にも認められた。これらの粘土は第1主体部の棺側縁被覆粘土に比べて純度は低く、特に小口部に置かれた粘土は砂混じりの粗質である。

木棺の規模は小口部で一部不明瞭であるが、長さ2.9m、直径0.33mの断面円形に復元される。縦断面で見れば、小口部は第1主体部の木棺と同様に緩やかに立ち上がる形状を呈し、棺底部は直線的である。東西で棺幅の差は見られないが、棺底のレベルは東が15cmほど高い。これは第1主体部と異なる埋葬頭位を示す可能性もあるが、むしろ墳頂面の西への傾斜に影響を受けている可能性が高い。

木棺内の埋土は灰褐色系の砂混じりの粗い土(6~9層)で、層界に薄い橙色土のバンドが認められるものの、粘土がブロック状に崩落した痕跡は見られない。したがって、棺の側縁にみられた黄白色粘土は、第1主体部と同様に棺の上部まで被覆したものではなかった可能性が高い。なお、副葬品は棺内外とも全く出土しなかった。



- ①黄灰白色粘土 (は砂質土が混在)
- ②淡黄灰色土 (①が少量まじるあらい土)
- ③赤橙色粘土 (は砂質土が混在)
- ④暗灰茶色土 (灰色や橙色のブロック層)
- ⑤明黄褐色土 (目が細かくもろい)
- ⑥淡灰黄色土 (あらい、③が層かくまじる層の上下に橙色バンドあり)
- ⑦灰褐色土 (あらい、1cm未満の小礫が多い層の上下に橙色バンドあり)
- ⑧淡灰褐色土 (あらい、1cm未満の小礫が多い層の上下に橙色バンドあり)
- ⑨明灰褐色土 (あらい、1cm未満の小礫が多い層の上下に橙色バンドあり)
- ⑩明茶灰色土 (もろい土、細かい風化レキを含む)
- ⑪淡茶灰色土 (もろい土である。層の上下に橙色バンド)
- ⑫暗灰色土 (もろい土である。層の上下に橙色バンド)
- ⑬暗灰褐色土 (もろい土、層の上下に橙色バンド)
- ⑭明灰黄褐色土
- ⑮暗灰白色土 (かたい)
- ⑯暗灰色土 (2.0~5.0mm大の風化レキ含み、ややかるい)

第32図 第2主体部平面図・断面図 (1/40)

本棺の設置は、赤橙色と黄白色の2種類の粘土が上位と下位で使い分けされている点と赤橙色粘土の上面が棺断面の概ね半分的位置に来る点などから見て、赤橙色粘土の配置後と推定される。その後棺側縁部が黄白色粘土で被覆され、さらに図の4層の暗灰茶色土で棺の周囲が埋められる。したがって、棺が設置される際は墓坑の底が赤橙色粘土で基壇状に高められ、外見上は第1主体部と同様の粘土床をなしていたものと推定される。

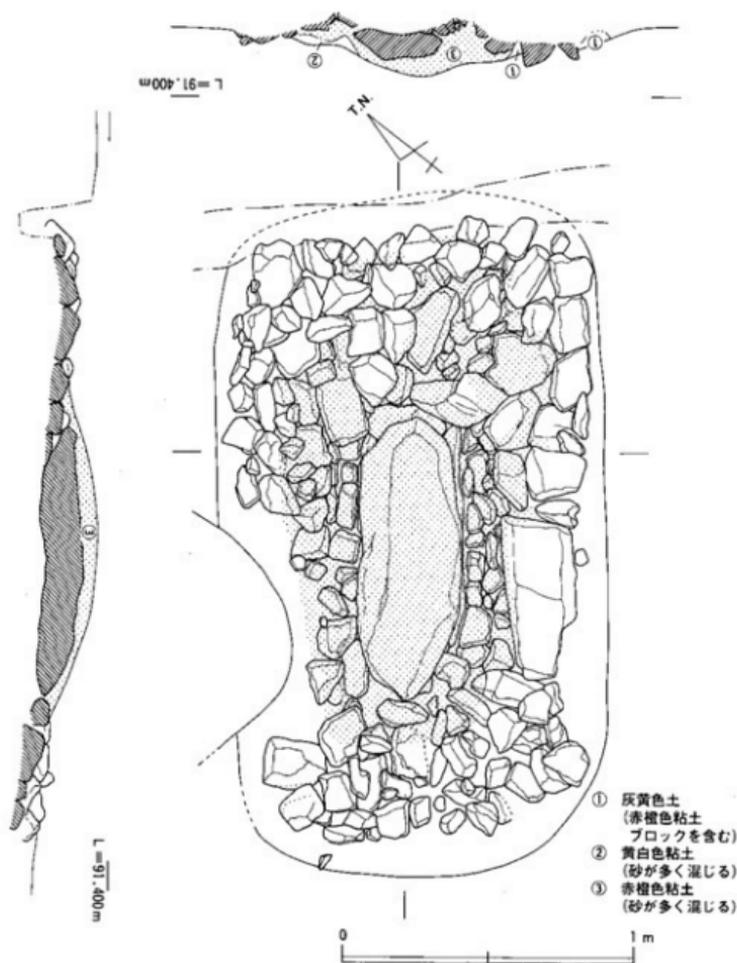
以上の構造から、第2主体部はかなり簡略化するものの、粘土層の範疇に含まれる形態であったと考える。

3) 第3主体部

検出状況 (第33図) 墳頂東端部において第3主体部を検出した。墳丘表土直下で花崗岩の礫敷きとそれを被覆する赤橙色の粘土が露出したことにより、3基の主体部の中でもっとも早い段階で確認することができた。第1主体部墓坑の東端で重複し、墓坑埋土を切り込んで構築することから、第1主体部に後出することがわかる。第3主体部の墓坑掘り込み面は第2主体部と同様に墳丘盛土①の上面で、重複関係のない第2主体部との前後関係は不明である。なお、当第3主体部の西側は第1主体部の盗掘坑の掘開によって一部損壊するが、それを除くと内部を乱された痕跡は見られず、盗掘は被っていないものと言える。

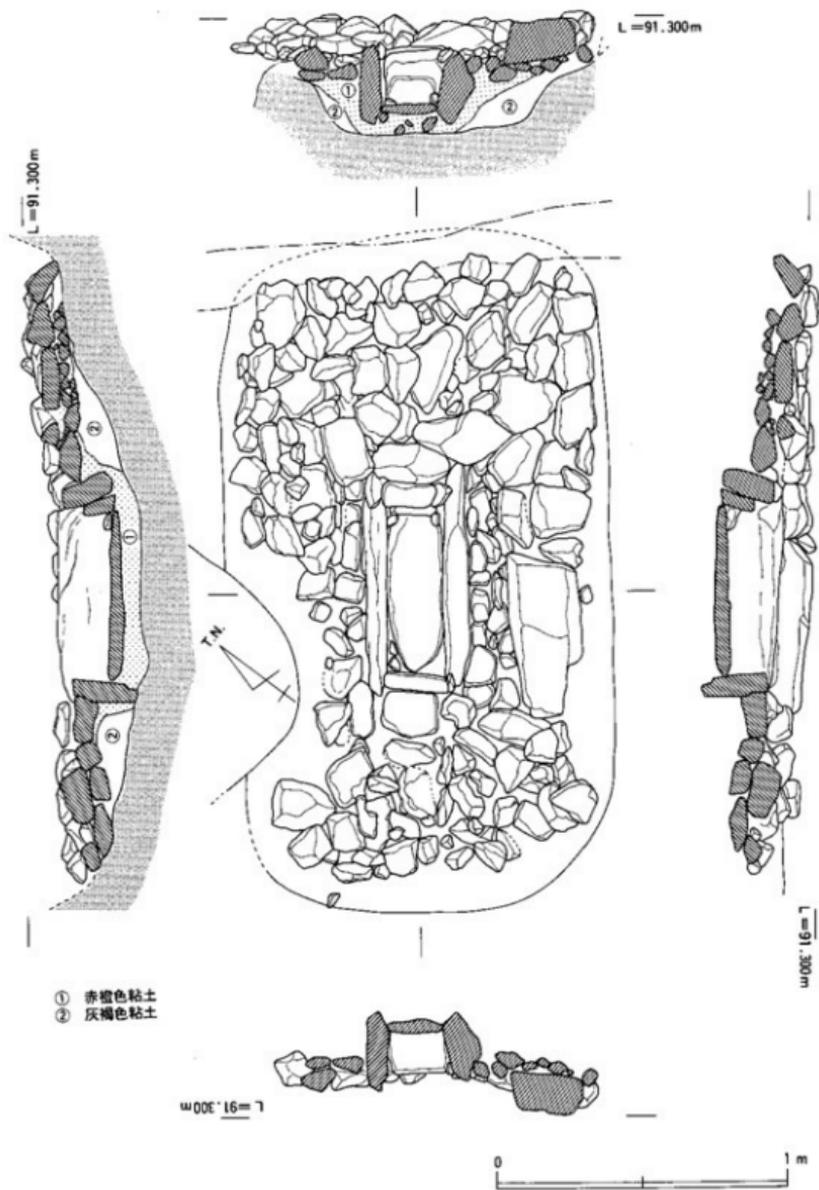
構造 (第34～37図) 墳丘の表土を除去した段階で、長さ1.65m、幅0.85mの範囲で赤色の粘土が長楕円形に隆起し、その周囲に10cmほどの花崗岩礫が敷かれた状態で検出された。礫敷きは長辺2.1m、短辺1.25mの範囲で長方形に分布がみられ、粘土の隆起はその中央付近に当たる。粘土は赤橙色を基調とするが、詳細に見ると斑状に黄白色粘土も含まれている。粘土を除去した段階で、箱式石棺の蓋石の上面を厚さ2～6cmほど全体にわたって被覆したものであることが判明した。

石棺の蓋石は長さ0.97m、幅0.36m、厚さ0.17mの安山岩板石で、周縁を加工し紡錘形に仕上げたものである。敲打による剥離面は比較的シャープで、転石を利用したものではない。また、表面に細かい傷のような条線が見られるが、文様を構成するものとは思われない。蓋石上面のレベルは、棺の北東側の礫敷き上面に概ね一致する。

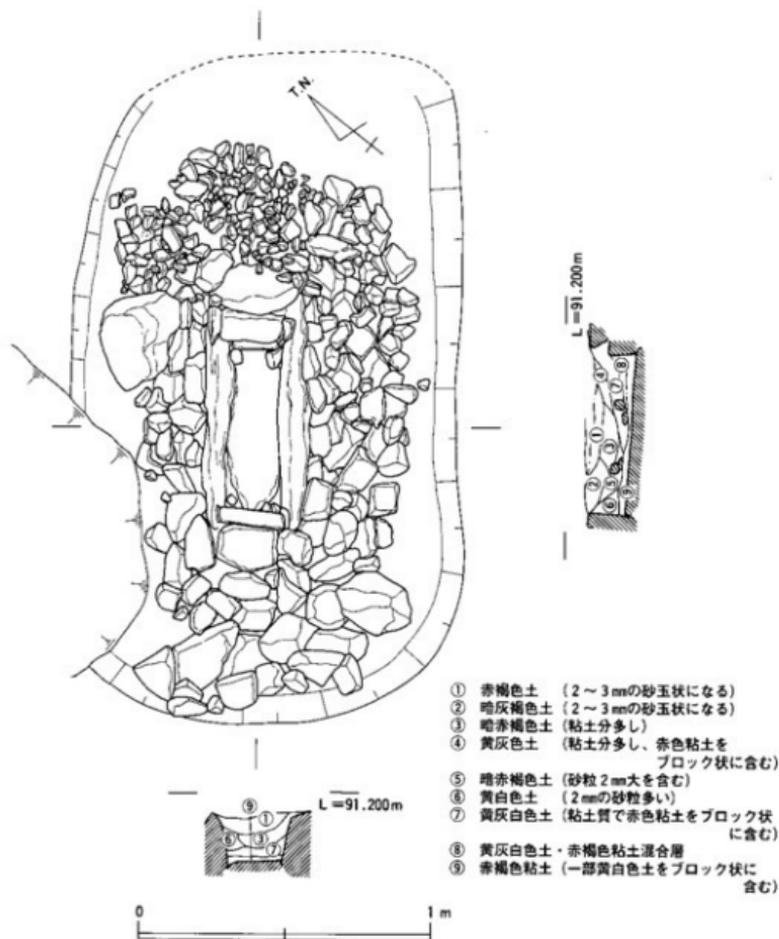


第33図 第3主体部上面検出状況 (1/20)

棺は両側縁と南西側小口に蓋石と同質の安山岩一枚石を立てて設置し、北東側の小口部は同程度の厚さの花崗岩板状塊石を縦に2重に置いて補う。また、棺底は蓋石より一回り小さい安山岩一枚石をほぼ水平に置く。棺の規模は内法で長さ0.56m、幅0.18m、深さ0.2mと、きわめて小規模である。棺の主軸方位はN-53°-Eを向く。



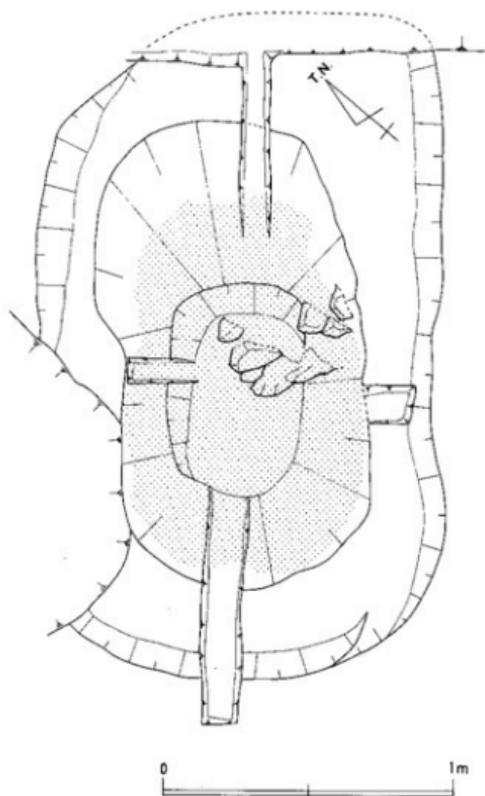
第34图 第3主体部葺石除去段階平面図・断面図 (1/20)



第35図 第3主体部第2礎敷面及び棺内断面図 (1/20)

棺内には蓋石と側壁との隙間から流入した土で充満しており、上部に2~3cmの空隙が存在したにすぎない。流入土は赤橙色粘土のブロックを多く含む灰褐色系土で、棺内には副葬品や人骨等は皆無であった。

棺の周囲は多数の礎が置かれ、礎敷き面は2面認められる。上面は20~30cm大の礎を、



第36図 第3主体部墓坑平面図(1/20)

下面は南西側で上面と同程度の礫を置くが北東側では5cm以下の砂利石を敷き詰める。

石質は大きさを問わず列石等で用いられる花崗岩と同質で、安山岩は見られない。上面と下面との間に明確な間層はないが、石と石の間に赤橙色粘土が入ることから、薄く粘土を敷いた可能性は否定できない。礫敷き面は上面、下面とも南西側に15cmほど傾斜する。

2面目の礫敷きを除去すると棺材の周囲に粘土の広がりが見られた。これは棺材の底部および側縁部において厚さ5～8cm、小口部分では厚さ3cmとやや薄いものの、棺材のほぼ全体を被覆する赤橙色の純度の高い粘土である。

粘土の周囲には灰褐色系のやや粗い置土がみられ、それを除去すると墓坑底に至る。墓坑は北東側がトレンチで損壊するが、概ね長さ2.3m、幅1.4mの長楕円形で、緩やかな傾斜テラスを介してその内側に、1.6m×0.9mの楕円形で深さ0.15cmの2段目の掘り込みが認められる。短軸方向は2段目の肩が明瞭であるが、長軸方向は緩やかに傾斜して立ち上がる。なお墓坑は地山中に埋没する花崗岩岩脈を一部破碎して開削する。

以上の検出状況から第3主体部の構築手順を復元すると、次のようになろう。

墓坑掘削→墓坑内周縁へ灰褐色系の置土→墓坑中央部に赤橙色粘土設置→棺材設置→下位磔敷面形成→(赤橙色粘土被覆)→上位磔敷面形成→蓋石設置→赤橙色粘土被覆→墓坑埋戻し

ただし上位磔敷面の形成は蓋石を粘土で被覆した後である可能性もある。特に蓋石北側の上位磔敷は粘土に食い込むような状態で検出できる箇所もあり、その可能性も高い。しかし磔敷の下面ではそれに接続する明確な粘土の間層を確認することができないことから、それを確認することは不可能である。むしろ南側の上位磔敷面についてはその一部が確実に粘土層より下で検出されている点から考えると、上位磔敷面が形成された後に蓋石を置き、粘土で被覆したと考えるのが妥当であろう。

なお、第3主体部の棺材を構成する安山岩は、第5章の自然科学的考察の結果、当墳から北に約3km離れた五色台山塊からもたらされたものとの結論が得られている。棺材周囲の磔は安山岩は含まれず、また墳丘周囲においても当石材と同様の安山岩はみられないことから、原産地で加工されたものが持ち込まれたと考えられる。

また、第3主体部は第3次調査において解体、完掘した後、実測図を基にして移築先で旧状に復元されている。

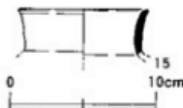
第4章 その他の遺構・遺物

1) 石組遺構 (第37・38図)

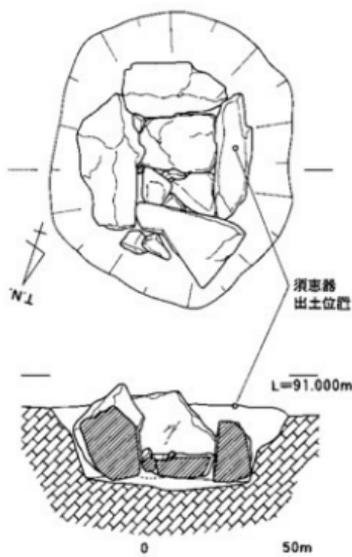
後円部墳頂から東に約8mの地点で小規模な石組遺構を検出した。長径1.0m、短径0.84m、深さ0.3mの楕円形土坑内に塊石を四方に立て、内法0.3m×0.28mの小室を組む。底面は板石を敷き詰め、平坦面を作成する。底面から側壁上端までの高さは0.25cmをはかる。石材はいずれも花崗岩である。

埋土は灰褐色系の締まりの悪い土で、埋土の上部より須恵器直口壺の口縁部片が出土した。

須恵器(15)は口径8.8cm、口頸部高3.2cmの直口壺で、口径の約1/3が遺存する。頸部がやや外反気味に立ち上がる形態で、口縁端部を外側に拡張して上端面を面取りする。内外面を回転ナデ調整で8世紀中葉ごろの所産。



第38図 石組遺構出土遺物(1/4)



第37図 石組遺構平面図・断面図(1/20)

2) その他の出土遺物 (第39・40図)

墳丘等で出土した古墳に伴わない遺物を説明する。

16は前方部東側の小ピーク周辺で出土した須恵器坏蓋。復元口径11.8cmの小片である。淡灰色を呈し胎土は精良。膨らみのある天井部に短くS字状に屈曲する口縁部が付属する。内外面を回転ナデ調整で仕上げる。7世紀中葉に比定される。

17は16に近接して出土した須恵器坏身底部片。復元底径9.6cmをはかる。暗灰色を呈し、砂粒を含む胎土。やや外に踏ん張る貼付高台をもつ。8世紀中葉に比定される。

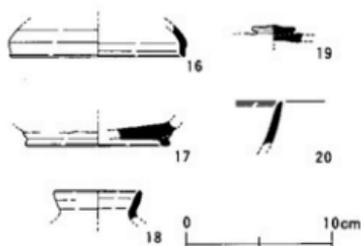
18は第1主体部盗掘坑より出土した小形短頸甕の口縁部小片である。口径5.9cmで頸部から上のみ遺存する。頸部は「く」の字に屈曲して外反し、内外面を回転ナデ調整して口縁端部は丸く取める。胎土は精良で淡灰色を呈す。外面に自然釉が付着する。7世紀中葉に比定される。

19は16に近接して出土した須恵器坏蓋つまみ部の小片である。つまみが扁平であることから、8世紀中葉ごろに比定される。灰青色の精良胎土。

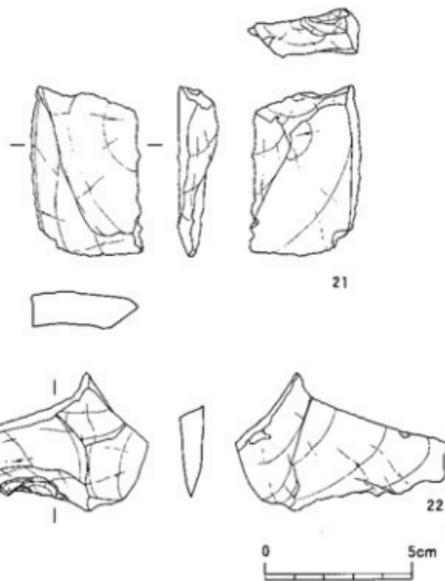
20も16に近接して出土した須恵器坏身口縁部片である。小片のため口径復元不能。内外面を回転ナデ調整で仕上げ、口縁端部を外上方に若干つまみ出す。灰青色の精良胎土。

21は前方面東側小ピーク周辺で出土した有加工痕剝片である。風化が著しいサヌカイトを素材とし、平坦打面を打撃した際に打点部を中心に半折した横長剝片の折損部を背面側から一部加工する。長さ6.0cm、幅3.6cm、厚さ1.1cmをはかる。

22は墳丘周辺表採の削器である。風化したサヌカイト剝片の側縁部を約5cmにわたって不規則に加工する。加工部以外は折損面を留める。



第39図 その他の出土遺物 1 (1/4)



第40図 その他の出土遺物 2 (1/2)

第5章 自然科学的考察

1) 地質学から見た国分寺六ツ目古墳

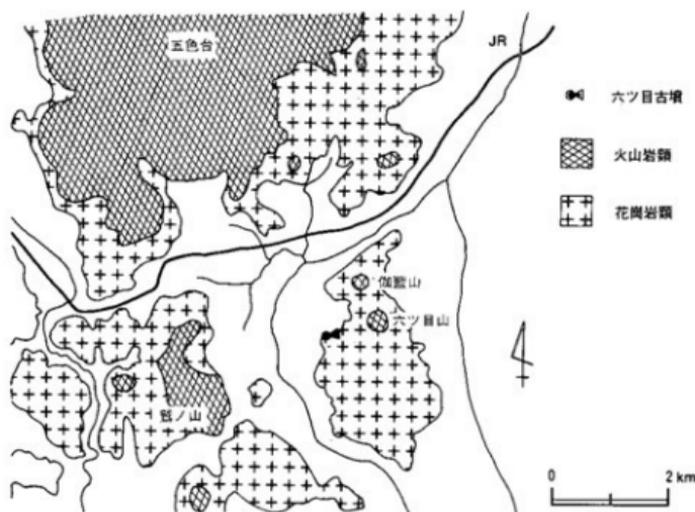
朽津 信明 (東京大学理学部地質学教室)*

はじめに

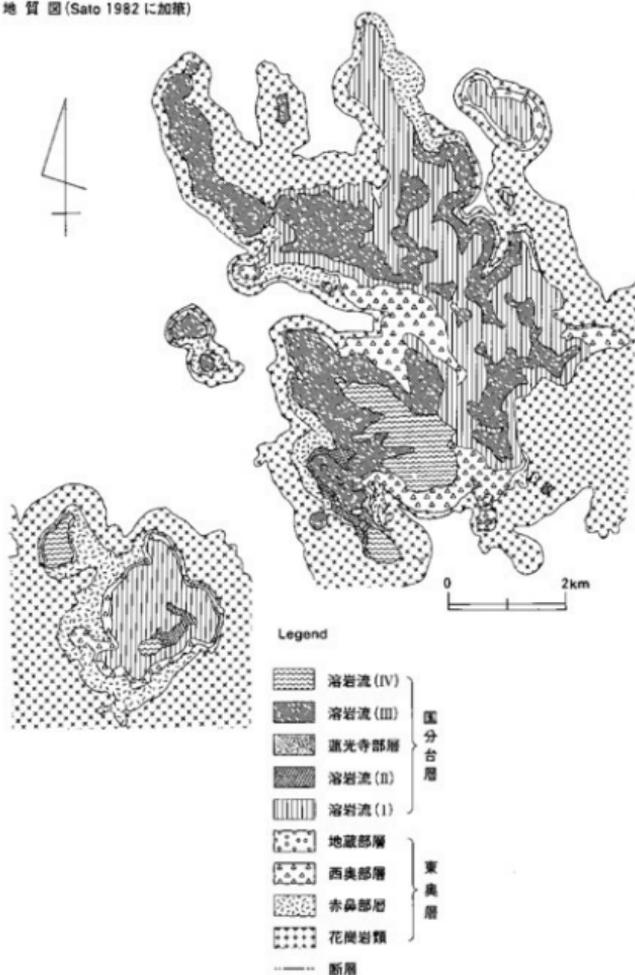
筆者は、修士論文において、香川県下のサヌカイト類について岩石学的研究を行っていたが、その際、調査地域内で発掘の行われた国分寺六ツ目古墳（以後、単に六ツ目古墳と記す）の調査に関係する機会を得た。本報告では、その際に行った地質学・岩石学的立場からの分析に基づき、同古墳について考察する。

試料

観察を行った試料は、主体部棺床に塗られていた赤色物質と主体部の箱式石棺の二種類である。同古墳では、一号主体部棺床と二号主体部側面において、明らかに人為的に施されたと判断される赤色物質が確認できるが、そのそれぞれの部分から若干量を試料として



第41図 国分寺六ツ目古墳周辺の地質概要 (Sato, 1992をもとに作成)



第42図 五色台周辺地域の地質図

採取した。また、石材については、列石などには明瞭に地山の石を用いていると判断される花崗岩が見られるが、三号主体部の箱式石棺については、安山岩質の石材が用いられていたため、蓋の部分と側面の部分とから微量採取して試料とした。

また、赤色物質と比較するために、六ツ目山近傍に産する花崗岩の風化した赤色粘土を、そして石棺石材と比較するために、近傍の山に産する安山岩類をそれぞれ試料として採取した。六ツ目古墳は、地質的には花崗岩及びその風化物（マサ）の基盤の上に築かれているが、その付近にはいわゆる瀬戸内火山岩類と呼ばれる火山岩類が広く分布している（第41図）。今回は、六ツ目山・加藍山・その北東側のピーク・鷲の山・そして五色台にそれぞれ分布する安山岩を試料とした。特に五色台では、安山岩の溶岩は、溶岩流（I）～（IV）の4枚が知られている（第42図，Sato, 1982）が、今回はそのすべてを比較試料とした。

分析方法

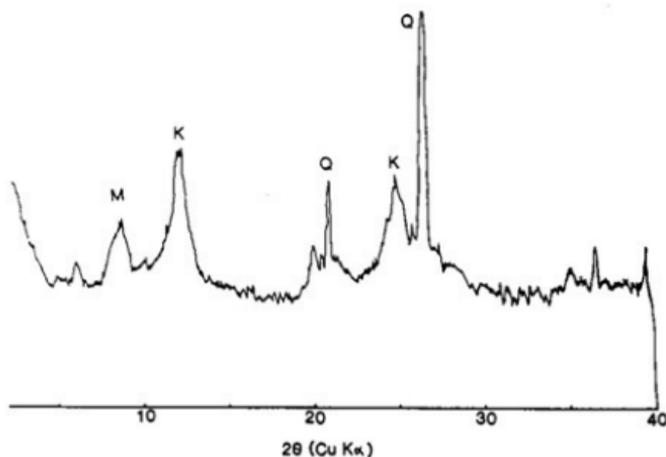
それぞれの試料は、化学成分分析とプレパラートの偏光顕微鏡観察を行った。また、赤色物質については更に、X線粉末回折によって鉱物分析も行った。なお、化学成分分析は、原則としてガラス円盤を用いた蛍光X線分析によって行ったもので、詳しい手法や測定条件は松本・浦辺（1980）による。また、赤色物質については、化学分析の一環として水銀の定性分析を、X線マイクロアナライザーによるEDS（LINKシステム）分析にて行った。用いた機種は、日本電子製JSM 840で、加速電圧は25kVである。X線回折による鉱物分析では、日本電子製の装置を用いて、30kV、15mAの条件でCuK α 線を用いて行った。

結果

<赤色物質>

・鉱物分析

一号主体部棺床粘土の回折パターンを第43図に示す。赤色物質中には、赤鉄鉱（ベンガラに相当）や辰砂（朱に相当）などのピークは見られない。一方、石英・雲母類などの鉱物の他に、カオリナイトの顕著なピークも見られる。二号主体部のものについても、また六ツ目山近傍に産する花崗岩の風化した赤色粘土についても、これと同様な結果が得られた。



K:カオリナイト Q:石英 M:雲母類

第43図 X線回折による国分寺六ツ目古墳第I主体部棺床粘土の回折パターン

第6表 赤色粘土の化学組成

	一号主体部 棺床赤色粘土	二号主体部 側面赤色粘土	赤色マサ
SiO ₂	58.25	60.62	49.37
TiO ₂	0.77	0.68	1.20
Al ₂ O ₃	21.84	20.11	23.98
Fe ₂ O ₃	7.05	6.28	9.43
MnO	0.06	0.00	0.05
MgO	0.78	0.79	1.76
CaO	0.00	0.00	0.00
Na ₂ O	0.65	0.55	0.65
K ₂ O	1.10	1.36	1.02
P ₂ O ₅	0.04	0.04	0.04
Ig.loss	9.90	8.94	9.90
Total	100.42	99.37	99.90

*Fe₂O₃ は全鉄の意味

・偏光顕微鏡観察

一号主体部棺床粘土の偏光顕微鏡写真を第44図に示す。赤色の部分は透過性で直交ニコル下でレターデーションを持ち、カオリナイトであると考えられる。また、花崗岩起源と思われる石英・雲母類などの粒子が頻りに観察される。二号主体部のものについても、また六ツ目山近傍で産する花崗岩の風化した赤色粘土についても、これと同様な結果が得られた。

・化学成分分析

一号主体部・二号主体部の赤色粘土の化学分析値を第6表に示す。ベンガラの主成分である Fe_2O_3 （鉄）は、比較的少量しか見受けられない。また、朱の主成分であるHg（水銀）は、EDS分析の結果全く検出されなかった。これに対してカオリナイトの主成分である SiO_2 （珪素）・ Al_2O_3 （アルミ）は、多量に観察された。この組成パターンは六ツ目古墳近くでみられる花崗岩が風化した赤色粘土（赤色マサ）の組成パターンとも類似している（第6表）。

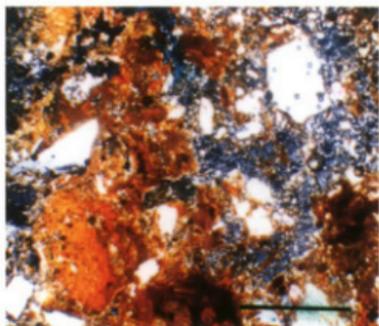
<石棺石材>

・偏光顕微鏡観察

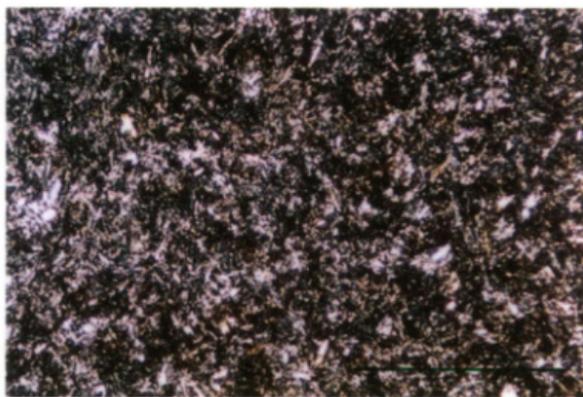
三号主体部箱式石棺の蓋部分の偏光顕微鏡写真を第45図に示す。詳細な岩石学的記載は本題からややずれるのでここでは省略するが、石材は風化が著しいものの、細粒な無斑晶質安山岩（僅かながら斜方輝石の斑晶も認められるので斜方輝石希斑晶質安山岩という呼び方も可能）と名付けるべき組織が観察される。また、同石棺側面についても全く同様な組織が観察される。

比較試料のうち六ツ目古墳の最も近くにある火山岩は、六ツ目山のものだが、ここの原石はオパサイト化した角閃石の斑晶を多量に含むやや粗粒な安山岩であって（第46図）、石棺石材の組織とは異なる。また同様に、加藍山・その北東側のピーク・鷲の山でも、石棺石材と類似する組織を持つ安山岩は見られない。

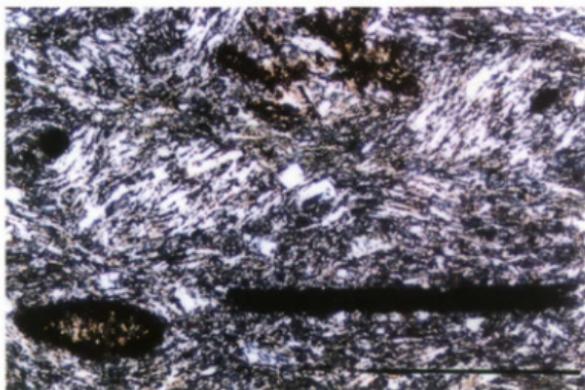
五色台のもののうち、溶岩流（Ⅰ）と（Ⅱ）の組織は、同様に六ツ目古墳の石材のものとは異なったが、溶岩流（Ⅲ）と（Ⅳ）では、石棺石材に類似する組織が確認された（第47図）に溶岩流（Ⅳ）の顕微鏡写真）。



第44図 第1主体部棺床粘土の偏光顕微鏡写真(直行ニコル)
スケールは写真中の一が1mm



第45図 第3主体部石棺石材の蓋の部分の偏光顕微鏡写真(直行ニコル)
スケールは写真中の一が1mm



第46図 六ツ目山の安山岩の偏光顕微鏡写真（直行ニコル）
スケールは写真中の一が1mm



第47図 五色台の溶岩流（Ⅳ）の偏光顕微鏡写真（直行ニコル）
スケールは写真中の一が1mm

第7表 石榴石材及び原石の化学組成

	*溶岩流 (I)	*溶岩流 (II)	*溶岩流 (III)	*溶岩流 (IV)	六ツ目古墳蓋	六ツ目古墳側面	六目山安山岩
SiO ₂	60.67	56.42	61.00	64.79	64.87	65.36	64.87
TiO ₂	0.73	0.68	0.78	0.52	0.62	0.54	0.45
Al ₂ O ₃	18.23	15.68	19.86	17.57	17.34	19.00	18.93
Fe ₂ O ₃	6.46	7.08	4.89	4.39	5.00	4.54	5.12
MnO	0.07	0.10	0.06	0.07	0.06	0.05	0.11
MgO	2.13	8.09	1.56	1.53	2.22	1.24	1.26
CaO	5.98	6.38	4.89	3.27	2.68	2.60	4.17
Na ₂ O	3.92	3.68	3.60	3.64	3.15	3.65	3.64
K ₂ O	1.34	1.91	2.66	2.78	2.56	2.82	1.47
P ₂ O ₅	0.11	0.14	0.15	0.15	0.15	0.11	0.16
Total	99.63	100.15	99.41	98.71	98.49	99.92	100.17

* は Kuchitsu (1990) のデータによる

• Fe₂O₃ は全鉄の意味

• すべて water free basis で表示

・化学分析

石棺石材について、蓋と側面のそれぞれの部分の化学分析値を第7表に示す。両者とも風化が著しくCaO(カルシウム)の溶脱が認められるが、いずれも高いK₂O(カリウム)の含有量を示す安山岩であることが分かる。これは、六ツ目山のものや五色台の溶岩流(I)・(II)が低いK₂O含有量を示すのとは異なる(第7表)。これに対し溶岩流(III)・(IV)は、先述のCaO以外の各成分は石棺石材のものとはよく類似している。

議論

<赤色物質>

赤色物質については、水銀が見られないことから少なくとも朱ではなく、またベンガラに相当する赤鉄鉱が検出されないことから、ベンガラとも呼べない第三の赤色物質であると考えられる。その鉱物組成や化学成分から言うと、赤色粘土と呼ぶのがいちばん妥当であろう。すなわち赤色物質が赤く見えているのは、顔料の色ではなく、もともと赤い粘土(鉄分に富むカオリナイト)の色であると考えられる。また、偏光顕微鏡観察で花崗岩起源と思われる石英や雲母類の粒子が観察されることから、これらの粒子が、粘土を棺床に塗る際に混入されたものでないとするれば、この赤色粘土は、花崗岩の風化によってできた粘土(マサ)であると推定される。実際、六ツ目山近傍で産する花崗岩の風化した赤色粘土は、いずれの分析結果でも六ツ目古墳の試料と極めて類似した結果が得られた。要するに六ツ目古墳の一号、二号主体部では、近くでとれる赤色粘土をそのまま棺床に塗ったものであると推定される。六ツ目古墳の時代の古墳では、棺床に朱やベンガラを塗る習慣もあったというが、六ツ目古墳については、少なくともそのような顔料は用いられていなかったと言える。ただし、わざわざ棺床に赤色粘土を塗っていることにはなんらかの意味があると思われ、朱を塗る習慣を受け継ごうとしながらも、それを手近な試料を使って間に合わせたものである可能性も考えられるため、考古学の立場での解釈が期待される。

<石棺石材>

まず、偏光顕微鏡観察の結果から、三号主体部の箱式石棺は、単一の石材を用いて作られているものと考えられる。そしてその石材の原産地は、六ツ目古墳の近傍に求めるとすれば、今回の分析結果から、五色台の溶岩流(III)または(IV)、すなわち上部の溶岩が最も有力な候補となり得る。なお、溶岩流(III)・(IV)のいずれであるのかの特定は、残念

ながら石材の風化が著しいため困難であるが、 SiO_2 の量や Al_2O_3 の量から考えると、一応溶岩流(IV)の方がより妥当であろう。すなわち石棺石棺は五色台の最上部の溶岩を用いている可能性が高いと推定される。ただし、実際に石材として運搬するときには、別に転石を持っていても構わないわけであるから、五色台の頂上の石をわざわざ運んで行ったという単純な結論にはすぐには結び付かない。いずれにしろ三号主体部の箱式石棺では、最も近くで入手できる花崗岩や六ツ目山その他の安山岩ではなく、一番近くても数キロ離れた五色台上部の安山岩を持ち込んでいることが確認された。この理由としては、石材の割れ方の違いが考えられる。すなわち、花崗岩はもちろん、六ツ目山や鷲の山の安山岩は、別に特に板状に割れ易い性質を示すことはない。これに対し五色台の安山岩、特にその上部溶岩は板状節理が著しく発達しており、非常に板状に割れ易い性質を持つ。つまり、箱式石棺を作るにあたって、板状に割れ易い岩石が必要となり、それに適する石材を求めて数キロの距離をわざわざ運搬したのではないかと考えられるものである。なお、こういった傾向は香川県外でも見られ、宇垣(1987)によれば、岡山県下の竪穴式石室石材について、弥生墳丘墓の竪穴式石室ではその付近の石材を雑多に用いているのに対して、古墳時代前期に入ってから板状に割れ易い原石を求めて香川県下の安山岩が持ち込まれているという。すなわち、運搬の技術の向上と埋葬者の権力の向上とがあり、より材料として優れた原石を遠くから運ぶことができるようになったものと解釈できるであろう。六ツ目古墳の場合は、運搬距離が数キロなのでそれほど遠くから運んだと言うわけでもないが、一応近くの岩石よりも遠くのよりよい岩石を求めての『えり好み』が見られるので、同じ古墳時代前期の同様な傾向が香川県下でも見られると考えることもできるであろう。

結論

- ・六ツ目古墳一号主体部棺床・二号主体部側面の赤色粘土は、朱やベンガラなどの顔料を用いたものではなく、付近で採れる花崗岩の風化した赤色粘土(赤色マサ)をそのまま塗ったものであろう。
- ・同古墳三号主体部の箱式石棺は、板状に割れ易い性質を持つ五色台の上部溶岩を用いて作られたものである可能性が高い。

引用文献

- Kuchitsu, N. (1990): Weathering of sanukitoid at Goshikidai and adjacent areas, Kagawa Prefecture, Southwest Japan., Master Thesis Geol. Inst. Univ. Tokyo, 124pp
- 松本 良・浦辺徹郎 (1980) : ガラス円盤試料による珪酸塩岩石中の主成分の自動発光X線分析, 岩石鉱物鉱床学会誌, 75, 272-278
- Sato, H. (1982): Geology of Goshikidai and adjacent areas, Northeast Shikoku, Japan; Field occurrence and petrography of sanukitoid and associated volcanic rocks., Sci. Rep. Kanazawa Univ., 27, 13-70
- 宇垣匡雅 (1987) : 縦穴式石室の研究 (上), 考古学研究, 34, 22-48

* : 現所属 東京国立文化財研究所

2) 国分寺六ツ目古墳出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石 純

はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法により国分寺六ツ目古墳の墳丘から出土した土師器を分析し、次に述べることについて検討した。

国分寺六ツ目古墳の墳丘から出土した土師器を肉眼観察による胎土分析と土器の出土地点により5つに分類(ア・イ・ウ・オ・カ類)されている⁽¹⁾この5つに分類された土器が蛍光X線分析法でどのように分類されるか。

また、ア類土器は胎土的に下川津B類土器に類似しており、オ・カ類土器は六ツ目遺跡出土の弥生土器に類似していることから周辺の遺跡(高松市上天神遺跡⁽²⁾ 中間西井坪遺跡⁽³⁾)との比較を行った。

分析結果

分析方法は、波長分散型蛍光X線分析装置(理学電気製 KG-4型)を用いて、測定試料の作製、測定条件などは現在までに行っている方法である。分析試料は、第8表に掲げた28点の土師器である。

分析の結果、 $K_2O \cdot CaO \cdot Sr \cdot Rb$ の元素に差があり、この元素を用いてX-Y散布図を作製し比較検討した。

5つに分類された土器が蛍光X線分析でどのように分類されるかでは、第48図 $K_2O \cdot CaO$ 、第49図 Sr-Rbの散布図から5つのグループに分かれるようである。

個々のグループをみていくと、

Aグループ……ア類の試料No1(ア-3)

Bグループ……イ類の2(イ-2), 3(イA-24), 4(イA-59), 5(イA-61), 6(イA-65),
7(イA-68), 8(イA-73), 12(イ-C)

ウ類の13(ウ-1), 14(ウA-27), 15(ウA-41), 16(ウA-42), 17(ウA-79)

カ類の26(カ-13), 27(カ-13)

Cグループ……オ類の22(オ-29)

カ類の24(カA-11), 25(カA-12), 28(カA-68)

Dグループ……オ類の18(オA-7), 19(オ-9), 20(オ-12), 21(オA-13), 23(オA-79)

Eグループ……イ類の9(イA-22), 10(イA-21), 11(イ-14)

このように、胎土分析では5つのグループに分類できたが、このうちBとCグループには、複数の胎土分類が含まれている。

また、上天神遺跡、中間西井坪遺跡出土土器との比較では、上天神遺跡の下川津B類土器が分布する領域にAグループ(A類土器)が入り、中間西井坪遺跡の大形竪穴・焼成土壇・溝SX01・谷3出土土器が分布する領域には、CグループとDグループの半分ほどの土器が入る結果となった。

まとめ

国分寺六ツ目古墳の墳丘から出土した土師器について、胎土分類と各地点ごとに検討した結果、蛍光X線分析から以下のようなことが推測される。

- (1) 胎土の肉眼観察および出土地点から5つに分類された土師器が、蛍光X線分析でも5つに分類できた。ただし、肉眼観察による胎土分析と若干異なる分類となった。
 - ・Aグループは、下川津B類に類似するA類である。高松市上天神遺跡の下川津B類土器の分布領域に入り、胎土的には類似している。
 - ・Bグループは、墳丘の第1主体・イ類優勢域・ウ類優勢域・カ類優勢域から出土した土師器。
 - ・Cグループは、イ類優勢域から出土した28(カA-68)と墳丘外から出土したグループ。
 - ・Dグループは、オ類優勢域から出土した土師器。
 - ・Eグループは、オ類優勢域内から出土したイ類土器。

以上、X-Y散布図から5つのグループに分かれることが予想され、この結果から5種類ぐらいの粘土を使用していることが考えられる。また、墳丘部から出土した土師器の出土地点ごとでの比較では、Aグループの下川津B類土器に類似する土器は、前方部東端で出土している。また、Bグループの胎土の土器は、前方部・後円部と広く分布している。そして、胎土的に中間西井坪遺跡の土器類と似ているC・D・Eグループの土器は、くびれ部付近でまとまって分布している(ただし、Cグループは、墳丘外である)。この様に、出土地点ごとに検討すると、下川津B類土器に類似するAグループは、前方部東端に。Bグループは、後円部・前方部。D・Eグループ(在地系?)は、くびれ部に出土地点が分かれる傾

向にある(第50図のグループ別土師器分布状況を参照)。

以上のように土師の胎土により、墳丘上での分布状況が異なることがある程度理解される。そして、この古墳では後円部から3基の埋葬主体が検出されており、第1主体部より出土した土師は、Bグループに属する胎土である。このことより、あくまでも推測であるが、胎土が異なった土師の出土状況から第1主体部および第2主体部に供献された土師は、Aグループも含めたBグループの胎土を主体とした土師群で、D・Eグループの胎土は第3主体部を目的として供献された土師と考えられないだろうか。

この分析を実施するにあたり、廣瀬常雄氏、森下英治氏をはじめ香川県埋蔵文化財調査センターの職員の方々には、お世話になりました。記して感謝いたします。

(註)

- (1) この分類は、試料提供者による分類である。

国分寺六ツ目古墳出土土師の肉眼観察による胎土分類

ア類……短茶褐色を呈し、やや粗質の生地。

石英や長石はあまり目立たず、0.5mm程度の角閃石あるいは黒雲母からなる黒色粒子が多く含まれる。

下川津遺跡B類土師に類似する。

イ類……赤橙色を呈し、肌理の細かな生地。

0.5mm程度の石英・長石の粒子を含み、中でも長石の割合が多い。

酸化粒子はほとんど含まない。黒色粒子は微細なものを含む。

ウ類……ややおい赤橙色を呈し、肌理は比較的細かい。

0.5mm以上の石英・長石の粒子を含み、中でも石英の割合が多い。

酸化粒子はほとんど含まない。黒色粒子は微細なものを含む。

オ類……ウ類に類似する胎土で、0.5mm程度の酸化粒子を含む。

カ類……イ類に類似する胎土で、0.5mm以上の酸化粒子を多く含む。

◎オ類・カ類は、国分寺六ツ目遺跡出土の弥生土師に比較的類似する。国分寺地域の特徴を示す可能性がある。

- (2) 白石 純「上天神遺跡出土土師の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会 1995.12

- (3) 白石 純「中間西井坪遺跡出土土師・埴輪の胎土分析」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第25冊 中間西井坪遺跡I』香川県教育委員会1996.11

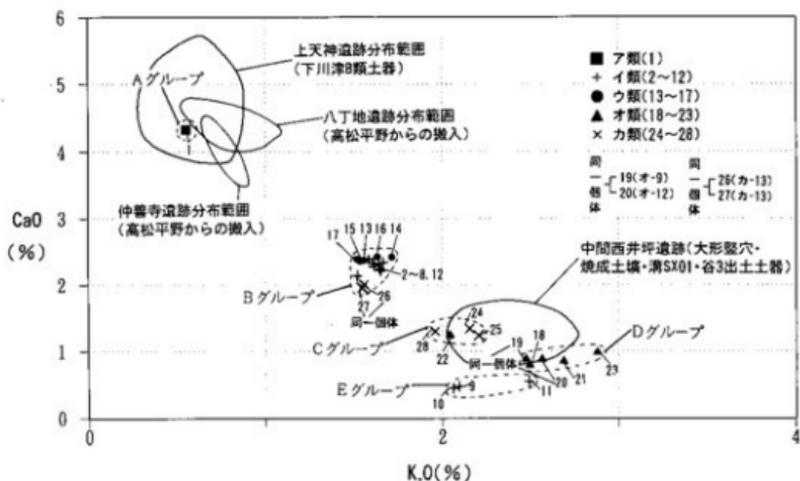
第8表 国分寺六ツ目古墳出土土器の胎土分析値 (%)

ただし Sr, Rb は ppm

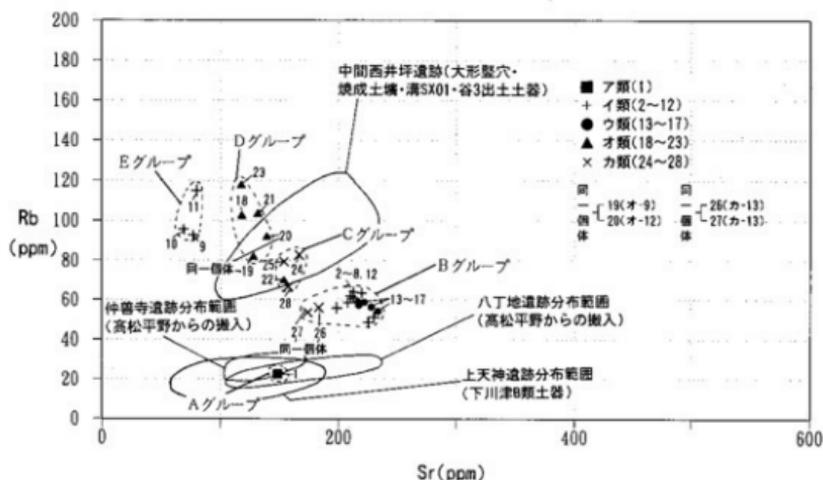
試料番号	出土地点	器種	分類・番号	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1			ア-3	0.54	14.64	42.81	2.02	18.76	4.37	149	22
2			イ-2	1.61	9.43	52.78	0.98	17.73	2.31	231	51
3	不明		イA-24	1.52	9.38	54.49	1.06	16.64	2.17	208	59
4			イA-59	1.63	9.99	55.36	1.12	16.24	2.31	213	65
5			イA-61	1.65	10.18	56.02	1.16	16.37	2.25	199	56
6			イA-65	1.64	9.52	54.65	1.09	16.16	2.27	220	64
7			イA-68	1.66	10.27	53.05	1.16	16.13	2.36	213	61
8			イA-73	1.60	10.07	53.85	1.15	16.57	2.36	211	63
9			イA-22	2.09	6.49	67.55	0.83	15.72	0.50	77	93
10			イA-21	2.06	6.52	65.23	0.76	16.21	0.47	68	96
11			イ-14	2.49	3.63	60.84	0.62	20.41	0.57	79	115
12	第1主体部	壺(9)	イ-C	1.58	9.35	56.11	1.00	17.18	2.41	225	49
13		壺(2)	ウ-1	1.51	9.70	55.25	1.03	17.22	2.40	233	54
14			ウA-27	1.62	9.78	55.24	1.04	16.21	2.45	218	58
15			ウA-41	1.55	9.83	52.16	1.06	17.07	2.39	218	59
16			ウA-42	1.71	10.69	53.65	1.03	16.28	2.44	228	57
17	墳丘外		ウA-79	1.53	9.29	54.97	0.98	16.03	2.38	222	59
18			オA-7	2.50	8.08	60.02	0.75	15.86	0.84	118	104
19		鉢(6)	オ-9	2.47	8.42	58.43	0.87	16.47	0.93	128	83
20		鉢(6)	オ-12	2.56	8.11	58.39	0.82	17.28	0.93	140	93
21			オA-13	2.68	8.45	61.84	0.83	15.72	0.90	131	105
22	墳丘外		オ-29	2.04	8.91	56.95	0.79	16.24	1.29	154	71
23	墳丘外		オA-79	2.88	8.05	55.72	0.84	17.39	1.03	117	119
24	墳丘外		カ3A-11	2.15	8.95	55.65	0.77	16.86	1.36	167	83
25	墳丘外		カ3A-12	2.20	9.23	53.25	0.82	17.63	1.26	154	80
26		壺(3)	カ-13	1.55	10.44	51.32	1.26	17.56	2.04	184	57
27		壺(3)	カ-13	1.54	10.83	48.86	1.25	17.38	1.99	174	54
28			カA-68	1.95	9.06	52.89	0.81	18.56	1.32	158	67

器種…… () は挿図中の遺物番号

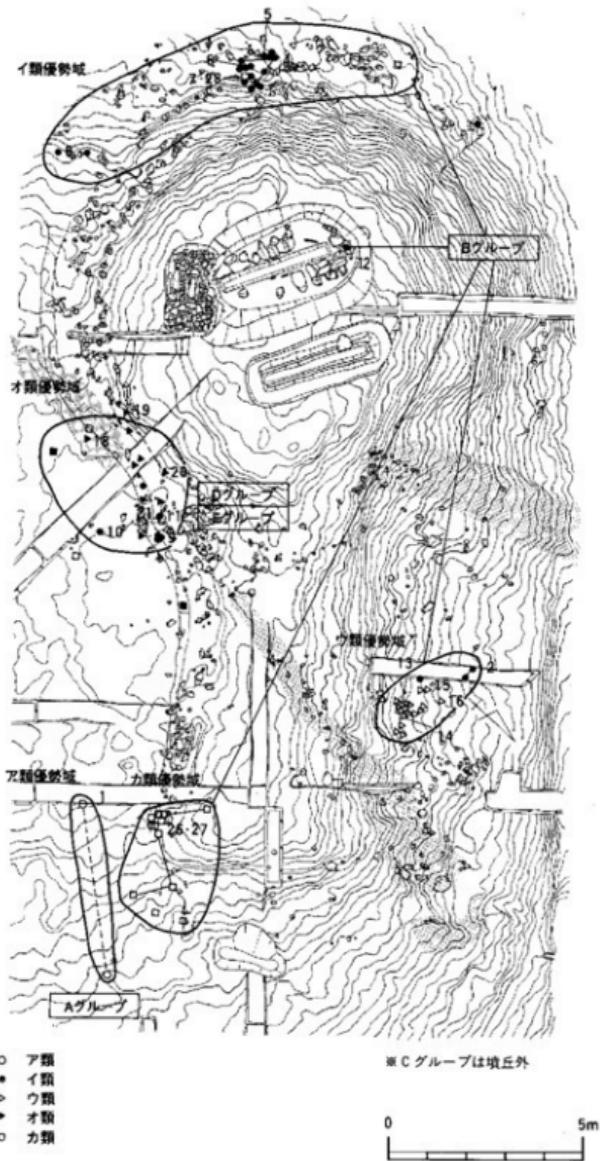
(19・20は同一個体)
(26・27は同一個体)



第48図 K₂O-CaO 散布図 国分寺六ツ目古墳出土土器と下川津B類 (上天神遺跡, 八丁地遺跡, 仲善寺遺跡) 土器との比較



第49図 Sr-Rb 散布図 国分寺六ツ目古墳出土土器と下川津B類 (上天神遺跡, 八丁地遺跡, 仲善寺遺跡) 土器との比較



第50図 土師器胎土グループ別分布状況

3) 第1主体部出土広口壺埋土中の炭化種子鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

古墳時代前期に構築された国分寺六ツ目古墳の主体部（第1主体部）に埋納された土器内には、炭化種実遺体が数点確認された。これについて同定を行う。

方法と結果

水洗選別された種実遺体はケースに納められた。これらを双眼顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定したが、小片のため同定は不能であった。

第6章 考古学的考察

1) 国分寺六ツ目古墳出土広口壺の編年的位置

はじめに

第1主体部および墳裾から出土した広口壺は、球胴化した体部にラッパ状に開く口縁部を付加するものである。胴部内面の下半をヘラケズリし、上半に顕著な指頭圧痕を残す点は、讃岐東部から阿波東部にかけての壺・甕に一般的な土器製作技法に共通する⁶³⁾。また、器形の面でも徳島県黒谷川郡頭遺跡井戸1出土資料⁶⁴⁾や、香川県丸井古墳出土資料⁶⁵⁾で見られる広口壺の形式組列上に位置づけることが可能である。もちろん細部の製作技法等に地域性が反映されることがままあるが、阿讃地域に広く展開した形式として把握できる。

また、この形式の広口壺は近畿地方に搬入された事例が比較的多い。これによって畿内土器編年⁶⁶⁾との並行関係を確認することができる。

以下、各遺跡出土資料を概観し、後に型式変化と編年的位置づけを試みる。

各遺跡出土資料

(1) 黒谷川郡頭遺跡(徳島県板野郡板野町)井戸1出土資料⁶⁷⁾

やや肩が張る倒卵形の胴部と直立する頸部が特徴的である。底部は丸底に近い不明瞭な凸面底⁶⁸⁾。胴部は細かい叩きで整形した後に縦～斜位の刷毛目を行う。内面下半部はヘラケズリ、上半部に指頭圧痕が顕著。下半部の器壁が特に薄く、上位ほど厚みを増す。頸部外面は斜位の刷毛目後にヨコナデを加えるが、刷毛目は器表に残る。口縁端部は上に拡張して断面三角形に肥厚させ、端面は強いヨコナデによる凹部をもつ。

伴出遺物は菅原康夫氏編年⁶⁹⁾の黒谷川3式を示す。

(2) 丸井古墳(香川県大川郡長尾町)前方部前端出土資料⁷⁰⁾

中位よりやや上に最大径をもつ倒卵形の胴部に、頸部からラッパ状に大きく外反する口縁部をもつ。頸部の開き具合を除くと、先の黒谷川郡頭資料と器形が酷似する。底部は稜をもった凸面底。胴部外面は縦位の刷毛目で、胴部下半は強いナデツケにより刷毛目を消す。内面は下半部に斜位のヘラケズリを行い、上半には指頭圧痕が顕著。胴部の器壁は上下とも薄い。胴部から頸部へはS字状のカーブをもって比較的スムー

ズに移行する。頸部外面は縦位の刷毛目を施した後に、下半に細い単位をもったナデを2条施すが、上半を中心に刷毛目調整面をそのまま留めている。

口縁部はやや内彎気味に開き、全体をヨコナデで仕上げる。端面は上下方に拡張し、幅広の浅いナデによる凹線を巡らせる。

(3) 居石遺跡(香川県高松市)SR-01 6~7層出土資料⁷¹⁾

倒卵形の胴部に、頸部から外反する口頸部をもつもので、底部はほぼ丸底である。口縁端部は上方に拡張し、凹部をもった内傾面をなす。

外面下半に細い叩き目が残し、それを縦位の刷毛目で消す。器壁は上半ほど厚く、口頸部境で一旦薄いが、再び頸部では厚みが著しい。胴部から頸部への移行は、内面に明瞭な稜線、外面に強いナデ線をもって屈曲する。

頸部外面は縦位の刷毛目調整を留めるが、口縁部ヨコナデ範囲が大きく、口頸部の1/2まで刷毛目が消されている。

河川出土のために伴出遺物の特定ができないが、土器出土層の下層より弥生時代後期の小形仿製鏡3面が出土している。

(4) 居石遺跡(香川県高松市)SR-01 6~7層出土資料⁷²⁾

球形の体部に頸部から外反する口縁部をもつ。底部は完全な丸底で、口縁端部は上下方に拡張する。頸部境は内外面に稜線をもって屈曲する。器壁はやや厚めで、下方ほど厚さを増す。口頸部は下方が薄く、上方ほど厚い。

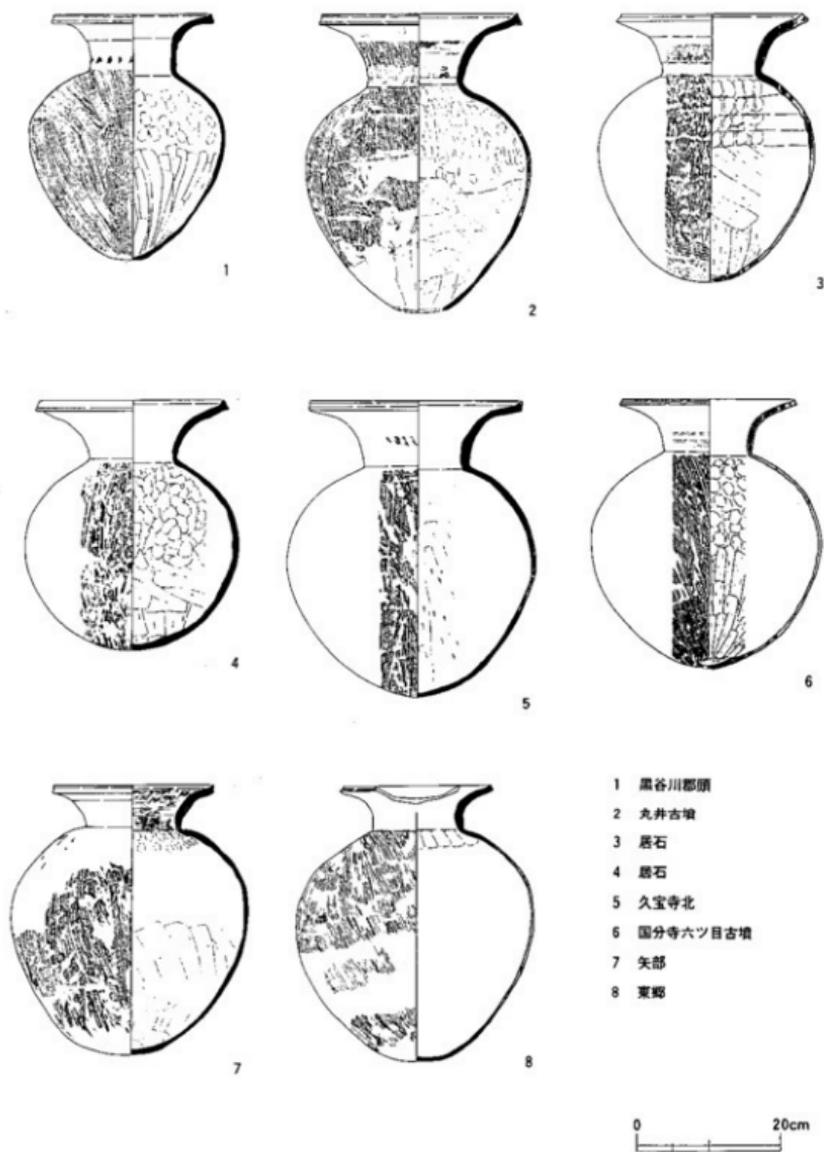
胴部外面調整は縦位の刷毛目を下半を中心に軽くナデ消し、上半には間隔をおいた縦位のヘラミガキを加える。頸部外面は全体的にヨコナデが顕著。

(5) 久宝寺南遺跡(大阪府八尾市)3号墓上層堆積出土資料⁷³⁾

下半部が尖り気味の球形胴部で、頸部から外反する口縁部をもつ。口縁部は上方に大きく拡張し、端面に弱いナデ凹部をもつ。頸部境は内外面に稜線をもって強く屈曲する。器壁は胴部下半が薄く、上半から頸部下半にかけて厚め。頸部境で特に薄くなることはない。

胴部外面は縦~斜位の刷毛目を施した後、上半部に間隔をおいた縦位のヘラミガキを加え、上端に2条の横位のヘラミガキをさらに加える。頸部外面は全体的にヨコナデが顕著で、一部の縦位の刷毛目を残す。胎土中には微細な角閃石を含む。

伴出遺物は近畿編年の布留0式のうち、新相を示す。



- 1 黒谷川郡原
- 2 丸井古墳
- 3 居石
- 4 居石
- 5 久宝寺北
- 6 国分寺六ツ目古墳
- 7 矢部
- 8 東野

第51図 各遺跡出土の広口壺

(6) 国分寺六ツ目古墳

本文参照

(7) 矢部遺跡（奈良県磯城郡田原本町）土坑314資料⁷⁴⁾

下半部が膨らみ気味の球形胴部で、頸部から外反する口縁部をもつ。底部は痕跡程度に凸面底を留める。口縁部の外反度は弱く、端部を上方につまみ上げ端面に弱いナデ凹部をもつ。頸胴境は胴部上端が一旦内傾し、内外面に甘い稜線を形成して屈曲する。器壁は胴部は均質で、口頸部が特に厚い。

胴部外面は縦位の刷毛目で、上半部と底部周辺を粗くナデ消す。頸部外面はヨコナデが顕著で刷毛目を留めない。胎土中に結晶片岩を多量に含む。

伴出遺物は近畿編年の布留1～2式。

(8) 東郷遺跡（大阪府八尾市）第20次調査土器棺墓1資料⁷⁵⁾

下半部がやや膨らむ球形胴部で、直立頸部から口縁部が緩やかに外反する。底部は丸底で、口縁端部は上方に若干拡張しナデ凹部をもつ。頸胴境は内外面に稜線をもつて強く屈曲する。器壁は胴部は均質で、口頸部が特に厚い。

胴部外面は斜位刷毛目後、下半部を中心にナデ消す。

口頸部外面は全体的にヨコナデが顕著で、刷毛目を留めない。

伴出遺物はないが、土器棺墓が方形周溝墓SX-04に伴うとすれば、近畿編年の1～2式の土器群が共伴する。

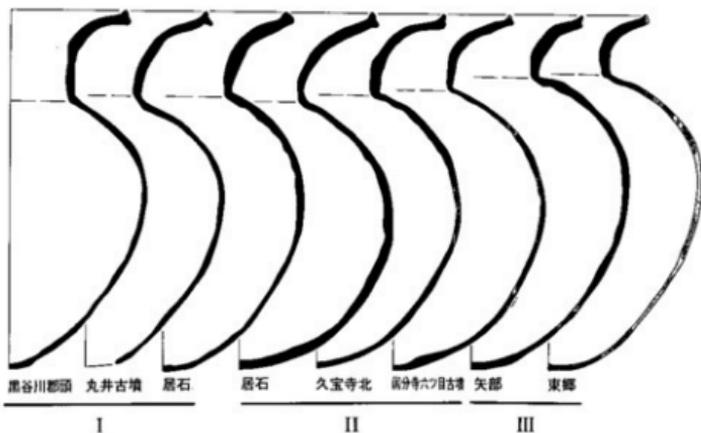
器形分類

胴部形状（第52図）

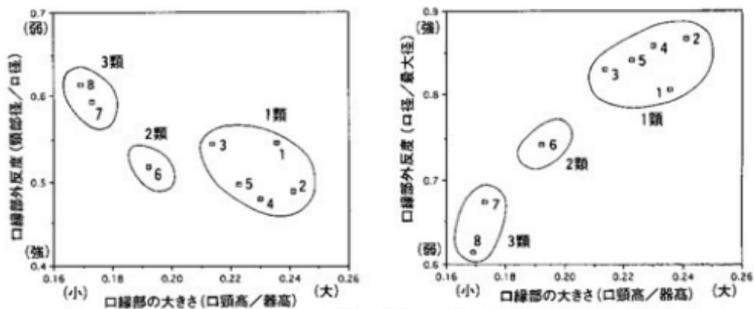
- I 倒卵形で底部付近が膨らまない
- II 球形で底部は膨らまない
- III 倒卵形で底部が膨らむ

口頸部の大きさと口縁部外反度（第53図）

- 1 口頸部が大きく、外反度が高いもの
- 2 口頸部が小さく、外反度が高いもの
- 3 口頸部が小さく、外反度が小さいもの



第52図 咽部形状分類図



※図中の番号は第52図に対応

第53図 口頭部の大きさと口縁部外反度の相関グラフ

調整技法

器面は胴部・頸部とも縦～斜方向の刷毛目が基調である。これを一次調整としておく。これに、胴部には不整方向のナデ消し、頸部にはヨコナデなどの二次調整が加わる。胴部外面には間隔をおいた縦位のヘラミガキがまま見られ、これも二次調整の一種であるが、多分に文様のな施文である。

頸部と胴部の二次調整の様態とその及ぶ範囲で次のように区分する。

頸部A種 二次調整がほとんど認められない

B種 一次調整面を若干残す

C種 一次調整面を残さない

胴部a種 二次調整なし

b種 ナデ消し

胴部縦位ヘラミガキの有無

第9表 器面調整属性表

番号	頸部二次調整	胴部二次調整	胴部縦位ヘラミガキ
1 黒谷	B (ナデ段)	a	無
2 丸井	A (横ミガキ2条)	b (底部付近)	無
3 居石	B (ナデ段)	b (下半部)	無
4 居石	C (弱いナデ段)	a	有
5 久宝寺	B (横ミガキ2条)	b (下半部)	有
6 六ツ目	C (横ミガキ3条)	b (下半部)	有
7 矢部	C	b (底部・肩部)	無
8 東郷	C	b (底部付近)	無

第10表 器形と調整の相関表

	A b	B a	B b	C a	C b
I 1	1	1	1		
II 1			1	1	
II 2					1
III 3					2

—— 胴部縦位ヘラミガキ有

----- 同 無

型式区分

細部にわたってすべての要素が明確に区分されるものではないが、底部の膨らみ、口縁部の矮小化、縦位ヘラミガキやスリナデによる二次調整の増大を認めうる。型式区分としては胴部器形変化を重視し、次のⅠ～Ⅲ型式を設定する。

Ⅰ型式 黒谷川・丸井・居石

Ⅱ型式 居石・久宝寺・国分寺六ツ目

Ⅲ型式 矢部・東郷

口縁部の拡張形態が各氏によって論じられている。上記型式の口唇幅の平均値はⅠからⅢにかけて矮小化する傾向が窺える。また、頸胴境の厚さと頸部厚さに注目すると、Ⅰ型式では厚さに差がないものが多く、Ⅲ型式では頸胴境が薄い傾向にある。このような細部形態については、製作地の地域の様相が関係する可能性があるが、今後の資料の増加に伴い各型式へ帰属するものとする。

また、時期が下るにつれて口縁端部の拡張が少なくなるという指摘がなされている。確かにⅠ型式の丸井例とⅢ型式の東郷例では後者の端部拡張が小さい。しかし、全体的に見るとバラツキが大きく、また端部のつまみ上げの方向や端面の仕上げ方にも細かく見ると多様性がある。これは、地域性を反映する可能性が高いと判断した。したがって、ここでは型式区分の指標として口縁端部の形状を採用することは避けておく。

編年的位置

阿讃地域および畿内地域の土器編年との対比を見てみると、Ⅰ型式は黒谷川例が井戸1の伴出資料で、菅原康夫氏編年の黒谷川Ⅲ式に位置づけられる。Ⅱ型式は久宝寺南遺跡3号基土層堆積資料により畿内編年の布留0～1式に位置づけられる。またⅢ型式は矢部遺跡土坑314資料により畿内編年の布留1～2式に位置づけられる。このようにⅠ～Ⅲ型式が庄内式新相から布留式古相の間で時系列として把握できる証左が揃いつつある。

ところが、口縁部破片については器形の全体像が不明なため、型式への帰属が明らかではないが、口縁部が発達し、口唇部の拡張が顕著な六条上所土坑⁷⁶⁾八尾南土坑⁷⁷⁾中田16次SD207例が讃岐の下川津6式及び畿内の布留1式まで認められ、口唇部の拡張が少ない八尾南SE26⁷⁸⁾例が布留3式に認められる。したがって、もっとも新しいもので布留3式までこの形式は存在し、畿内へ搬出されている。しかし阿讃地域や畿内においても布留2式以降の完形資料がほとんど知られていないことから、体部形状を基準にした上記の型式区

分が、時系列を反映するか、あるいは個体差レベルにとどまるか、判断する材料に乏しいのが現状である。したがって、II型式とした当古墳出土土器の編年の位置づけは、形式の枠を越えて類推的に検討せざるを得ない。

参考資料として、猫塚・大窪経塚古墳の出土土器を提示し胴部形状を比較する(第54図)と、いずれも広口壺Iとは形式が異なり、前者は鶴尾神社4号墳出土広口壺の系列上に、また後者は讃岐西部を中心とした広口壺の系列上に位置づけられる。しかし、胴部形状を広口壺Iの系列と比較すると、2者とも球形化が著しく認められるが、猫塚例は底部の膨らみが顕著でIII型式の胴部に近似し、大窪経塚例はほぼ完全な球胴であるものの口頸部の矮小化が著しい点でIII式との親縁性が高いものといえる。

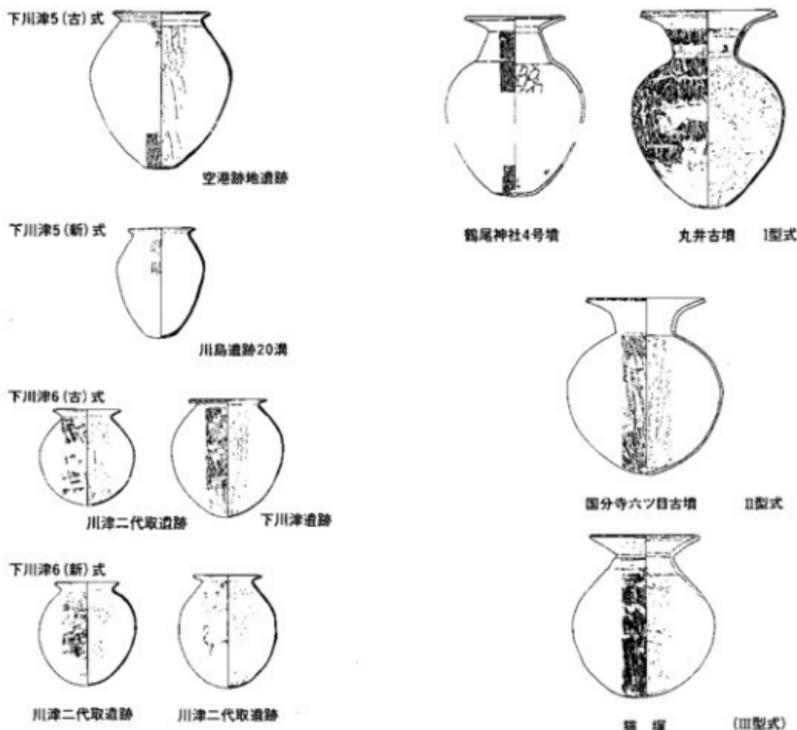
さらに、胴部成形技法については下川津B類土器に代表される在地的土器製作技法の系譜上に位置づけられるものであり、壺の胴部形態の変化も同時に参考となろう。大久保氏の下川津5式以降を一部播磨出土の讃岐系土器を含めて提示した(第54図)。5(古)式段階ではまだ強く肩が張り4式の器形を継承するが、若干凸面底の傾向と、胴部径の拡大がみられる。5(新)式の香川県内の良好な資料はないが、播磨の川島20溝出土資料をこれに当てる。凸面底が顕著で全体的に丸味をもつようである。6(古)式段階では球形化と丸底化が進行するが、底部周辺はさほど膨らまず、倒卵形を若干留めたものである。6(新)式では下半部の膨らみがやや顕著となり、それに後続する壺は下半部にかなり比重を置く形状となる。

このような壺の形態変化と同一歩調を認めるならば、広口壺IのI型式が下川津5(新)式に、II形式が下川津6(古)式に、III型式が下川津6(新)式に位置づけられ、畿内編年との対比を考えればそれぞれ庄内式新相~布留0式、布留0~1式、布留2式に位置づけることが可能であろう。これは先の畿内へもたらされた阿讃系広口壺の伴出土器の年代観とも大きく矛盾するものではない。

このように国分寺六ツ目古墳出土の広口壺は、検証が十分ではないものの、現段階では讃岐地域の編年で下川津6(古)式、畿内編年で布留1式に相当すると見るのが妥当である。ただし、在地的土器様式が畿内や吉備等の他地域の影響によってその独自性が薄れつつある点、また後に述べる壺形埴輪祭式の伝統の中で、決して特殊器種化した土器ではないだけに、土器製作の各過程で個別的に古相を留めることは想定できないことはない。これは、今後下川津5式以降の集落跡の調査例の充実をまって、検討すべき点である。第11表に、現段階の編年対比案を提示する。

第11表 土器編年と古墳編年の対比

讃岐土器編年 ⁷⁹⁾	広口壺	畿内編年 ⁸⁰⁾	古墳編年 ⁸¹⁾
下川津5(古)式 (終末2期)		庄内(中~新)	1期 鶴尾神社4号 丸井
下川津5(新)式 (終末3期)	I型式	庄内新~布留0	
下川津6(古)式 (下川津SH-32床面)	II型式	布留0~布留1	2期 高松茶臼山 園分寺六ツ目
下川津6(新)式 (二代取(新))	III型式	布留2	3期 快天山・猫塚
+	+	布留3	4期 石船塚・岩崎山4号
中間西井坪 谷3資料		布留4(古)	5期 今岡
六条上所 SH02		布留4(新)	6期 富田茶臼山

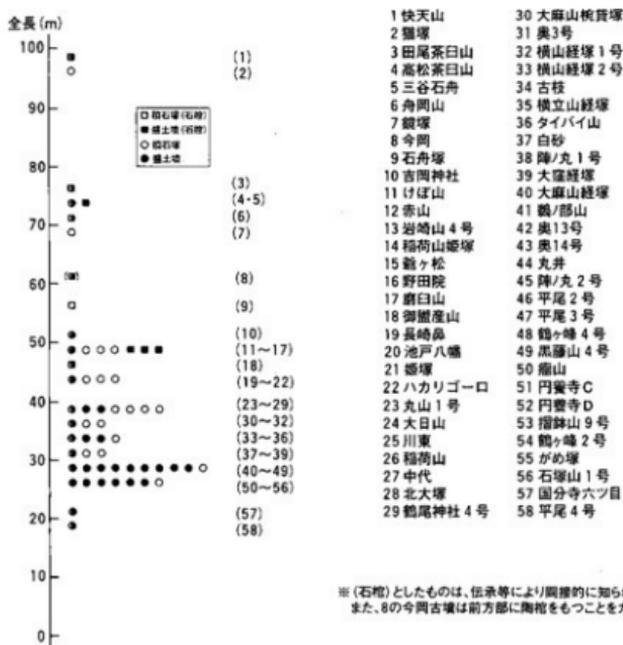


第54図 讃岐(阿讃)系壺の体部形態と古墳出土広口壺

2) 国分寺六ツ目古墳の墳丘と内部構造について

墳丘形態と埋葬施設の方角

国分寺六ツ目古墳は二股に分かれる丘陵の基部を後円部前方部にそれぞれ利用し、全体的に見れば丘陵の延びる方向に直交して墳丘の主軸を設定する。したがって、眼下の平野部へは墳丘の側面が向く。鶴尾神社4号墳や丸井古墳などの最古式古墳においては、前方部は共通して丘陵側を向き、前端を丘陵から切断する形態をもって旧然の墳丘墓と区別される⁵²⁾。また、後続する前方後円墳の多くも後円部を平野部側に向けて主軸を設定することからみると、当墳の立地はやや特異と言える。

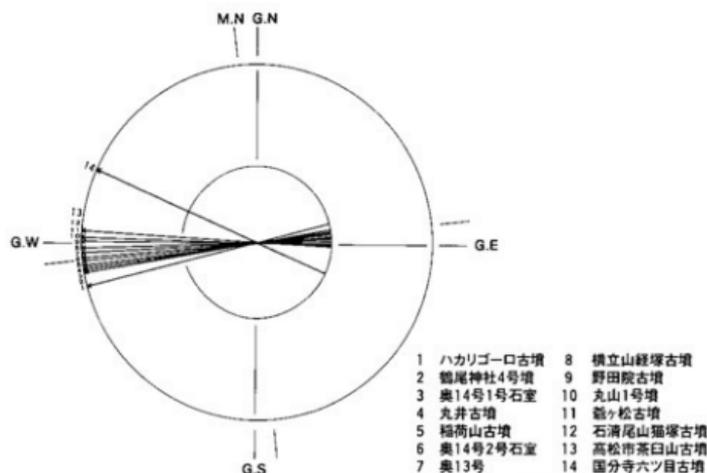


第55図 香川県内の前方後円墳の規模

これに対して墳丘の形状をみると前方部が低く長めで、前端部が裾広がりとなる「バチ形」を呈している。この形状は当地域においてはきわめて普遍的な特徴である⁸³⁾。ただし、前端部の広がりや平野側と丘陵側でやや異なっており、平野側への広がりが大きい。これは、墳丘裾が全体的に平野側に傾斜することに関連する可能性が高い。ただ、前端中央付近に存在する長楕円形の土坑が墳丘主軸と直交せず、若干平野側に広がり気味に配置される点や、前方部丘陵側前端の浅く幅広い溝の外肩もその土坑の外縁線と一致する点などからみると、墳丘外にはさらに平野部側に広がるテラス状の整形面が広がっていたことも考えられる。墳丘に至る墓道などは周辺では確認されなかったが、このような形状は考慮する必要がある。

墳丘の規模は全長21.4mときわめて小規模である。第55図は香川県内の前方後円墳の規模を大きさごとに集計したもので、25m～40mまでの古墳が県内では最も数量が多く、25mを下回るクラスは20m前後付近で前方後円墳の最小グループを形成する。当古墳はこのように県内の前方後円墳の大きさから見た序列の上では最も小規模な階層に属するものであることがわかる。香川県のこのような状況は、全国的にみると決して普遍的なものではない。通常は各平野単位や一定地域に大規模な盟主墳が存在し、中小規模墳の数はさほど多くないが、香川県では全長が100mを越える盟主墳は少なく、逆に小規模墳が圧倒的に多いのである⁸⁴⁾。当古墳のように全長が20m程度の小規模前方後円墳が、中規模墳と同様に丘陵上に存在することがこの地域の最大の特徴である。近年の調査で平野部に前方部を付設した周溝墓も明らかになってきた⁸⁵⁾。埋葬主体部が見つかった事例は少ないが、それでも丘陵上の墳墓のような石柵や粘土柵構造をもつものはないようである⁸⁶⁾。丘陵上に立地する小規模古墳とは一定の階層差がある。したがって当古墳の内容は、この地域に特徴的な中小規模前方後円墳の実態を示すものと言える。

主体部の方位はN-63°-Wで、東西方位から27°振れる。墳丘主軸直交方位と比べると、14°ほど斜交する。従来から、讃岐地方の前期前方後円墳の特徴として埋葬施設が東西を向き、墳丘主軸と斜交するものが多いことが指摘されてきた⁸⁷⁾。当墳は斜交するタイプでありながら、厳密な東西方位は採用していない。第56図は県内の前期古墳のうち、斜交するタイプのものを取り上げて、埋葬施設の方位を示したものである。これによると、東西方位が厳密に維持されているが、当墳のみが東西方位から大きくずれていることがわかる。讃岐地方を中心とした東西方位規制は、古墳時代初頭に畿内地方と吉備地方の大型前方後円墳において北頭位規制が導入される以前に、墳丘の主軸の設定とは別問題として成立したも



第56図 埋葬施設の主軸方位

(北條1967に採録)

のとされる⁸⁸⁾また、墳丘主軸と埋葬施設の主軸が斜交するものを「斜交タイプ」として類型化する考え方もある⁸⁹⁾当古墳は方位とは無関係に埋葬施設の主軸が斜交することから、東西頭位の規制を受けない典型的な斜交タイプと考えることもできる。このような方位規制を受けない斜交タイプは畿内では大阪府弁天山C-1号墳、京都府烏居前古墳⁹⁰⁾同石不動古墳⁹¹⁾など淀川流域の摂津東部にみられ、他地域では富山県谷内16号墳⁹²⁾千葉県手古塚古墳、山口県長光寺山古墳⁹³⁾などがある。畿内で淀川流域の4期(和田編年、以下同じ)にまとまることは留意すべきであるが、他地域を含めると前期の古相から新相まで時期的に限定されず、地域的にも限定できないことから「企画」として元来存在したかどうかは疑わしい。ただし、谷内16号墳では埋葬施設の主軸が前方部とは別に付設された墓道に対して直交する関係であることが指摘されており、当墳の前方部平野部側前端的テラス状整形面が墓道と関係するならば斜交する要因として考えることもできるだろう。長光地山古墳の前方部前端的が当墳と同様の形態を有するのにも留意される点である。

しかしながら、墓道が明確に把握できることは稀で、それを実証するのは現段階では不可能に近い。敢えて言えば、墓道を明確に付設する谷内16号墳を除くと1期に遡るものは見られず、少なくとも当初は葬送儀礼を行う上で機能的に厳密な関係を有したと推定される前方後円墳の墳形と埋葬施設の方向(位)性が、次第に稀薄になる過程で生じた現象と

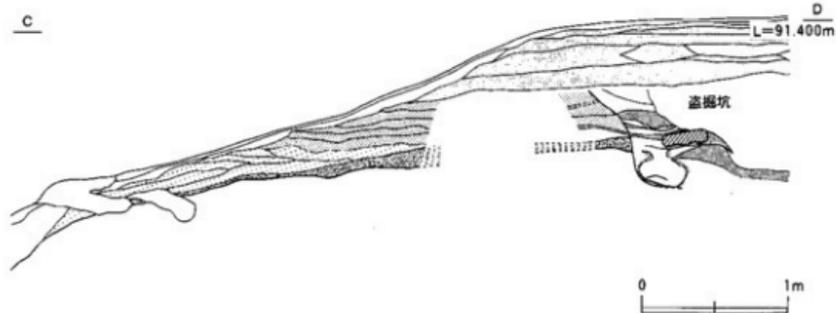
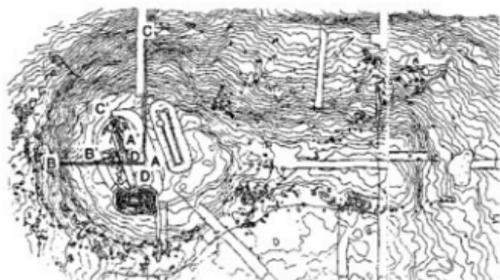
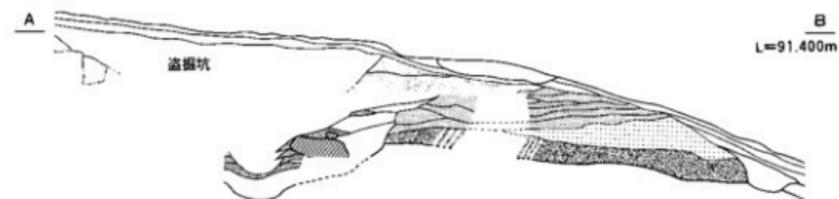
も見ることができよう。これには、前方部の機能的な側面や埋葬施設の方位決定の具体的手順など、諸要素を関連させて考える必要がある。現段階ではこれを系譜的な「企画」として把握せず、祭式の変容や階層的要因を含めて独自に生じ得る可能性を指摘するに留める。

墳丘と墓坑の構築手順

墳丘は地山の削り出しの部分が多いが、後円部の墳頂を中心に厚さ60cmほどの盛土が見られた。この盛土は土質から2つに区分できる。盛土①は黄灰色系の締まりの悪い土、盛土②は橙色系、黄色系、灰色系の交互層で堅く叩き締められた土である。上位の前者は厚さ15～20cmでほぼ均等に墳頂部に分布し、下位の後者は旧地表上から厚さ20～40cmにわたって平野側に特に厚く認められる。第1主体部検出面は盛土②上面で、第2・3主体部墓坑検出面は盛土①上面である。

盛土②は細かく見ると、盛土範囲の外縁部に20cmほど土を盛り上げて、標高90.70m付近で一旦平坦面を確保したことが窺われる(第57図)。この高さは第1主体部墓坑西側の旧地表面に一致し、また墓坑の傾斜もその部分で若干変化する様子がみられる。これは第1主体部の墓坑の掘削が、盛土②の下半部を構築して掘削のための作業スペースを確保した後に行われた可能性が高いことを示している。

墓坑を掘削すると並行して、さらに盛土が行われ、墓坑の上部側壁はこの段階で形成される。概ね旧地表ラインを境にして墓坑の傾斜が急に緩やかになるのは、この辺りの事情を表しているものであろう。この墓坑構築手法を和田晴吾氏の墓坑分類⁹⁴⁾に当てはめると、盛土途中に墓坑を掘削する点で「墳丘墓坑同時進行型」の「掘込墓坑b類」に該当する。しかし、墓坑掘削時において墓坑範囲には盛土は行われていない点と、上部側壁を盛土を行いながら構築する点から見ると「構築墓坑」に近いものとなる。これは小規模墳においては必ずしも典型的な構築法を採用せず、墳丘構築時に便宜性・合理性を追求した結果として考える⁹⁵⁾のが適当であろう。県内の前期盛土墳は地山から直接深い墓坑を掘削するものが多い中で、近隣の綾歌町石塚山1・2号墳においては構築墓坑の系譜が窺える⁹⁷⁾点は重要である。また、小規模墳ながら異質土の交互積みを丁寧に行うのは、1期の奥3号墳⁹⁷⁾に共通する。



A'-B'ラインおよびC'-D'ラインを、
A-Bライン、C-Dラインと合成して作図

第57図 墳丘盛土と第1主体部墓坑の関係

墓坑の最終埋土は黄灰色系の締まりが悪い土で、墳丘盛土①ときわめて近い。おそらく墓坑を埋め戻した後引き続き盛土①を墳頂部に施したものと推定される。盛土②と異なって風化礫混じりの粗雑な土を叩き締めずに用いており、葬送儀礼前の丁寧な作りと比べると、格段に省力化していることがわかる。

列石の設置方法には一定の規則性が認められた。裾部を2段に削出し、裏込土を置いて2列の立石とその間に貼石を置くもので、傾斜面に配置しているにも関わらず、上段と下段の設置距離が等間隔で、その間の貼石面の傾斜を変化させることによって平面形状を維持している。このような列石の設置方法は県内や吉備地方において弥生墓段階から見られる。列石の裏込めは黄灰色系の締まりの弱い土で、墳丘盛土②の堅固な積み形とは全く異質である。これは墳丘盛土①や第1主体部上層埋土に類似するものといえる。

墳丘裾から出土した土器が、元来どこに置かれていたかは不明であるが、いずれも列石裏込土や墳丘盛土の流土中から出土していることから、墳丘構築が完了した後に供献されたことは間違いない。また、前方形東側で出土した壺体部は、前方形墳丘上と墳裾から出土した破片が接合する。

以上のことから、次の手順が復元されよう。

墳形の決定→墳丘盛土②-1で平坦面の確保→第1主体部墓坑の掘削と墓坑上段・墳丘盛土②-2の構築→第1主体部葬送儀礼→第1主体部最終埋没→列石構築→土器供献

第1主体部の葬送儀礼を境に、交互積みや叩き締めなどの面において省略化が見られ、加えて、列石の形状や墳丘に供献される土器など、墳丘の外装面において弥生墓からの伝統的要素をより強く残す点に注意したい。

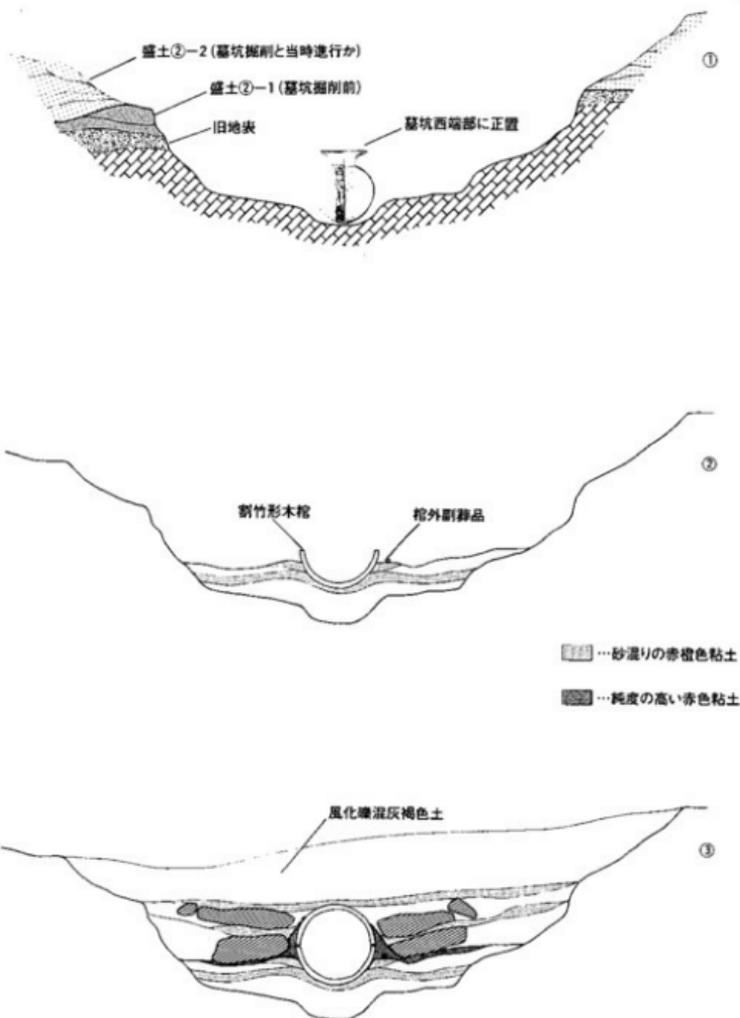
第1主体部の構造

第1主体部の構造について、本文で詳細したがここで一度整理してまとめておく。

墓坑は2段墓坑で、2段目の肩は旧表土面に概ね一致する。したがって、下部は掘削墓坑で、上部は構築墓坑の可能性が高い。

まず、墓坑の掘削は旧表土上面から行われている。角度65~70°ほどの急角度で掘り込まれ、深さ80cmのところ一旦平坦面を確保した後に、後の棺床となる部分を深さ15cmほど断面U字状に掘りくぼめる。西に幅広く、東に狭い。

そして墓坑西端部に広口壺を正立させる(第58図①)。



第58図 第I主体部の構築手順模式図

次に土器の下半部とU字型凹部を一旦厚さ約8cmの礫混じりの灰白色系土で埋めて、その上から赤橙色の下部棺床粘土を幅広く敷く。

さらに棺床外縁部に灰白色土を置き、棺側縁部分に上部棺床粘土を置いて棺床が完成する。土器は肩部付近まで埋没し、頸部から上は棺床小口部の外側に露出している。

この段階で棺が設置され、棺外副葬品も同時に設置された(第58図②)。

その後、棺周縁部に若干の土を置き、棺の側縁部分と棺外副葬品、さらに土器口縁部を被覆する赤色粘土が幅広く敷かれる。

この段階でようやく石積みの基底石が設置されるが、基底石は部分的で、土で埋められる箇所もある。基底石の上部は赤橙色粘土で被覆される。

次に2石目が置かれるが、これも部分的である。2石目が設置された後も赤橙色粘土で被覆され下段墓坑が埋没する。蓋石は架構しなかったものと考えられる。

上段墓坑は風化礫混じりの粗い土で一度に埋められ、引き続き墳丘盛土①が形成される(第58図③)。

粘土棺床から復元される木棺は、全長2.97m、直径0.4mほどの割竹形木棺で、棺床のレベルの差はみられないが、墓坑の西側が幅広く、墓坑の小口との距離も西側が広いことから、埋葬頭位は西側と考えられる。なお、排水施設はみられなかった。

以上の第1主体部構築手順において重要な点は次の3つである。

- (1) 墓坑底をU字状に窪ませ、置き土を施した後に粘土棺床を設置すること
- (2) 石積みが全く不十分で、土で埋めた箇所が認められること
- (3) 棺床粘土設置前に小口部に土器を正立させること

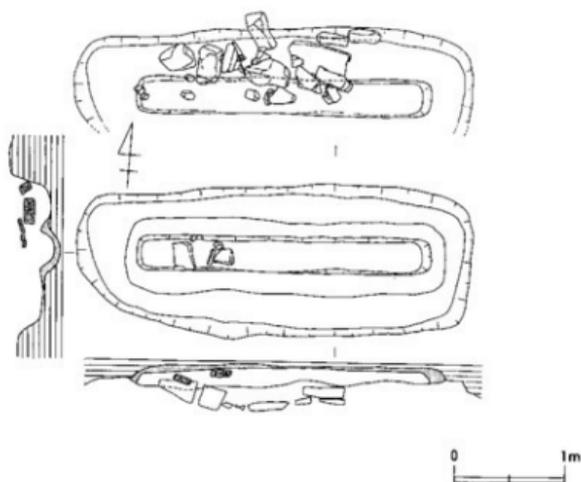
(1)については、畿内の大型竪穴式石槨の編年で見るとき、都出分類のSC形式に該当する⁹⁸⁾粘土槨とすればNC形式で、前期の後半段階で出現する形式とされてきた。山本三郎氏は竪穴式石室の基底部構造を5形式に分類し、墓坑底の中央に横断面がU字状を呈する細長い窪みを掘り込み、この窪みに粘土床を設置するものをE形式としている⁹⁹⁾さらにE形式は粘土棺床下に板石や礫石を敷くE1形式と墓坑底に直接粘土棺床を設置するE2形式に区分している。山本氏の見解はこのE形式を前方後円墳成立期に吉備地方で出現した形式とする点で都出氏の見解と異なっており、吉備では都月2号墳を初現として湯迫車塚、金蔵山への系譜を提示している。

当地方においては丸亀平野では城山4号墳¹⁰⁰⁾に、高松平野では円養寺A・D号墳¹⁰¹⁾かしが谷2号墳¹⁰²⁾に、長尾、津田方面では奥2号墳¹⁰³⁾奥13・14号墳¹⁰⁴⁾などにみることができる。これらは、所属時期が必ずしも明瞭ではないが、共通する点として、奥14号第1石室で長さ3.3mの粘土床を最大とし、多くが3m未満に収まることに留意すべきである。同様な例は高松茶臼山古墳の周辺埋葬施設(第4埋葬施設)においても採用されている¹⁰⁵⁾ことから、時期的な新古という以外にも、墓坑下部施設の複雑さに示される階層的意味合いも考慮する必要がある。ただ、奥3号墳や石塚山1号墳など割竹形木棺をいち早く導入した1期の古墳では、棺の規模が4mを越えないものでも、墓坑底を窪ませず、厚い基壇状の粘土床や礎敷きが見られる点は、時期的に前後関係を示すことも考えられ、(2)をまじえて後述する。

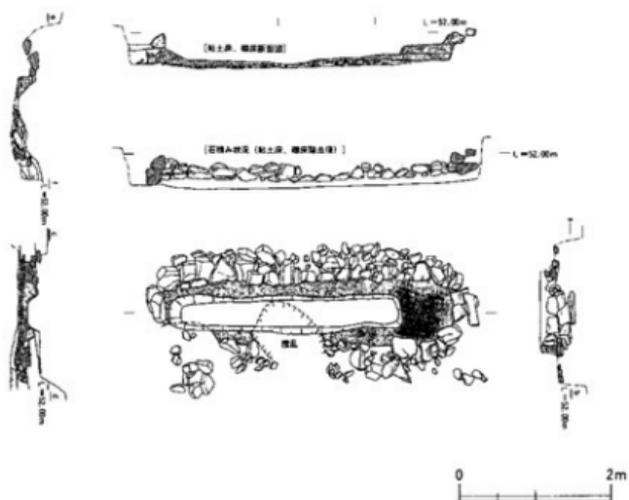
(2)については、本文でも述べたが、石積み構造が不十分であり、また粘土槨構造に類似する点がむしろ多いことから、粘土槨の範疇に含めた方が良いと考えた。

県内で同様な例が見られる。当墳に近い快天山古墳¹⁰⁶⁾(3期)の3基の埋葬施設には、それぞれ鷲ノ山産石材の割竹形木棺を納めているが、棺周囲の槨構造には少しずつ違いが見られる。第1石棺は墓坑底に粘土床を作り、その上に棺身が置かれた後、粘土をまじえながら板状安山岩を棺身に接するように積み上げ、棺身の先端よりやや低い高さのところに副葬品を置き、その上を約20cmの厚さの粘土で被覆し、棺蓋をした後も板状安山岩と粘土で構築した石槨で覆ったものである。これは板状安山岩を小口積みする点で竪穴式石室の下部構造に共通するものであるが、棺蓋を置いた後は石積みが自立せずに棺身にもたれ掛かり、槨蓋もなくかつ粘土を交えながら埋めている点で当古墳の第1主体部の形態によく似ている。第2石棺においてはより一層顕著で、「粘土の間に平板状の石をまじえて積み上げた」という表現のとおり、粘土槨に近い構造となる。そして第3号棺は安山岩板石を全く使用せず、すべて粘土によって被覆したものであった。このように快天山古墳の3基の石棺の槨構造の差と副葬品から判断される階層的序列の相関は、当古墳の第1主体部、第2主体部にみる槨構造の差から判断される階層的序列にきわめて類似している。

畿内地方で見られる、いわゆる粘土槨とは異質なこの構造は、先の綾歌町石塚山1号墳からすでに見ることができる。割竹形木棺棺身部分には2~3段の石積みが行われ、それを覆うように設置された粘土床で棺身が被覆され、棺蓋は墳丘盛土によって被覆されたものと考えられている。和田分類の「無墓坑」タイプの特異性を考慮する必要があるが、快天



奥第2号古墳



石塚山1号墳

第59図 第1主体部柵構造の類例

山古墳第2号石棺の櫛や六ツ目古墳に類似した構造である。

また同様な例は、雨滝山古墳群中の奥2号墳の埋葬施設¹⁰⁷⁾にも見ることができる。主体部は1基であるが、墓坑底を一段掘りくぼめた上に粘土床が敷かれ、棺安置後さらに粘土で被覆した後、部分的に塊石を交えながら墓坑を埋めている。粘土櫛に分類されているが、当墳の第1主体部の石積みをさらに省略化したものと考えてよいだろう。

以上のように、礫を使用する粘土櫛構造の埋葬施設は1期の石塚山1号墳を古例として一定期間(1期～3期)存続する。丸亀南東部や長尾・雨滝山周辺では、割竹形木棺をいち早く導入した地域であることも指摘されており¹⁰⁸⁾3期頃に畿内地方で導入された「粘土櫛」とは別に、当地域で割竹形木棺を基礎として古くから独自に展開した櫛構造と言えるだろう。当地域の盟主的前方後円墳である快天山の割竹形石棺は、その形態からみて、内在的要因で材質を木から石へ変化させたと指摘されている¹⁰⁹⁾。櫛構造においてもまた、この地域の伝統的構造を採用しているのである。

先の棺底構造を振り返ると、このような地域に棺底を窪ませるものが多いことが判る。棺底構造自体、櫛構造と関係を持ちつつ独自に展開したものと考えられるから、畿内の棺底構造の推移とは切り離して考えるべきである。棺底の礫敷きと窪みに階層的関係を考慮する必要はあろうが、快天山でも伝統的櫛構造を採用していることを考えれば、先の棺底構造の相違は時期的な推移を示す可能性が高い。

要するに、1期では墓坑底を窪ませずに一部礫敷きを挟みながら粘土床を作出し、2期以降に墓坑底を窪ませるものが出現する。墓坑底の窪みは小規模墳でも一様に採用されており、他地域の影響は現段階では考慮する必要はないであろう。

(3)については、棺を安置する際に土器の下半部はすでに埋没しており、上半部のみが露

第12表 丸亀平野南東部における棺底構造の変遷

石積構築墓坑の初現	石塚山2号墳	+
構築墓坑を残しつつ割竹形木棺導入 粘土櫛的要素の初現	石塚山1号墳	和田編年1期
墓坑底を窪ませ、割竹形木棺安置	区分寺六ツ目古墳	和田編年2期
粘土櫛的要素を残し割竹形石棺成立	快天山古墳	和田編年3期

出した状態であることが判った。また、棺蓋（側縁）を被覆する際に同時に土器の口縁部を被覆するという、葬送儀礼における土器使用の一端が窺える資料となった。

主体部から出土する土器の機能について大庭重信氏は雪野山古墳の朱を包蔵した棺内出土壺が第1段階の副葬品を配列した後に被葬者へ施朱する際に使用され、その後他の副葬品と共に被葬者の足下に土器が置かれたという復元を行っている。そして主体部から貯蔵用土器が出土する例は、内部に朱が見られる場合が多く、また畿内の大型墳に多いことから、古墳時代になって新たに創出された施朱に関わる儀礼行為を反映するものとし、また、それらが足元に等しく置かれていることから三角縁神獣鏡の頭足分離副葬と関連する可能性も指摘している¹¹⁰⁾。

今回出土した土器の内部には、朱の痕跡は全く見ることはできなかった。そして墓坑の形状から推定すると、埋葬頭位は西側と考えられ、土器は被葬者の頭位側に置かれた可能性が高い。また、棺を安置する際にすでに下半部が埋設している点から見ても、施朱に使用した容器を埋納したものとは考えられない。

第13表 主体部土器副葬古墳一覧

古墳名	器種	出土位置	内容物	施朱	古墳規模	時期
赤山古墳	(伝) 壺・高杯	(伝) 石棺の傍ら	不明	○	50	III
岩崎山4号墳	(伝) 壺	不明	不明	○	49	IV
高松茶臼山古墳	小形無頸壺	棺外?	朱塊	○	75	II
猫塚古墳	広口壺	(石室内)	不明	○	96	III
快天山古墳	広口壺	棺外足元	朱彩	○	100	III
国分寺六ツ目古墳	広口壺	棺外頭部	なし	×	21.4	II
大窪経塚	広口壺	(石室内)	不明	?	32	IV
吉岡神社古墳	精製長頸壺	石室内	不明	○	52	II

香川県内で主体部から土器が出土している例をあげると、不確実なものを含めて、管見では第13表の8例である。いずれも前方後円墳で、2期に多く4期まで見られ、壺が多い点と大型古墳に多く見られることが注意される。当古墳で出土したような、中型の広口壺を副葬しているものは、猫塚、快天山、大窪経塚に限られるが、このうち快天山は第3号石棺の棺外足元付近で粘土に被覆され、口縁部を上にし正立して出土しており、当古墳の出土状況にきわめて類似している。しかし、出土状況が明確でないものを含めて、遺体に施朱したと推定されるものが多い点からすると、これらは施朱に関わった土器を副葬した可能性が高い。

ところで、上記8例のうち、確実に棺外から出土しているものは当古墳と快天山の壺2例である(赤山では石棺の傍らから出土したらしいが、詳細は不明)。先の大庭氏の指摘する貯蔵具埋葬の古墳(大庭1996)のうち、棺外から出土したものを拾うと、小規模方・円墳の粘土槨に多いことが判る。そして朱を内包しないもので占められる。これを大型古墳で執り行われる葬送儀礼の諸要素を部分的に、また形骸的に模倣したと解釈することも出来ようが、蓮華谷2号墳や潜塚など1期の古墳から見られる点と、蓮華谷2号墳では主体部への施朱があり、壺の外面には朱が付着するものの、内面には朱が見られないといった現象¹¹¹⁾を理解することは難しい。国分寺六ツ目古墳では、被葬者の頭部に土器を安置していることも加え、施朱に使用した土器を足元に配置する行為が果たしてこのような小規模墳にまで影響を及ぼしているか、あるいはこれらについて別の祭式を考える必要があるかについては、未だ検討すべき点が残ると言える。

とはいえ、快天山古墳では1号石棺において鏡の棺外足元配置がみられ、その後3号石棺で土器を足元配置していることからすれば、これについては畿内的な土器副葬やその配置¹¹²⁾が窺われる資料である。国分寺六ツ目古墳と3号石棺との類似性は指摘されうるが、上記の小規模古墳の土器副葬の状況からみれば、この要素に関しては必ずしも快天山の影響下にあるとは言えず、別次元で検討する必要があるであろう。

以上、第1主体部の構造等からその内容を吟味した。整理すると、槨構造、棺底構造の面で当地域の伝統的手法が見られ、畿内に先行して粘土槨とそれに類似した構造を採用している。同様な構造が他地域においても見られるか否か、必ずしも十分な検討が出来ていないが、現段階では、当地域の盟主墳である快天山古墳には、地域の様相の強い槨構造が採用されており、石棺の出現もまた内在的に理解されうるものである。

一方で、快天山の副葬品組成や配置については畿内の要素が強く、後に触れるが墳丘外表の円筒埴輪祭式も新出要素と考えられる。国分寺六ツ目と快天山3号石棺には棺外に土器を副葬する共通の行為が見られるが、前者は小規模古墳の土器埋葬の、後者は畿内の副葬品組成・配置といった別系譜を考えた方がよいと判断された。

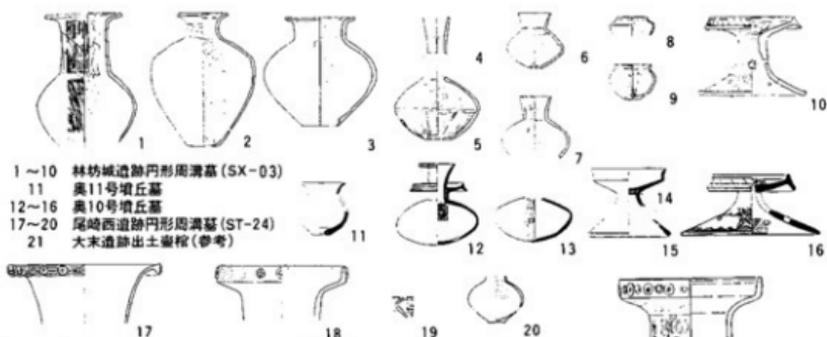
壺型埴輪祭式について

墳丘裾部では、後円部周辺で鉢等の供膳具が、そして前方部では広口壺等の貯蔵具が出土した。前者は奥11号墓¹¹³⁾などの弥生墓から継続する供膳具祭祀の残存要素として位置づけられる。一方、後者の広口壺を使用する祭祀については、最古式古墳の鶴尾神社4号墳や丸井古墳から認められる要素である。特に鶴尾神社4号墳の広口壺は底部に焼成前の穿孔を行い、墳丘上に多数並置されており¹¹⁴⁾、当地方に固有の「壺型埴輪」と評価されている¹¹⁵⁾。

弥生墓の中にその系譜を求めるとすれば、後期後葉段階の林坊城遺跡円形周溝墓¹¹⁶⁾や奥11号墓などでは器種が特定されず、一部装飾的な器台等を伴って、吉備地方の特殊器台型・特殊壺型土器の模倣的要素を見ることができ、後期末葉段階では尾崎西遺跡円形周溝墓¹¹⁷⁾で在地的な大型壺2個体が供献され、吉備の要素はすでに見られない。続く終末期においては、多くは壺棺として使用されるが、円養寺遺跡出土壺棺¹¹⁸⁾に代表される複合口縁壺が播磨地域を含めて広く流通し、一部で儀器化も指摘されている¹¹⁹⁾。鶴尾神社4号墳の壺型埴輪はこのような壺の儀器的使用の動向に沿って、在地的に発生した「儀器」であろう。

しかし、今のところ焼成前に穿孔した「儀器」が最古式古墳以降の他の古墳で一様に確認できる状況ではない¹²⁰⁾。また、他の古墳で出土する広口壺の形式も、少なくとも4形式にわたっている¹²¹⁾。共通するのは使用される土器のサイズであり、概ね35～40cmに収まっている点である¹²²⁾。広口壺を使用する祭祀については、地域内で一定の拡散が見られるが、儀器化した特殊器種はさほど普遍化せず、日常使用する土器のうち、特定の器種・法量のものに小孔を穿つなどした「擬」儀器ともいうべきものが多いと考える。特定の器種・法量のものを使用する点で、概念的部分に限定して祭式の共通性をもつと言える。

墳丘における祭式において特定器種が生成されない点は当地の弥生墓の伝統を色濃く残すが、広口壺使用の概念的部分で祭式の共有化が図られるという点は、例えば埋葬主体部の東西主軸方位が墳丘主軸と主体部主軸の整合に優先するといった強い地域性を帯びた共



- 1~10 林坊城遺跡円形周溝墓(SX-03)
 11 奥11号墳丘墓
 12~16 奥10号墳丘墓
 17~20 尾崎西遺跡円形周溝墓(ST-24)
 21 大末遺跡出土甕棺(参考)

古墳時代前期壺形埴輪葬式

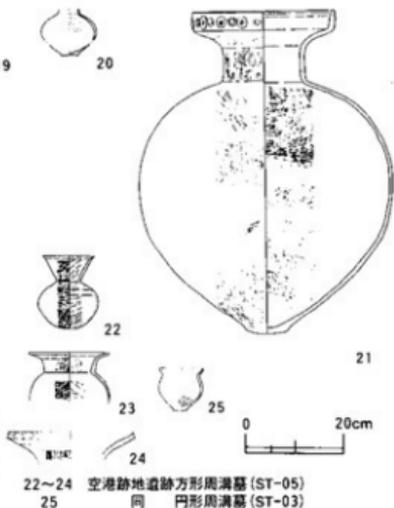


和田編年1期

同 2期

同 3期

- 26 鶴尾神社4号
 27 丸井
 28 蓬原谷2号(徳島)
 29 国分寺六ツ目古墳
 30 奥14号
 31 同上
 32 姫塚
 33 猫塚
 34 大塚経塚

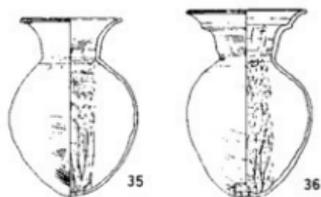


- 22~24 空瀬跡地遺跡方形周溝墓(ST-05)
 25 同 円形周溝墓(ST-03)

弥生系土器供献(一部甕棺含む)

壺形埴輪(古墳時代中期)

35・36 権又原C号古墳



第60図 壺形埴輪葬式の変遷

通祭式と似た部分もあり、その出自が最古期の古墳でみられることを重視すれば、祭式のみに限定し、地域性を帯びた「壺型埴輪祭式」と称するのが妥当であろう。

一方、空港跡地遺跡ST-05¹²³⁾では埋葬主体部の方位規制を受けていないとみられる1期の前方後方形墳墓の周溝から広口壺が出土しており、各集落に付属する小規模墳墓に至るまで、外見上は同様の祭式を採用しているかに見える。しかし、主体部主軸の東西規制を含めて丘陵上の古墳と各集落に付属する小規模墳墓とでは階層差が歴然で、そこまで祭式の概念的部分が共有されたとは考えにくいから、広口壺を使用する祭式には外見上不可分の2極的な構造が内包されているものと理解しておきたい。要するに後者では、上位階層の祭式共有化とは別に、弥生墓の伝統を継承する祭式が引き続き行われていたと考える。

外見上不可分の広口壺を使用する2極的な祭式は、上位階層の「壺型埴輪祭式」が途切れ、畿内的な「埴輪祭式」が普遍化する段階に至ってそれが可視的となる。古墳時代中期の小規模墳墓である三木町権八原C古墳で出土する底部焼成前穿孔の「壺型埴輪」¹²⁴⁾は、その段階に至っても継続して行われた広口壺の祭式が、畿内的「埴輪祭式」の影響をうけて「儀器」として固定化したものと考えられ、その時期にはすでに上位階層の古墳には「壺型埴輪祭式」は見られないのである。

上位階層の古墳における壺型埴輪祭式の下限は、今のところ和田編年4期の石船塚古墳に求められる。ここでは広口壺と共に畿内的な「埴輪」が共存しており、石清尾山積石塚群の強い伝統性に新出的要素が嵌入する状況が見て取れる。一方、3期の快天山古墳は墳丘外装面の在地的要素は払拭され河原石の葦石や円筒埴輪列の存在が知られている。棺形態や構構造に在地性を留めるが、墳丘規模や副葬品の内容は畿内的影響を強く受けた有力首長墓である。このような有力首長墓の出現をもって、従来の「壺型埴輪祭式」が淘汰されるものとする。主体部構造で類似する国分寺六ツ目と快天山であるが、墳丘外装面については、後者に至って大きく刷新される状況が見られる。

まとめ

国分寺六ツ目古墳は全長21.4mと小規模な古墳で、前期古墳に一般的な東西方位規制はみられないが、割竹形木棺を礎をまじえて粘土で被覆する独特の主体部構造や、壺型埴輪祭式には、周辺の地域でみられる2～3期の古墳と共通する要素が看取された。

当古墳の勢力基盤は眼下の国分寺平野一帯であると言え、群立する前期前半期の小規模古墳の一端に相当する。主体部構造の面において快天山古墳に共通する部分が多かった。快天山は出土した埴輪から見て、当墳に後続する3期に位置づけられ、埋葬主体部に割竹形石棺を使用する全長100mの大型墳である。

ここで採用された石棺は、出自を在地の割竹形木棺に求めるとしても、その後他地域の有力首長墓に搬出され、安福寺石棺のように畿内地方にまで搬出されることになる。また、県内で石棺を採用する3～5期の古墳の規模は一様に拡大し、それ以後に残る小規模な前方後円墳はきわめて少ないのである。これは、石棺の採用を直接契機とする訳ではないが、畿内の要素が次第に各地の首長墓に取り込まれ、かつ地域の統合化も併せて進行した結果、新たな首長層間のつながりの中で各地の埋葬施設に採用されたものと言える。

このように快天山古墳にみる畿内的様相には周辺地域の統合化が反映したものと考えられる。先に石塚山古墳、国分寺六ツ目古墳との共通性と伝統性を埋葬施設において指摘した。これらの小地域単位の小規模前方後円墳は在地的な伝統に個々に立脚するが、快天山古墳の出現は、丸亀平野南東部から羽床盆地を経て国分寺平野に及ぶこれらの小勢力を統括した新たな勢力が形成されたことを示唆する。国分寺町鷲ノ山神社境内に安置される石棺末製品¹²⁹⁾から見て、国分寺平野が石棺の製作地と推定されるのも、国分寺平野が快天山古墳を象徴とする勢力下にあったことを傍証する。県内に多数存在する前期の小規模前方後円墳は、このように和田編年3～4期にかけて各地の地域的統合が進む中で急速に少なくなると推定される。

小規模前方後円墳の埋葬施設や墳丘外表面には、大型木棺の採用などに当初外来的要素が見られるが、槨構造や東西頭位規制、また壺型埴輪祭式といった、畿内を中心とする大型前方後円墳の祭式とは異なる在地的な独自の祭式を認めることができる。祭式の共有化は、それ自体が政治的統合を前提として存在するのではなく、小地域毎の自立性に立脚し遅くとも弥生時代後期末以来培われた地域間のネットワークに乗って展開したもので、槨構造、棺形態、広口壺形態などには一定のパラツキや偏在がある。しかし同時に、墳丘規模や埋葬主体部の規模、副葬品等に格差が見られるのも事実である。その格差の発現は、

今のところ最古式の古墳である鶴尾神社4号墳、丸井古墳などに求める¹²⁶⁾のが妥当であろう。ただし弥生期の複雑な地域間関係を内在する意味ではそれ以前に遡る可能性もあろう。

当古墳はこのようにして発生した小規模前方後円墳が淘汰され、小地域が統合されるまさに直前の時期の所産であり、国分寺平野に根付いた小勢力の、一つの到達点であったと考えられる。すでに述べたように、国分寺平野はそこで採用された割竹形石棺の製作地でもあり、国分寺六ツ目古墳を築造し得た小勢力は後の石棺製作に深く関わった可能性も考えられよう。眼下に広がる平野部に埋没するであろう各時期の遺跡は、この辺りの事情を如実に示すことが予想される。今後、このような立体的な検証と国分寺平野に根付く文化の動態を把握する上で、平野部の実態解明は欠かせない。

註

- 1) 長谷川・横瀬・斉藤 1989
- 2) 本書第5章1) 参照
- 3) 竹岡 1984
- 4) 大西・森下英 1993
- 5) そのほか、蓮光寺山遺跡などササカイト原石産地
周辺で転石などを利用した石器製作跡が多数分布
する(竹岡 1980)
- 6) 網川 1994
- 7) 丹羽・藤井 1988
- 8) 葦本・森下友 1992
- 9) 森下英ほか 1990
- 10) 森・古野編 1995
- 11) 森下友ほか 1995
- 12) 國木 1994
- 13) 宮崎編 1993
- 14) 川畑 1997
- 15) 山元編 1993
- 16) 松本・岩崎 1983
- 17) 佐藤ほか編 1992
- 18) 古野ほか 1990
- 19) 高松市教育委員会編 1989
- 20) 森下英 1996
- 21) 佐藤 1993
- 22) 大久保・森ほか 1995
- 23) 北山編 1995
- 24) 大久保 1995
- 25) 山元編 1994
- 26) 大久保 1990
- 27) 佐藤ほか編 1992
- 28) 山元編 1993
- 29) 森・古野編 1995
- 30) 高松市教委編 1974
- 31) 森下英 1992
- 32) 渡部・藤井 1983
- 33) 菅原 1993, 大久保 1996
- 34) 岡村 1986
- 35) 山元 1991
- 36) 高松市教委編 1970
- 37) 渡辺 1979, 鐘方 1989
- 38) 丹羽・藤井 1988
- 39) 丹羽・藤井 1988
- 40) 松本ほか編 1983
- 41) 今井 1990
- 42) 坂出市史編さん委編 1988
- 43) 松本ほか編 1983
- 44) 渡部 1994, 渡部 1995, 大久保 1995b
- 45) 和田・松浦 1951
- 46) 渡部 1995
- 47) 渡部 1995
- 48) 葦本 1995
- 49) 森下浩ほか 1983
- 50) 大久保編 1996
- 51) 大久保編 1996
- 52) 船岡山古墳は、双方中円墳、前方後円墳の2説が
あるが、ここでは近藤編1991に基づき双方中円墳
として把握しておく。
- 53) 森下浩ほか 1993
- 54) 大久保編 1996
- 55) 福家古墳は堂山西側裾部でかつて土取り工事中に
発見されたが、調査を行わないまま埋め戻された。
- 56) 丹羽・藤井 1988
- 57) 川畑 1993
- 58) 渡部編 1977
- 59) 藤好 1996
- 60) 今井 1993
- 61) 松尾編 1997
- 62) 金田 1988
- 63) 岩崎 1984, 松下 1990, 大久保 1990・1993, 菅原
1992
菅原氏は土器製作に技術的同一性をもつ集団とそ
の社会背景を想定し、「東四国土器群」と仮称して
いる。

- 64) 菅原編 1987
- 65) 花谷編 1991
- 66) 寺澤 1988
- 67) 菅原編 1987のP41の7
- 68) 底面が平らな面とならず、胴部境の稜線から膨らみが見られるものを「凸面底」と仮称する。凸面底は弥生時代後期中葉頃から存在する。
- 69) 菅原編 1987
- 70) 花谷編 1991 P82の17
- 71) 山元編 1995 P107の203
- 72) 山元編 1995 P107の202
- 73) 赤木ほか 1987 第72図のK-39
- 74) 寺澤 1988 P140の1
- 75) 原田編 1987 P269の19
- 76) 北山編 1995
- 77) 山田編 1991
- 78) 米田編 1981
- 79) 大久保 1990, 大久保 1993
- 80) 石野編 1976, 寺澤 1988
- 81) 和田 1987を基に作成
- 82) 近藤 1983・1986, 都出 1979
- 83) 玉城 1985, 北條 1986・1987
- 84) 大久保 1996
- 85) 林坊城遺跡SX03 (宮崎編 1993)
尾崎西遺跡ST24 (森下ほか 1993)
空港跡地遺跡馬講基群 (森下 1992, 真下 1993)
長尾陵遺跡 (平成8年11月28日四国新聞) など
- 86) 埋葬主体部が検出された例としては、長尾陵遺跡では箱形木棺痕跡が、空港跡地遺跡では長さ2m程度の小規模な箱形木棺痕跡が見つかったり。
- 87) 玉城 1985
- 88) 北條 1987
- 89) 福永 1990
- 90) 福永 1990
- 91) 梅原 1955
- 92) 宇野編 1988
- 93) 近藤編 1991
- 94) 和田 1989
- 95) 北條 1990
- 96) 園木 1993
- 97) 古瀬 1985
- 98) 都出 1979・1986
- 99) 山本 1980・1995
- 100) 笹川 1992
- 101) 松本 1971
- 102) 藤井編 1986
- 103) 古瀬 1985
- 104) 古瀬 1985
- 105) 松本ほか編 1983
- 106) 和田・松浦 1951
- 107) 古瀬 1985
- 108) 園木 1993
- 109) 渡部 1995
- 110) 大庭 1996
- 111) 菅原 1994
- 112) 大庭 1996
- 113) 古瀬 1985
- 114) 渡部・藤井 1983
- 115) 大久保編 1996
- 116) 宮崎編 1993
- 117) 森下英ほか 1993
- 118) 大山編 1983
- 119) 岸本編 1996
- 120) 焼成前穿孔が焼成後穿孔か、見分けるのは困難に伴う。少なくとも、鶴尾神社4号墳のような明確な焼成前穿孔の底部が他の古墳から多数採集・出土している状況はこれまでのところ見られない。穿孔部のさらに細かな観察が今後必要となろう。
- 121) 口縁部がラッパ状に開く丸井古墳出土土器、頸部がハの字に内傾する鶴尾神社4号墳出土土器、口縁が直線的に開く蓮華谷2号墳出土土器、口縁部が稜線を介して開く大庭経塚出土土器の4形式である。二重口縁タイプもこれに加わる可能性がある。
- 122) 日常集落における壺のサイズ自体が矮小している

可能性はある。

- 123) 森下英 1992, 真下 1993
- 124) 大山編 1983
- 125) 渡部 1995

- 126) 埋葬主体部の規模や副葬品の内容からみて、今のところ岡古墳が最初の古墳時代的な地域的盟主の墳墓と考えられる。

参 考 文 献

- 赤木克規ほか 1987『久宝寺南(その1)-近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 石野博信 1971「川島・20溝の土師器群」『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会
- 石野博信編 1976『福向』奈良県立橿原考古学研究所
- 今井和彦 1990「雄山古墳群」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成元年度』香川県教育委員会
- 今尾文昭 1995「木棺-棺形徳の二、三-」『季刊考古学 52号』雄山閣
- 岩崎直也 1984「四国系土器の搬出」『大阪文化誌 第17号』大阪文化財センター
- 宇野隆夫編 1988『谷内16号墳』富山大学人文学部考古学研究室
- 梅原末治 1933「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊』京都帝国大学文学部
- 梅原末治 1955「八幡石不動古墳」『京都府文化財調査報告第21冊』京都府教育委員会
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 大久保徹也 1993「讃岐地方における古墳時代初期の土器について」『研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財調査センター
- 大久保徹也 1995a「上天神遺跡の集落構成」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊上天神遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 大久保徹也 1995b「讃岐」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 大久保徹也 1996「讃岐と阿波-四国における前方後円墳の不均等分布の一面-」『中四研だより第5号』中国四国前方後円墳研究会
- 大久保徹也編 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 大久保徹也・森格也ほか 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊上天神遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 大山真充編 1983『川上・丸井古墳発掘調査概報』長尾町教育委員会
- 大西浩正編 1989『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』徳島県教育委員会
- 大西浩正編 1990『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』徳島県教育委員会
- 大庭重信 1996「雪野山古墳にみる土器副葬の意義」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
- 高村秀典 1986「中国の鏡」『弥生文化の研究 6道具と技術Ⅱ』雄山閣
- 鐘方正樹 1988「碧玉製裝飾品の研究視点」『將干善教先生華甲記念 考古学論集』經干善教先生華甲記念会
- 金田章裕 1988「桑里と村落生活」『香川県史 1原始・古代』香川県
- 川西宏幸 1989「古墳時代前史考」『古文化談叢21集』九州古文化研究会
- 川畑 彰 1997「天宮宮西遺跡」『第14回特別展高松埋蔵文化財展』高松市歴史資料館
- 岸本道昭編 1996『新宮東山古墳群』龍野市教育委員会
- 北山健一郎編 1995『高松自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 太田下・須川遺跡』香川県教育

委員会・岐阜県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

- 北山健一郎編 1995「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊六条・上所遺跡」香川県教育委員会・岐阜県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 絹川一徳 1994「五色台産サヌカイトを中心とした石器石材の獲得と瀬戸内技法」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会
- 瀧木健司 1993「石塚山古墳群」綾歌町教育委員会
- 瀧木健司 1994「竹元遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成5年度』香川県教育委員会
- 蔵本晋司 1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古第4号』香川考古刊行会
- 蔵本晋司・森下友子 1992「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊東山崎・水田遺跡」香川県教育委員会・岐阜県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 近藤義郎 1983「前方後円墳の時代」岩波書店
- 近藤義郎 1986「前方後円墳の誕生」『岩波講座 日本考古学 6 変化と面影』岩波書店
- 近藤義郎編 1991「前方後円墳集成中国四国」前方後円墳研究会
- 坂出市史編さん委員会編 1988「坂出市史 資料」香川県坂出市
- 笹川龍一 1989「大窪塚古墳」『第25回埋蔵文化財研究会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』埋蔵文化財研究会
- 笹川龍一 1992「城山古墳群発掘調査報告書」飯山町教育委員会
- 佐藤竜馬 1993「出水状遺構について」『空港跡地遺跡発掘調査概報平成4年度』香川県教育委員会・岐阜県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬ほか編 1992「空港跡地遺跡発掘調査概報平成3年度」香川県教育委員会・岐阜県埋蔵文化財調査センター
- 菅原康夫 1992「阿波弥生時代終末期社会の特質」『考古学与生活文化 同志社大学考古学シリーズV』同志社大学文学部
- 菅原康夫 1994「蓮華谷2号墳」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告4』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 菅原康夫編 1983「萩原墳墓群」徳島県教育委員会
- 菅原康夫編 1986「黒谷川郡頭遺跡I」徳島県教育委員会
- 菅原康夫編 1987「黒谷川郡頭遺跡II」徳島県教育委員会
- 高松市教育委員会編 1970「高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報」高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1974「高松市三谷町通谷遺跡調査概報」高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1989「久米池南遺跡発掘調査報告書」高松市教育委員会
- 竹岡俊樹 1984「国分台遺跡群」『日本の旧石器文化3』雄山閣
- 竹岡俊樹 1980「瀬戸内海地方における石器群の変遷」『旧石器考古学21』旧石器文化談話会
- 玉城一枝 1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『永末先生米寿記念獻呈論文集』
- 次山 淳 1991「土器」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会
- 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究26-3』考古学研究会
- 都出比呂志 1986「壱穴式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史研究室
- 寺澤 薫 1988「矢部遺跡」奈良県立橿原考古学研究所

- 丹羽祐一・藤井雄三 1988『遺跡が語りかける—高松の古代文化』高松市立図書館
- 長谷川修一・横瀬広司・斎藤 実 1989『四国の地形と地質』『支部創立30周年記念出版「30年のあゆみ」』土質工学会四国支部
- 花谷 浩編 1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会
- 原田昌則編 1987『東郷遺跡(第20次調査)発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』
榎八尾市文化財調査研究会
- 福永伸哉 1990『主軸斜交主体部考』『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室
- 藤井雄三編 1986『かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書』高松市教育委員会
- 藤田憲司 1976『讃岐の石棺』『倉敷考古館研究集報12』倉敷考古館
- 藤好史郎 1996『小山・南谷遺跡』『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成7年度』
榎香川県埋蔵文化財調査センター
- 古瀬清秀 1985『原始古代の寒川町』『寒川町史』寒川町
- 古野徳久ほか 1990『国分寺下日名代遺跡』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成元年度』
日本道路公団・香川県教育委員会・榎香川県埋蔵文化財調査センター
- 北條芳隆 1986『墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価—成立当初の畿内と吉備の比較から—』『考古学研究第32巻第4号』考古学研究会
- 北條芳隆 1987『墳丘と方位からみた七つ坑1号墳の位置』『岡山市七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団
- 北條芳隆 1990『墳丘築成における土壇の意味』『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室
埋蔵文化財研究会編
- 1988『第24回埋蔵文化財研究会 定量化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会
- 埋蔵文化財研究会編 1989『第25回埋蔵文化財研究会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』埋蔵文化財研究会
- 間壁忠彦・間壁巖子 1974『石棺研究ノート(1・2)』『倉敷考古館研究集報9・10』倉敷考古館
- 真下拓也 1993『周溝墓群』『空港跡地遺跡発掘調査概報平成4年度』香川県教育委員会・榎香川県埋蔵文化財調査センター
- 松尾忠幸編 1996『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告』国分寺町教育委員会
- 松下 勝 1990『播磨のなかの四国系土器』『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
- 松永住美・河野雄次・吉成克剛 1985『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会
- 松本豊胤 1971『高松市円養寺遺跡調査概報』高松市教育委員会
- 松本豊胤 1983『高松市茶臼山古墳』『香川の前古墳』日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会
- 松本豊胤ほか編 1983『香川の前古墳』日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会
- 松本敏三・岩橋 孝 1983『讃岐青銅器図録』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 宮崎哲治編 1993『高松自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊林・坊城遺跡』香川県教育委員会・
榎香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 森 格也・古野徳久編 1995『高松自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・
榎香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 森下英治 1992『周溝墓群』『空港跡地遺跡発掘調査概報平成3年度』香川県教育委員会・榎香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治 1996『香川県の石器組成の変遷』『国立歴史民俗博物館資料調査報告書7 農耕開始期の石器組成1』

国立歴史民俗博物館

- 森下英治ほか 1990『国分寺六ツ目遺跡』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成元年度』日本道路公団・香川県教育委員会・姉香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治ほか 1992『中間西井坪遺跡』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成3年度』日本道路公団・香川県教育委員会・姉香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治ほか 1993『泉道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 尾崎西遺跡 平成4年度』姉香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下友子ほか 1995『小山・南谷遺跡』『泉道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成6年度』香川県教育委員会・姉香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下浩行 1983『高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺』『香川考古 創刊号』香川考古刊行会
- 森下浩行ほか 1993『高松市長崎鼻古墳の測量調査報告』『香川考古 第2号』香川考古刊行会
- 山田隆一編 1991『八尾南遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
- 山本三郎 1980『畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点—埋葬施設の構造を中心として—』『ヒストリア87』大阪歴史学会
- 山本三郎 1995『竪穴式石室』『季刊考古学 52号』雄山閣
- 山元敏裕 1991『彌防神社遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度』香川県教育委員会
- 山元敏裕 1993『石器の組成と形態的特徴』『浴・長池遺跡—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 山元敏裕 1996『長尾町福荷山古墳採集の土器について』『香川考古第5号』香川考古刊行会
- 山元敏裕編 1993『浴・長池遺跡—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 山元敏裕編 1994a『浴・松ノ木遺跡—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 山元敏裕編 1994b『浴・長池遺跡II—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 山元敏裕編 1995a『井出東1遺跡—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 山元敏裕編 1995b『尾石遺跡—一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局
- 吉留秀敏 1989『九州の割竹形木棺』『古文化談叢第20集』九州古文化研究会
- 米田敏幸 1986『中田1丁目39番地出土土器』『八尾市文化財紀要2』八尾市教育委員会文化財室
- 米田敏幸編 1981『八尾南遺跡—高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書—』八尾南遺跡調査会
- 渡部明夫 1994『四国の割竹式石棺』『古代文化46-6』古代学協会
- 渡部明夫 1995『香川の割竹式石棺—石棺の創出と移動—』『瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版
- 渡部明夫編 1977『阿の御堂古墳群調査概報』綾南町教育委員会
- 渡部明夫・藤井雄三 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会
- 渡辺貞幸 1979『獸形石の基礎的研究』『島根大学法文学部紀要・文学科編 第2号』
- 和田晴吾 1987『古墳時代の時期区分をめぐる』『考古学研究 第34巻 第2号』考古学研究会

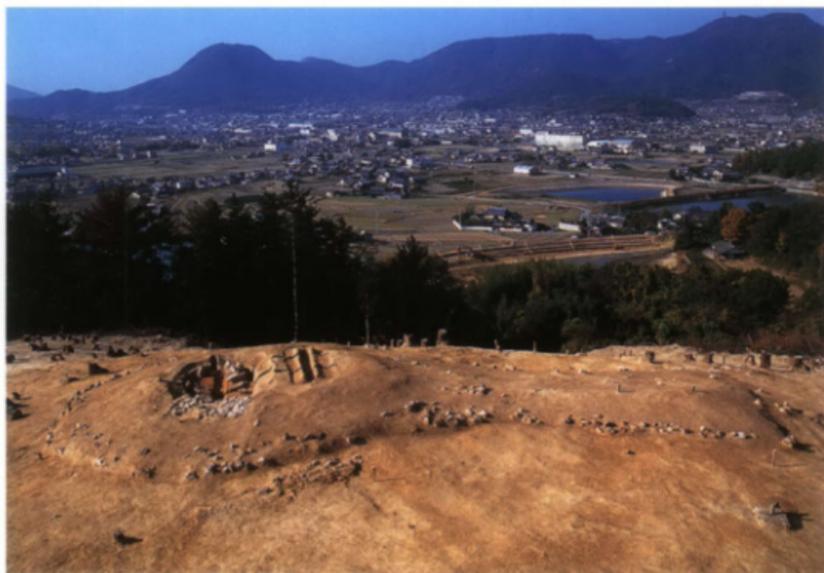
和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』講談社

和田正夫・松浦正一 1951「快天山古墳発掘調査報告書」『香川県史跡名勝天然記念物調査報告書15』香川県史跡
名勝天然記念物調査会

圖 版



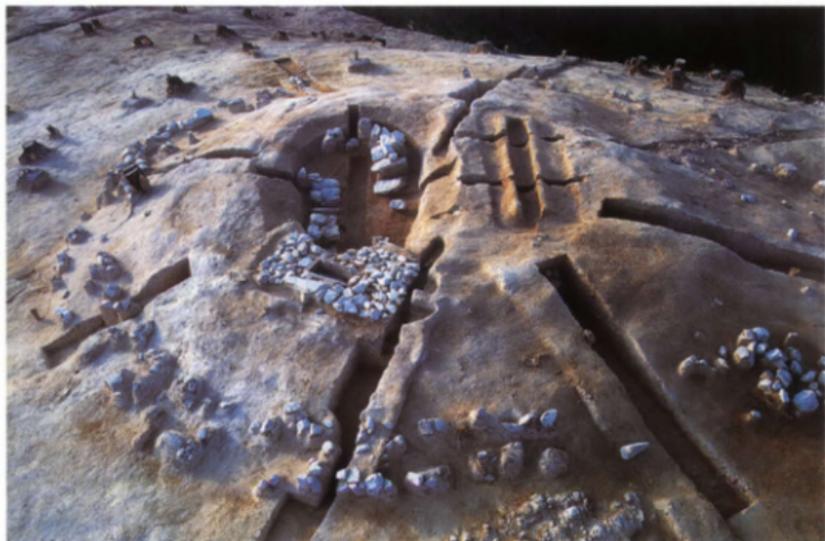
国分寺六ツ目古墳速景（南東より）



国分寺六ツ目古墳全景（丘陵部側から国分寺平野を望む）



墳丘全景



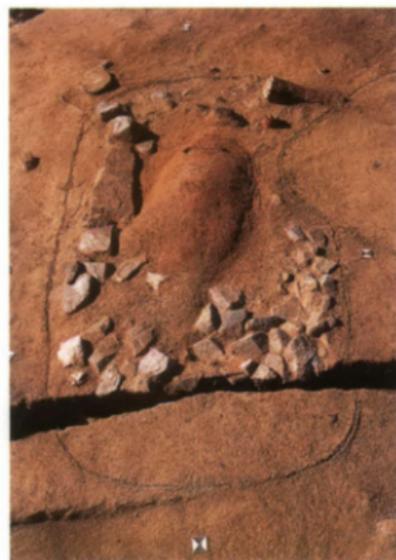
後円部埋葬主体部全景（南東より）



第1主体部（南東より）



第2主体部（西より）



第3主体部粘土被覆状況（北より）



第3主体部（南より）



第1主体部土器出土状況（上面より）



第1主体部土器出土状況（東より）



平野部から見た国分寺六ツ目古墳



説明会風景



墳丘全景（南東より）



墳丘全景（北東より）



後円部南東側列石検出面



後円部南西側填丘検出面



墳丘検出状況（後円部～くびれ部）



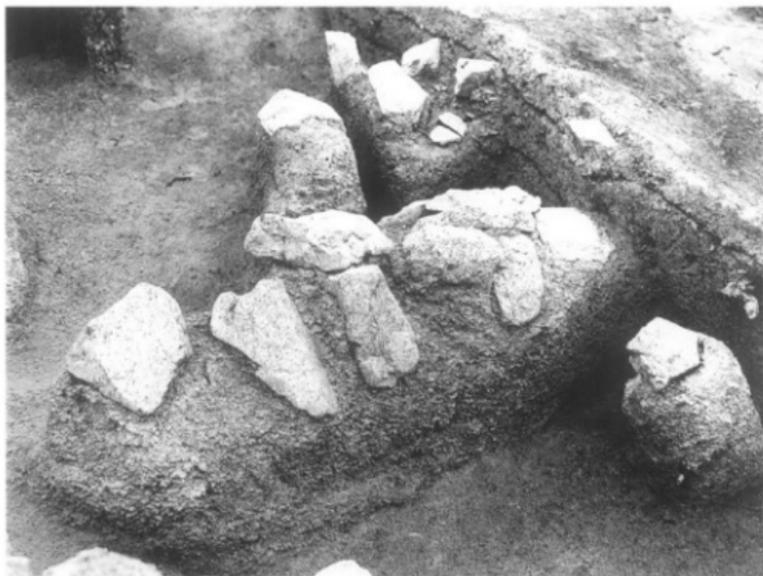
墳丘検出状況（前方部）



前方部墳裾列石（北東より）



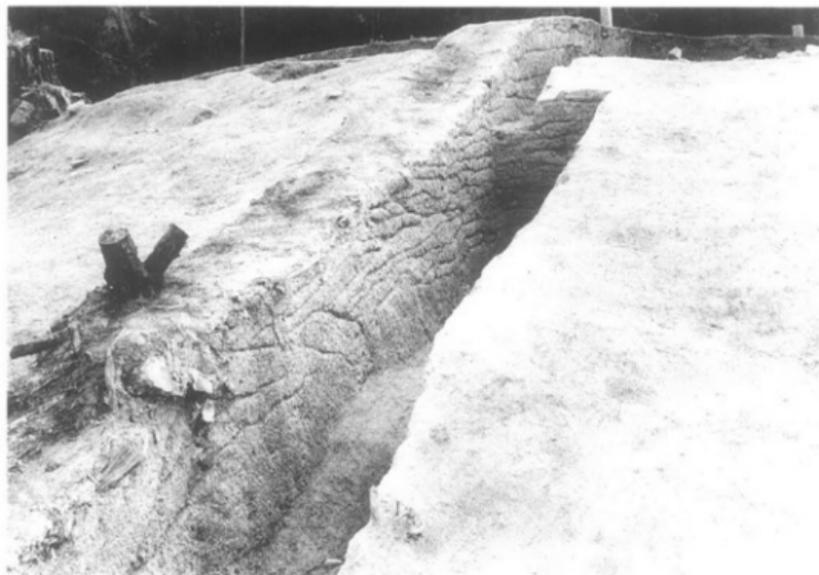
後円部K-Lライン列石下部土層



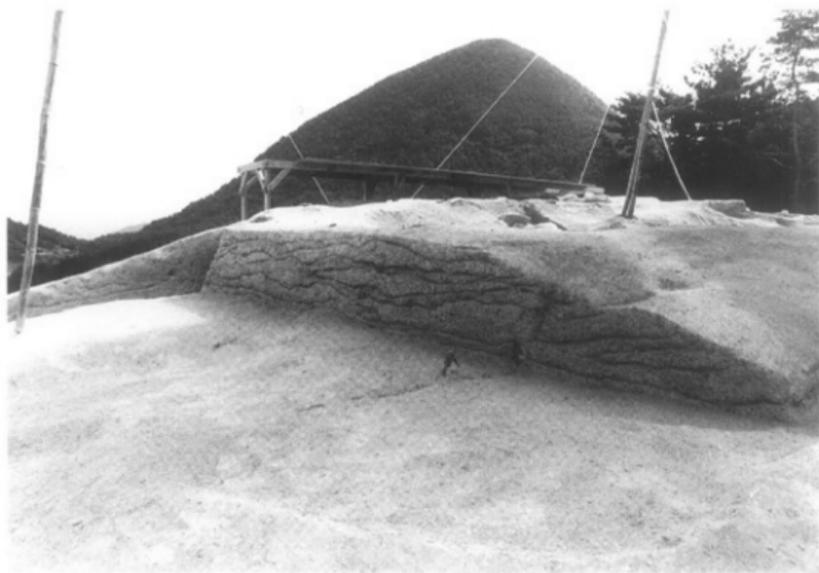
後円部下端立石（南西端）



後円部墳裾（南西より）



後円部C-Dライン盛土断面（西より）



後円部盛土状況（西より）



後円部A-Bライン



前方部A-Bライン



前方部前端A-Bライン



前方部前端A-Bライン



くびれ部西側墳裾(北より)



くびれ部M-Nライン



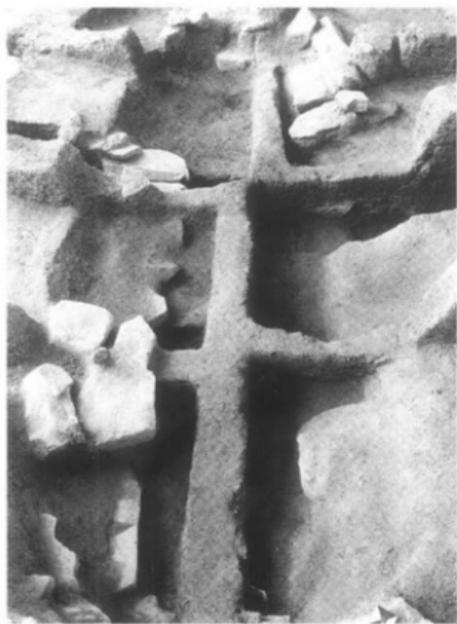
墳丘完掘状況（前方部より）



前方部西側土器群出土状況



後円部主体部検出状況（南東より）



第1主体部盗掘坑掘削前状況（南東より）



第1主体部割竹形木棺痕跡検出状況(南東より)



第1主体部横断面土層(南東より)



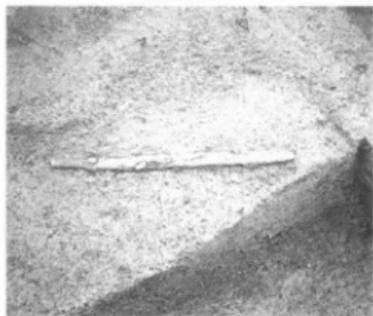
第1主体部棺外副葬品検出状況(南東より)



第1主体部棺外副葬品検出状況（棺西側）



第1主体部副葬品検出状況（南東より）



第1主体部鉄刀出土状況（東より）



第1主体部鉄剣出土状況（北東より）



第1主体部鉄斧・ヤリガンナ出土状況（北東より）



第1主体部北西側石積



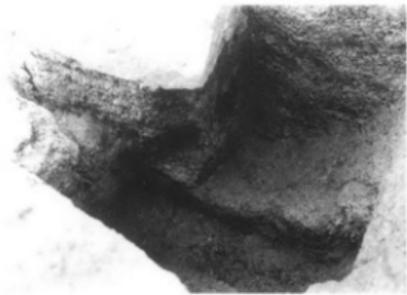
第1主体部南東側石積



第1主体部中央南側石積



第1主体部北西小口部広口壺出土状況



広口壺取り上げ後



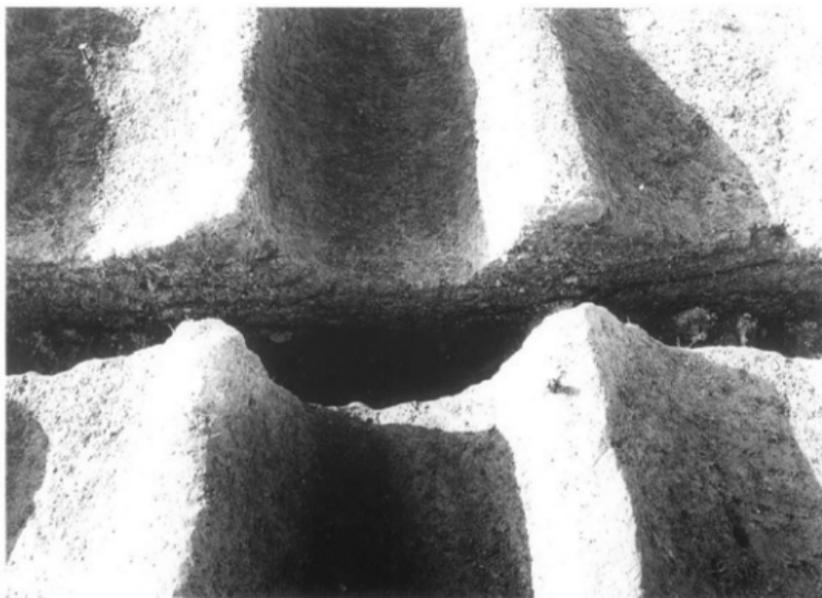
第1主体部棺床断面（東より）



第2主体部調査状況（南東より）



第2主体部完掘状況（南東より）



第2主体部棺床断面（南東より）



第3主体部被覆粘土除去状況（北東より）



第3主体部石棺上面検出状況（北東より）



第3主体部石棺上面粘土被覆状況（北西より）



第3主体部礎敷面（南東より）



第3主体部棺周辺礎除去状況（北東より）



第3主体部棺底粘土分布状況（南西より）



第3主体部墓坑完掘状況（南西より）



第3主体部棺底断面（南東より）



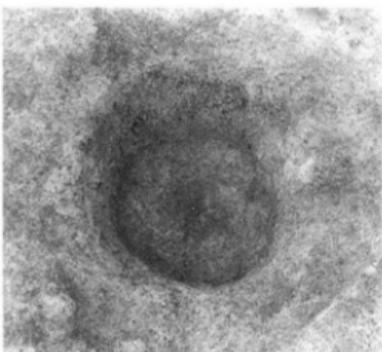
石組遺構 S X-01 遺物出土状況 (北西より)



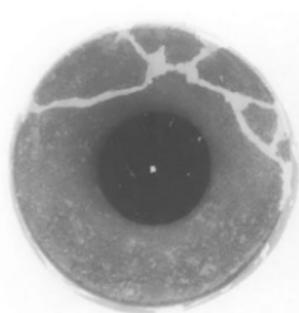
石組遺構 S X-01 礫床面検出状況(北西より)



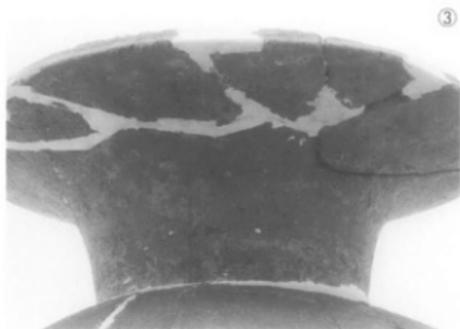
石組遺構 S X-01 礫床除去状況 (南西より)



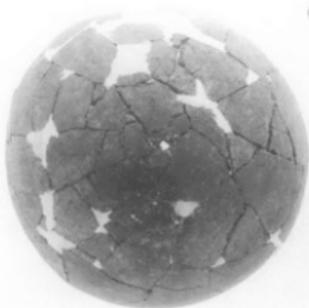
石組遺構 S X-01 完掘状況



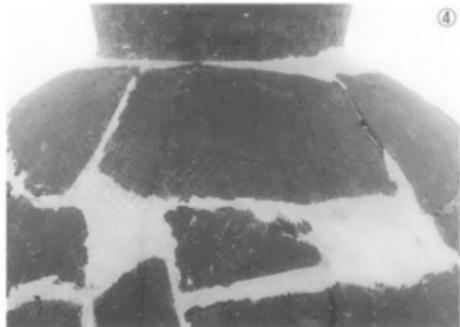
①



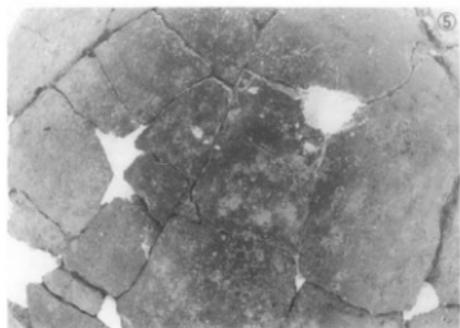
③



②

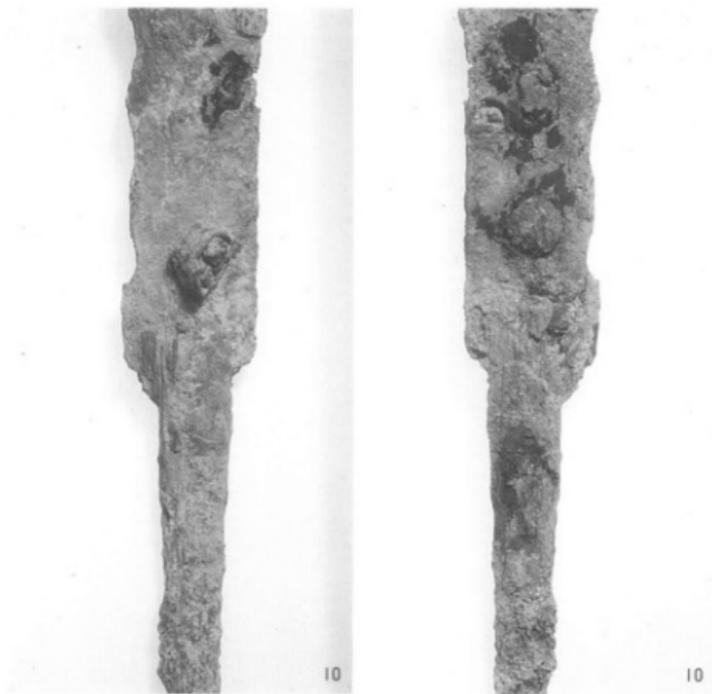
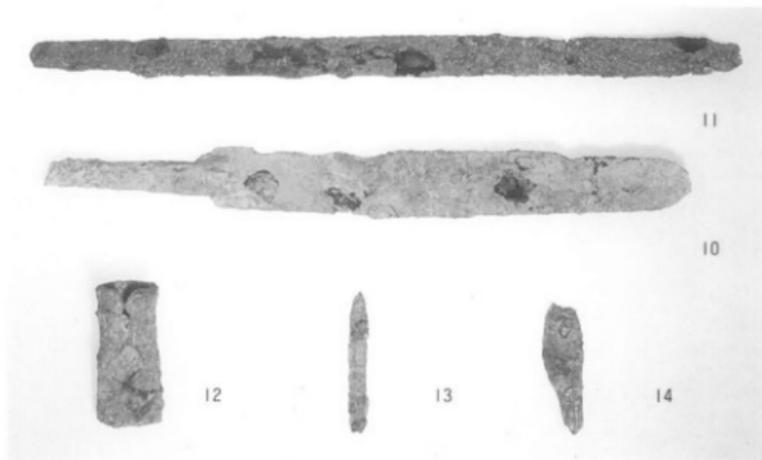


④



⑤

- 1 上面部
- 2 底面部
- 3 口颈部
- 4 肩部
- 5 体部



第1主体部出土铁器



13



13



14



12



12

第1主体部出土鉄器



8



1



1



2



8



1

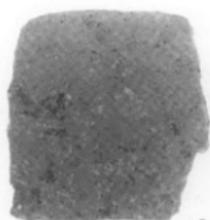


1



2

墳丘出土遺物



6



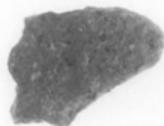
4



6



4



6



5



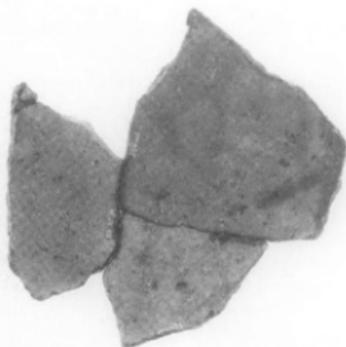
6



5



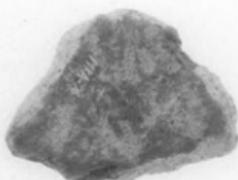
3



3



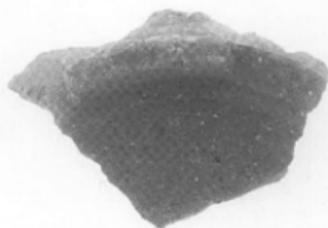
7



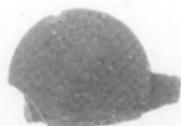
7



15



17



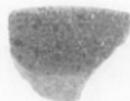
19



20



16



18



15



17



19



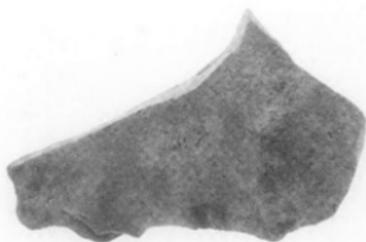
20



16



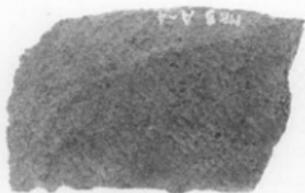
18



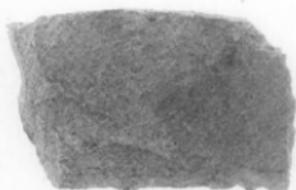
22



22



21



21

その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こくぶんじむつめこふん							
書名	国分寺六ツ目古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第二十八冊							
編著者名	森下英治・朽津信明・白石 純							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4				TEL0877-48-2191			
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団							
発行年月日	西暦 1997年8月29日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数		
154 P	10 P	114 P	0 P	30 P	62 枚	74 枚		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 “ ”	東経 “ ”	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こくぶんじむつめ 国分寺六ツ 目古墳	かがひけんあまつたかふん 香川県綾歌郡 国分寺町			34度 17分 10秒	133度 58分 30秒	19890901 ～ 19891228	900	四国横断 自動車道 建設に伴 う調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国分寺六ツ 目古墳	古墳	古墳時代 奈良時代	前方後円墳 石組遺構		土師器・鉄刀・鉄剣 鉄斧・刀子・ヤリガン ナ 須恵器			

**四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告**

第二十八冊

国分寺六ツ目古墳

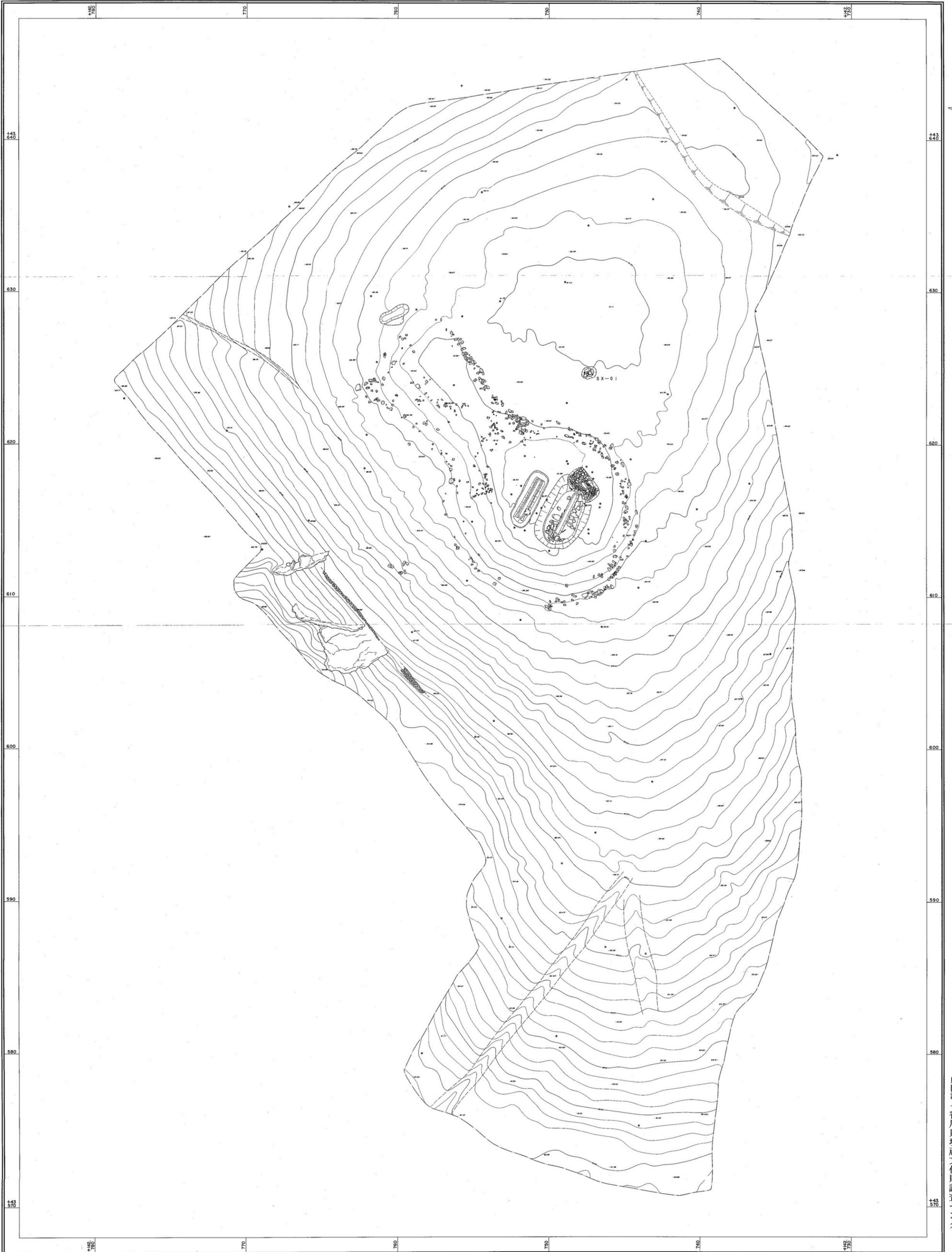
平成9年8月29日 発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 香川県板出市府中町字南谷5001番地の4
電話 (0877) 48-2191

発行 香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

印刷 セ キ 株 式 会 社

付図1 国分寺六ツ目古墳周辺地形図(1/100)



財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

撮影 平成元年11月カメラRMK
測図 平成2年1月オートグラフA1, ステレオプロッターA8
座標系 測尺系
等高線間隔 25cm

1:100



付図2 国分寺六ツ目古墳墳丘測量図(1/50)



撮影 平成元年11月カメラRMK
測図 平成2年1月オートグラフA7, ステレオプロッターA8
座標系 第Ⅱ系
等高線間隔 5cm

